

Overline

空野 流星

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヴィランと呼ばれる世界。

3賢者が人々を導き、魔法に優れた者が絶対的な権力を持つ。

ここ、魔道都市ヴィネティアはそんなヴィランの中心街である。

最大規模の魔法学園“ラタトクス学園”への入学を求め、多くの学生達がこの街を目指す。

僕、桂木（かつらぎ）葉助（ようすけ）はその学園の生徒である。

しかし、その実力は下から数えた方が早い落ちこぼれなのだが……

落ちこぼれ仲間の村田（むらた）健司（けんじ）と楽しく平和な学園生活を過ごして

いたのだが、この日を境に僕の運命は大きく変わる事となる。
そう、この転校生——レイによって。

目次

前編

登場人物	1
謎の転校生現る！	6
作戦会議	20
実技試験	25
迷宮の番人	33
幽霊事件	51
探索開始	57
幽霊の正体	71
柊誠という男	79
夏休み	85
不吉な予感	101

後編

文化祭	122
文化祭？	140
夢から覚めて	153
平穩の終わり	167
変貌した学び舎	176
その男の真意	186
刻まれた真実の記憶	205
決戦の時	218
全てを失った男	248
登場人物	257
魔銃使い	261
喪失の先	272

運命の日	278
初めての仕事	289
新たな魔銃	309
最悪の再会	317
背負うもの	327
オペレーションナガルザル	333
二度目の別れ	344
復讐者	356
桜散る時	367
あの日の記憶	376
もう一度2人で	386
新天地へ	396
境界移動（ラインズワープ）	410

セレニティア	426
リヴァイアス家を目指して	441
生きていた主	453
思いのままに	468
時空龍殺し	483
光の剣	498
無名の英雄	509

前編

登場人物

桂木葉助
かつらぎようすけ

本作の主人公。

男性 18歳 身長164cm 体重60kg

黒髪の短髪、瞳はダークブルー。少し大きめの黒縁眼鏡。

やや線の細めの体系、俗に言うもやし男子。

ラタトクス学園1年生。

奇跡的にラタトクス学園の試験を通過出来た青年。

その実力は学園でも最下位クラス。

生真面目な性格で魔法の鍛錬も欠かしていないが、伸び悩んでいる。

実は黒島が生み出したRシリーズの実験型7号であった。

そのため、4属性の魔法を扱う事が出来るが、かなり燃費が悪い。

村田健司
むらたけんじ

主人公の落ちこぼれ仲間にして悪友。

男性 18歳 身長178cm 体重71kg

茶髪の短髪、瞳はダークブラウン。髪は染めた色である。

ガツチリとした筋肉質の体系。

ラタトクス学園1年生。

奇跡的にラタトクス学園の試験を通過出来た青年。

その実力は学園でも最下位クラスであり、葉助以下。

筋肉至上主義、体を鍛えれば強くなれると勘違いしている。

葉助とは入学式で仲良くなって以来ずっと一緒に行動している。

エーテル属性は火と雷の攻撃型。

レイ・ラグナール

ラタトクス学園に突然転校して来た謎多き人物。

男性 18歳 身長159cm 体重53kg

金の長髪、瞳はライトグリーン。

中性的な容姿と細い体格。

ラタトクス学園1年生。

ラタトクス学園に突如として転校してきた。

3賢者の一人、カスパ・ラグナールと同じ姓を持つが血縁者かどうかは詳細不明であ

る。

天性の才能を持ち、その実力はおそらく学園トップレベル。実は黒島と共に別な世界からやって来た異邦人であった。

エーテル属性は火と水のバランス型。

キャシー・ダグラス

葉助のクラスの担任教師。

女性 22歳 身長149cm 体重43kg

茶色のショートカット、瞳はライトブラウン。

ややつり目で、細身に胸の発育はよろしくない。

ラタトクス学園の卒業生であり、卒業後にそのまま教師となった。

生徒達には怒らすとヤバイ教師No.1として認識される程の鬼教師である。

実力には問題ないな、教師としての評価はイマイチのようである。

余談だが、年齢^{ひいらぎまこと}彼氏いない歴のようだ。

柊 誠

主人公である葉助の兄。

男性 22歳 身長186cm 体重78kg

黒髪でぼさぼさの短髪、瞳はダークブルー。

葉助と同じやや線の細めの体系。

現在は無職、寮で住み込みの手伝いをしている。

ラタトクス学園を主席卒業した超エリートなのだが、性格にかなりの難あり。

優柔不断で気分屋、よく周りを引つ掻き回す。

葉助と苗字が違うのは、両親が離婚しており、各々の親に引き取られたためである。

キャシーとは元クラスメイト。

くろしまてるお
黒島輝夫

魔道都市ヴェネティアの市長にしてラタトクス学園の学園長。

男性 51歳 身長175cm 体重69kg

白髪の短髪、瞳はライトゴールド。

年齢の割には鍛えているため、がっちりとした体格。

かなりの切れ者で狡猾な性格。その手腕は本物で、ヴェネティアの発展は彼無しでは成し得なかった。

は成し得なかった。

時空龍達の推薦で市長となったらしいが、彼の詳しい経緯は不明である。

正体は、レイと共に別世界からやって来た異邦人である。

彼の目的は、自分の故郷の世界への帰還と支配であった。

ラタトクス学園では制服の着用が義務付けられている。

在籍中は休日も制服着用が強制されている。

橙色のブレザーに男子は緑色のチェックのズボン、女子は緑色のチェックのスカート。

教師は男女共通でスーツ着用である。

謎の転校生現る！

炎が唸りをあげ、真夜中の闇を照らし出す。

辺りには真つ赤な絨毯が敷き詰められ、吐き気を催すような匂いが充満している。そこで二人は対峙していた。

「さあ、今こそ。」

青年は真つ赤に装飾された剣を少女へと突きつける。

「どうして！」

少女は涙を流しながら訴える。

少女の足元には彼女の両親が真つ赤な絨毯の上で寝そべっている。

「俺はお前が欲しかった。自分だけのものにしたかった。」

青年は狂気に満ちた笑顔で語る。

少女は、この青年がもう自分の知ってる兄ではないと悟る。

「貴方は誰……?」

その問いに青年は行動で答えた。

「今こそ愛の契りを―」

青年はその血濡れの剣を……

——少女へと振り下ろした。

今日も相変わらず、外から建設機械の音が鳴り響いている。

「なあ葉助、今日転校生が来るって知ってるか？」

授業中であるにもかかわらず、彼……村田健司は平然と話しかけてくる。

「そうなんだ。」

僕は素っ気なく返事を返し、再び窓の外へと視線を戻した。

「……」

ふと視線が合った。

腰まで伸びた綺麗な金髪。

目を見張るほど真っ赤な色のワンピース。

吸い込まれそうな綺麗な緑の瞳。

この場所とは不釣り合いな少女がこちらをずっと見つめている。

「おい、その二人!」

「やっべ!」

健司は慌てて教科書で顔を隠した。

彼女は担任のキャシー・ダグラス先生。

見た目は美人だが、性格がアレという典型的なパターンの人物である。そのせいで、未だに彼氏いない歴記録を更新しまくっている。

「桂木葉助、教科書37Pの上からの文章を読め。」

「は、はい。」

どうやらこれだけで済みそうだ。

健司は横でニヤニヤしている。

「血管の中を流れるモノの一つであるこの物質がエーテル器官から出来たものであって、魔源マナと呼ばれている。」

よくある授業の一風景。

「エーテル器官とは、心臓の一部にある器官です。

火・水・雷・風の4種類のエーテル属性うちの二種類の属性をもっています。」

魔道都市ヴェネティアにある、世界最大規模の魔法学園、ラタトクス学園。

「魔法は人間のイメージと音声——それを魔源^{マナ}を使って変換・具現化して発動させたものである。」

この時の僕達は、その平和がずっと続くと思っていたんだ。

授業の後、先生にみつちりしぼられてから教室に戻った。

どんな風にしぼられたなんて口でいえないくらいの苦痛だった。

「ところで健司、さっきの話の続きを教えてくださいんだけど。」

先生にしぼられながらも、その事だけは覚えていた。
なんて律儀な青年なのだろうか僕は。
自分でも笑えてくるくらいだ。

「なんだよ、やっぱり気になってたんじゃないか。」

そうやって笑いながら僕の肩を叩く。
ちよつと力の入れすぎと思うのだが。

正直痛いんですよ筋肉馬鹿さん。

「そ、それで……転校生が来るっていつてたけど？」

「おうおう、この時期に珍しいと思うだろ？」

確かにそうだ。

新入生ではなく、この6月に転入してくるといふのは珍しい。

「噂なんだが、そいつは超エリート君らしいぞ？」

「エリート君ねえ、でもなんでこの時期なのか。」

「それなんだよなあ、まあ所詮噂だしなんとも言えないよな。」

まあその通りではある。

「そういえば健司。」

ふと、さっきの事を思い出したので健司に尋ねる。

「どうした？」

「さっきさ、外にいた女の子見なかった？」

「は？ お前何言ってるの？」

予想通りの答えが返ってきた。

「だよねえ〜」

僕が見たあの娘は、なんだったのだろうか……

「まあとりあえず帰ろうぜ」

そう言つて健司が歩き出す。

ふと、曲がり角から出てくる人影が見えた。

「あぶな——」

僕の言葉が間に合うはずもなく、二人はゴツンと衝突した。

「いつてて、わりい……」

「——こちらこそすまない」

お互いに立ち上がり視線を交わす。

僕はそれを遠目で見ていた。

相手は初めて見る顔であった。

男とも女ともとれる美貌。

長く綺麗な金髪は後ろで一つに束ねられている。

ふと、先ほど見た少女に似ているなど思った。

「君は……?」

「ああ、実は明日からこの学校で学ぶことになっている。」

僕の疑問の意図に気づき、そう答えた。

「へえ、あんたが噂の転校生か。」

健司も興味津々である。

「私は、レイ・ラグナールだ、よろしく頼む。」

“ラグナール”

健司の言っていた超エリートの意味がそれだけで分かった。

誰もが知る3賢者の一人、カSPA・ラグナール。

その人物と同じ姓を名乗っているのだから……

かつて、人類は魔法を使うことができなかった。

60年程前に訪れた巨大な訪問者——蜥蜴のような姿の者達が現れた

彼らは自分達を時空龍と名乗り、人間達に魔法の知識を与えた。

その知識を初めて伝えられた3人が現在の3賢者である。

“バルト・ザーフィール”

“メル・オルフェン”

そして

“カSPA・ラグナール”

である。

魔術に携わる者であるならば誰もが知っている知識である。

「どうした？」

レイが困ったように首を傾げている。

正直、想像以上の大物であったため、僕も健司も思考が止まってしまっていた。

「な、なんでもないよ。」

とりあえず深呼吸をして高揚した気分を落ち着かせる。

「それで、一つ頼みたい事があるんだが……」

「別にいいけど？」

「実は職員室に行きたいんだが、迷ってしまっただけ。」

困惑してそう言った。

その程度ならいくらでもという所だ。

だが、先ほど職員室から戻ったばかりなんだけどね。

「それならすぐそこだし案内するよ。」

「うえ、また戻るのかよお〜」

健司はうなだれてそう言った。

まあ気持ちにはよく分かるが。

「すまないな……」

「お安い御用だよ。」

こうして俺達三人は職員室へと向かった。

「あら、戻ってきてまだ説教して欲しかったのかしら？」

戻ってきた僕達を見つけてキャシー先生はそう言った。
別にそういうわけではないのだが……

「いえ、職員室までの道案内を頼まれました。」

キャシー先生も僕達の後ろにいるレイに気づいたようで、なるほどねつと呟いた。

「でも丁度良かったわ。 どうせ説明するつもりだったし。」

「と、言いますと?」

「実はレイ君の部屋なんだけど、貴方達と同じ部屋になるのよ。」

えっ、そういうのは前もって言うておくべきなんじゃ?

「ざつき言おうとしたら君たち、説教終わってすぐ戻っちゃうから言いそびれてね。」

偶然というのは時に恐ろしいものである。

「荷物はもう寮に届いてると思うから、2人で手伝ってあげること。」
「分かりました。」

「ああそれと、明日の実技試験の説明もしてあげてね〜」

この先生、色々と丸投げである。

——色々あったが、僕達3人の共同生活が始まる事となった。

作戦会議

「すみません、助かりました。」

やっとの事でレイの荷物の開封設置を終わらせる事ができた。

寮母さんを含み、4人での作業のおかげで、そこまで大変ではなかった。

「これが仕事だからな、気にしなくていい。」

そうやって笑顔を見せる寮母さん。

夕食の支度があると言って、部屋から出て行った。

寮母さんは時空龍の中では珍しく人間との関わりを持つとするタイプだ。

普段は人間の姿になり生活している。

このような例は極稀である。

「ありがとう、助かった。」

「これくらいどうって事ないって！　これから一緒に暮らす仲間だしな。」

——健司はほとんど動いてなかったって突っ込みはしないでおくべきか？

「でも、結構書物が多いね。」

本棚に入れた本を一冊手にとってみる。

“境界移動の原理と考察”
ラインスワープ

「葉助も、こういうのは好きなのか？」

「結構ね。　でも、これって——」

パラパラとページをめくっていく。

境界移動とは、境界線の向こうにあるとされる別世界に行くことだ。
レイ・ライン

それなりの準備が必要だが、境界移動を行うのは、魔法が使えるなら誰でも可能だ。
ラインスワープ
ただし、原則として時空龍達によって境界移動を行うことは禁忌とされている。

「気になるなら好きに読んでもいい。 どうせ同じ部屋だ。」
「うん、そうさせてもらおうよ。」

僕は本を元の棚に戻すと、ポフツツと自分のベッドに腰掛ける。

「さて、明日の実技試験の作戦会議を始めよう。」

「明日の実技試験は、戦闘総合試験なんだ。」

「ほほう。」

レイは興味津々に話に耳を傾けている。

「試験内容は各々のチームが迷宮を脱出するまでを評価される。

もちろん脱出失敗は単位がもらえなくなるね。」

「俺は瀬戸際だから落としたくないんだよなあ。」

健司が切実に語る。

むしろ普段の授業態度を改めればそんな事にはならないと思うんだけど。

「そのチームというのは、どのように決まるんだ？」

「基本的には好きなように組んでいいんだ。」

先生のあの言い方だと多分僕ら3人でチームを組めつて事なんだろう。

おそらくだが、レイの実力は上位クラスだろう。

それでバランスが取れると思っていいそうだなあ、あの先生は。

「そういえばレイのエーテル属性を聞いてなかったね。」

「ああ、私は火と水だ。」

火と水、バランスタイプか。

「僕は水と風、健司は火と雷。バランス的にはちょうどいいかな？」

「確かにそうだな。」

水と風の後方支援タイプ、火と雷の火力特化タイプ。

そこにバランスタイプの水と火である。

「まあコンビネーションは試験中に調整する必要はあるけど、なんとかかなりそうだね。」
「Z z z . . .」

ひどい寝息が聞こえてくる。

どうやら話の途中で健司が寝てしまったらしい。

「私達も早めに休むとするか。」

「そうだね、お休みレイ。」

部屋の明かりを消し、明日の試験に備えて早めに寝る事にした。

実技試験

夢を見ていた。

それはぼんやりとしていて、目覚める頃には忘れてしまう儚い夢。

「私ね、学校で褒められたの！」

「ほう、そうなのか？」

青年の問いに少女は満面の笑みで答える。

「私の魔法がね、すごいゆーしゆーなんだって！」

校長先生も褒めてたよ！」

「そうか、——はさすがだな。」

そう言つて青年は少女の頭を撫でた。

少女は気持ちよさに目を細めた。

「大きくなったらお兄ちゃんのお手伝いしたいの。」

「だからね、私もつともつと頑張るよ！」

「ああ、楽しみにしてるよ。」

いつも同じような、違うような……

でも暖かな、すぐに忘れてしまう儂い夢。

朝のホームルームでレイの紹介がされた。

予想通り女子達の黄色い声が飛び交う結果となり、既に仲の良い僕と健司は睨まれる事となった。

「さて、説明は以上。各自準備が出来次第ダンジョンに転送するわ。」

各々がチームごとに集まっていく。

僕達も三人で集まる。

「さて、そろそろだね。」

「まあ大丈夫だろ！」

自信満々に健司は言う。

「二人とも、よろしく頼む。」

「うん、こちらこそ。」

「腕がなるぜ！」

周りの霧囲気から準備が出来たことを感じ取る。

「では、転送！」

キャシー先生の詠唱が始まり部屋全体が光に包まれる。

ついに試験が始まるのだ。

目を開くとそこには背丈の数倍もあるかと思われる壁に四方を塞がれた部屋だった。

「ここがスタートってわけだな。」

健司は腕をぶんぶん回しながら身体を慣らしている。

レイは注意深く辺りを観察している。

「さて、問題はここからどうやって進むかだね。」

軽く辺りを見回してみると、扉のようなものは見当たらない。

何か仕掛けがありそうだ。

「葉助、特に仕掛けもなさそうだった。」

周りを1週してきたレイが戻ってきた。

どうやら収穫はなさそうだ。

「うーん……」

試験なら何かしらの仕掛けがあるはずだけど……

「めんどくせえ！」

健司はそういうと適当な壁の前に立ち右手を掲げた。
明らかに右手に魔源^{マナ}の収束が感じられる。

“ファイヤーウォールⅡ！”

健司がそう唱えると炎の柱が巻き起こる。

当然の如く壁にはまったく損害はない。

「まったく……後先考えずに。」

——ゴゴゴゴゴ！

先ほどの壁が音と立てて上へと上がっていく。

「ほらな！ うまくいったろ？」

まったく、なんとという……

しかし開かれた通路の先からは怪しげな双眸がこちらを睨んでいた。

「こいつは犬つころのお出ませ。」

現れたのは3匹の狼のような生き物。

ウルフと呼ばれる化け物。

外でもよく現れる最下級の化け物である。

「なるべく魔源マナの消費は抑えておきたいね。」

そうやって僕は詠唱を始める。

“ ウインドカッター！ ”

風の真空波が3匹のウルフを襲う。

「レイよろしくー！」

一瞬驚いたような表情を見せるが、すぐに行動に移した。

“ ファイヤールウオールⅡ！ ”

炎の柱がウルフ達を焼き尽くす。

やがてウルフ達は光の粉を撒き散らして消滅した。

「合わせるにしても唐突すぎるぞ。」

「ごめんごめん、でも信じてたよ。」

などと都合の良い事を言っているわけだが。
大丈夫だろうと踏んでの行動だった。

「さっさと行こうぜ？　時間ももつたないしな。」

そう言って健司が先導を切って前へと進んでいく。
お前はもう少し頭を使ってくれ……

「行こう。」

僕とレイもその後続いた。

迷宮の番人

それから同じような仕掛けが続いた。

怪しい壁に魔法を当て、扉の開いていく単調な作業。

しかし、それは確実の僕達の魔源マナを削っていった。

これがこの試験の本質なのだろう。

ならば、行き着いた先にこそ本当の試験があるのではと考えてしまう。

「葉助、どうした？」

僕の表情が気になったのか、レイが尋ねてきた。

「実はこの単調の仕掛けの意味を考えてたんだよ。」

僕が率直に答えると、レイは納得したような顔をした。

「それは私も気になっていた。

明らかに魔源^{マナ}を消費させるために意図した仕掛けとしか思えない。」

「どうやら同じ結論に至っていたようだ。

まあさつきから突き進んでいる健司といえれば……

「ははっ、俺に任せとけば試験なんて楽勝だぜ！」

“サンダーボルトー！”

「ほら開いたぜ。」

——これである。

「待つて、この先は今までと違うみたいだ。」

開いた扉の先は、今までと違い大きく開けた部屋であった。

「やあ、おめでとう。」

男の声が響く。

広い部屋の中央に一人の男が立っていた。

その男はよく知る人物であった。

「火内先生……？」

2期生の担任である火内先生が何故かそこにいた。

「君達は無事に試験クリアだ。

後ろにあるゲートを通れば元の場所に戻れるよ。」

そうは言っても何か引つかかる。

ゲートを通るだけならわざわざここで待つ必要はない。

レイと健司も終わってない事を悟り、臨戦態勢になる。

「いやあ、実に賢いね君達は。
そう、僕が最後の試験さ。」

いつもの笑顔を絶やさずに向こうも構える。

——ゴクリ。

「本気でかかってきなさい。」

空気の重さを肌で体感できる重圧感。

冷や汗が額から頬を撫で、床へと滴り落ちる。

お互い視線を絡み合わせ、長い沈黙が続く。

しかし、一瞬かもしれない……

“サンダーボルトⅡ！”

先に動いたのは健司だった。

雷が火内先生めがけて落ちる。

“マジックシールドⅢ”

火内先生の周りに魔法障壁が現れ、雷を打ち消した。

あの防御魔法はかなり強力な障壁である。

並の魔法は通用しないだろう。

「細かい攻撃で相手の魔源^{マナ}を削るか、強力な魔法で一気に攻めるか——どうする。」

「俺はお前の作戦に合わせるぜ。」

「私もだ。」

二人は僕を信用してくれている。

ここまで来るのに、3人共魔源^{マナ}をかなり消耗している、長期戦は不利だ。

「よし、一気に攻めよう！ 健司、全力で頼む！」

「任しとけ！」

健司が詠唱を始める。

一撃で決めるには一番火力のある健司の攻撃が決めて手となる。

“ ウィンドカッターⅡ！ ”

強力な風の衝撃の波を火内先生へと向けて放つ。

——ガキン！

当然の如くそれは魔法障壁によって弾かれた。
しかし、間髪入れずに僕は続ける。

“ ウィンドカッターⅡ！ ”

——ガキン！

同じく魔法障壁によって弾かれる。
所詮は時間稼ぎだ、問題ない。

“ファイヤーウォールⅡ！”

レイも僕の攻撃に合わせる。

「待たせたな！」

真打登場とばかりに健司が笑顔を見せる。

頼んだぞ健司！

“フレイムタワーⅢ！”

強烈な炎の柱が魔法障壁ごと火内先生を覆った。
火内先生の顔が驚きに変わる。

パリーン！

魔法障壁が碎ける音。

僕達の勝利の音でもある。

「……………」

火内先生がそのまま立つ尽くしている。

これで合格なのか……………？

「ふふふ……………さすがですね。」

火内先生の表情に笑みが浮かぶ。

その笑みの不気味さに嫌な汗が流れる。

「き、き、き君達はははは……………」

「な、なんだ？」

急に火内先生の話し方が変になる。

刹那……

——グチャリ

火内先生の顔が割れた。

「え……？」

この世のものとは思えない状況に絶句してしまう。

「クケケケケケケ！」

とても人間とは思えない笑い声を上げながらこちらに向かって走ってくる。割れた頭部からは、うねうねと触手のような物が生えていた。

“ まずい！ ”

とつさに魔法障壁を張ったが遅かった。

「うっ！」

触手を鞭のように振り回し、魔法障壁を貫通したそれは僕の身体を吹き飛ばした。

ドン！ と背中に鈍い痛みが走る。

部屋の隅まで吹き飛ばされた事に気づくまでそれなりの時間がかかった。

朦朧とする意識の中で状況を確認する。

健司も同じように反対側の隅まで吹き飛ばされ気絶していた。

非常にまずい状況だ。

現実じゃないと否定したくなる。

こんなの——試験なんかじゃない！

レイ……逃げるんだ……

声にならない声をあげる。

化け物はレイの目の前まで迫っていた。

——ああ、ダメだ。

無理矢理繋ぎとめていた意識が途切れかける。

「レ……イ……」

—
—
—

“諦めないで”

声が聞こえたような気がする。

“——ならきつと”

少女。　そう、どこかで見たことがあるような……

“——で——”

よく聞き取れない。

何かを訴えようとしているのだろうか？

少女は右手を差し伸べた。

何故だろう。

でも無意識に僕は、その手をとった。

「僕は……俺は……誰だ？」

混乱する思考。

突如流れ込む情報の奔流。

脳の回路が焼き切れんばかりの熱を帯びる。

刹那——それは弾けた。

夢を見ていた。

それはぼんやりとしていて、目覚める頃には忘れてしまう儚い夢。
手で触れると消えてしまいそうで……

「……」

目が覚めた。

おぼろげな意識が徐々に回復していく。

そしてここが保健室だという事に気づく。

「——あれ？」

確か試験の最中だったはずなのだが。

なぜ保健室で寝ているのだろう。

順番に気絶する前の記憶を整理していく。

今日が試験だった事。

相変わらず健司が無鉄砲だった事。

そして、変異した火内先生の事。

——そうだ！

慌てて辺りを見渡す。

隣のベッドには健司が眠っていた。

いない。

レイがいないのだ。

——ガラガラ

保健室の扉が開く音が聞こえる。

あ……

「む、目が覚めたか？」

保健室への来訪者はレイだった。

姿を見る限りどこにも怪我はなさそうだ。

「無事だったんだね！」

彼が無事な事に安堵する。

レイはその僕の反応にあきれたように首を振る。

「あれだけ魔源マナを消費しておいてよく言う。

下手すると死んでいたのはお前だぞ？」

えっ？

レイの一言に思考が停止する。

どういう事なんだ……？

まったく身に覚えのない事である。

僕はあの時気絶して――

ドクン！

――キゼツシテイタハズ

そう、僕は……

――

――

――

薄暗い部屋の中で二人の男が密談を交わしている。

一人は椅子にもたれかかり、もう一人はその正面に立っている。

「首尾はどうだ？」

座っている男が尋ねる。

「ただいまデータの解析中です。」

そうか、と言って男は唇は吊り上げる。

「我々の悲願を叶えるため、ミスは許されんぞ？」

「わかっております。失敗作の処理も済ませておきました。」

そう言つて男は火内一男の写真と資料を机に置いた。

まあ、死体は跡形もありませんでしたが、と付け加える。

「失敗作も少しは役に立ったようだな。では、次のフェーズに取り掛かれ。」
「御意……」

男は部屋から退出し、椅子の男だけが残る。

「もうすぐだ、もうすぐ……」

幽霊事件

夢を見ていた。

それはぼんやりとしていて、目覚める頃には忘れてしまう儚い夢。

「ねえ、今度はいつ帰ってこれるの？」

「そうだな、お前がいい子にしていたらすぐだ。」

そう言つて青年は少女の頭を撫でた。

少女はいつものように、気持ち良さに目を細めた。

「では行つてくるよ」

一瞬だけ触れ合うお互いの手のひら。

その感触が、やけに現実味を帯びた感触だった。

“力を貸してあげる”

急速に意識が覚醒した。

「おい葉助？ 聞いてるか？」

目が覚めると健司が心配そうにこっちを見ている。

「ん……う？」

「どうした、疲れてるのか？」

どうやら話を聞いている途中で寝てしまっていたらしい。
何か夢を見ていたような気がするが——思い出せない。

「ごめんごめん、それで何の話だっけ？」

「だーかーらー！ 出るんだよ！」

「えっ……っ？」

ゴホン、と一度咳払いをする。

「幽霊だよ。」

——はあ、その手の話だったか。

「この寮に出るらしいぜ、幽霊がよー！」

突拍子もない話で盛り上がる健司。

何かトラブルめいた話が好きなのは知っていたが幽霊ねえ……

「で、その幽霊がこの寮に出るって？」

「そうなんだよ、夜中の2時になると出るらしい。」

なんともお決まりのパターンだ。

「で、続きは？」

「いや、これだけだが？」

「——えっ？」

それだけ？

怖い話つてのはそこから発展していくもんじゃ？

「それだけだぜー！」

「——あつそ。」

席から立ち上がり教室から出ようとする。

「おいおい待てよ！ 今日そいつを見に行こうぜ！」

「へっ？」

あまりにも非現実的な提案に間の抜けた声が漏れてしまう。

「だからさ、俺達でその幽霊を捕まえようぜ！」

「いや、無理でしょ？」

「そんなのやってみなきゃわかんないだろ！」

これ以上は突っ込めないと判断し、レイに話を振ってみることにした。

「レイはどう思う？」

「——面白そうだな。」

レイはニヤリとしてそう答えた。

ああ、これはやられたな。

どうやら最初から決定事項だったらしい。

「そこまで言うからには作戦はあるんだよね……？」

二人の目論見にまんまと嵌ったわけだが。

そこまで言うからにはきつと何か考えがあるんだろう。
まさかあのレイが考え無しに言い出すなんて事は――

「無(な)い(な)……」

「……」

この状況、どうすればいいのだろう。

頭を抱えてその場にうずくまりたかった。

むしろ穴があつたら入りたい。

「まあそういうわけで、2時に搜索開始な！」

ああ、無視してゆつくり眠りたい……

誰かこの二人を止めてくれ。

こうして無理矢理幽霊探索へと駆り出される事となった。

探索開始

”目覚めよ”

——声が聞こえる。

”お前は何者だ?”

聞き覚えの無い声だ。

”お前はなんのために生まれ出た?”

——?

”お前の使命はなんだ?”

何を言っているのかさっぱりわからない。

”それはお前自身がよく知る事だ”

分からない。　僕は……

“目覚めよ”

僕は……

最悪の目覚めである。

いわゆるごつつんこ現象。

漫画なんかでよくあるアレだ。

目の前には頭を抑えて沈黙しているレイの姿がある。

——それは数分前

「うわあああ！」

急速に意識が覚醒する。

刹那……

——ゴツン！

頭部に鈍い痛みが走る。

何か硬いものに額を打ったようだ。

「んくっ！」

誰かの呻き声が聞こえてくる。

徐々に意識が覚醒していき、その状況に気づいた。

目の前には頭を抑えて呻いているレイの姿。
何が起こったかは明白であった。

再び僕の思考は停止してしまっていた。

——そして今に至る。

とりあえずどうするべきなのか……

A：謝る。

B：なだめる。

C：寝る

——プランCで行こうか。

再びに布団の中に潜ろうとしたが……

がしつと腕を捕まれてしまった。

「寝るな！」

「いや、その……」

「行くぞ。」

有無を言わずに連行されてしまった。

「やっと来たか、遅いぞ？」

「……」

「どうしたんだ？」

僕とレイの沈黙に困惑する健司。

軽く頭を掻き少し考え込むように俯く。

「まあなんだ、行くこうぜ？」

探索を始めて10分、相変わらず重い空気が流れていた。

「……」

「……」

僕とレイはお互い距離を離し、顔を合わせないように歩いていた。

その様子を見て健司はどうしていいかわからず、頭を掻いたり、うーと唸ったりしている。

明かりの消えている寮内を彷徨い歩く3人。

手元にある懐中電灯のみが先を照らす命綱だ。

ふと、先頭の健司が足を止めた。

「どうかした?」

「健司に尋ねてみるが返事がない。
何故か硬直しているようにも見える。」

「健司……?」

「——レ」

「えっ?」

「トイレ……」

予想外の返答が健司から帰ってきた。
呆れて何も言えない。

「いいか、待っていてくれよな!」

健司は懐中電灯をもったままトイレに駆け込んでいった。
おかげさまであたりは暗闇に包まれた。

「……」

暗闇と静寂が辺りを支配している。
互いの呼吸だけが聞こえてくる。

「レイ、さつきは……」

「いや、いい。」

そう言って遮られた。

まだ怒っているのだろうか？

暗闇のせいでレイの表情は分からない。

「なあ葉助？」

「ん？」

「うなされてたが、悪い夢でも見たのか？」

そう指摘される。

確かに嫌な夢を見ていたような。

そもそも最近変な夢を見ることが多いような……

“——”

どこかで……？

「葉助？」

「——いや、なんでもないよ。」

「健司遅いな、ちよつと見てくる。」

そう言つてレイもトイレへと入つていった。

しかし二人とも遅い……

あれから数分立つが戻ってくる気配はない。

周りは静寂が支配する暗闇。

その暗闇がどんどん僕の不安を押し広げていった。

「見てくるか……」

そう口にして立ち上がる。

——その時だ。

何かが横切った。

暗闇であるはずのこの空間でそう認識できた。

「……?」

“——”

ああ、この子は前にも会ったな。

そこにはかつて見た少女が立っていた。

「君は……?」

「……」

少女は何も答えない。

口も開かず、表情の見せず、人形のように無表情で立ち尽くしている。

「君が話の幽霊なのか？」

その問いに少女は答えない。

まるでこちらを認識していないような無反応である。

“——認識していない？”

本当にそうなのか？

だってあの時彼女は……

確かに僕を見ていたんだ。

今だってそうだ。

彼女は真っ直ぐこちらを見つめている。

認識していないという事はありえない！

「君の名前を教えてください！」

何故かそう叫んでいた。

——ピクリ、と少女の肩が動いた気がした。

「——」

かすかに彼女の唇が動いた。

「えっ？」

「——あいつを信じてはダメ。」

そう彼女は言った。

どういう意味なんだ……？

「悪い、遅くなった。」

背後から健司の声がした。

振り向くと健司とレイがトイレから出てきたようだった。

「お、遅かったじゃないか。」

「ん？　すぐだったろ？」

えっ？

結構長い時間待っていたような……

「だって遅いからレイが見に行っただぞ？」

「そうなのか？　俺の勘違いかなあ。」

そう言って健司は笑った。

視線を戻すとそこに彼女はいなかった。

“ あいつを信じてはダメ ”

一体どういう意味なのだろう。

そして、 “ 誰 ” の事なのだろうか？

幽霊の正体

結局、寮全体を周ってきたが、特に何かを発見する事はなかった。

「なんだよ、結構期待してたのに。」

「期待してたんだ……」

何はともあれ問題も起きずに良かった。

“あいつを信じてはダメ”

——あの出来事を除いて。

「この辺で解散にしないか？」

眠そうな顔でレイがそう言った。

僕も正直今すぐ眠りたい。

「そうだな、じゃあこれぐらいで……」

ガタン！

食堂の方から物音が聞こえた。

僕達3人は食堂へと向かう。

物音は食堂に近づくにつれて大きくなっていく。

本当に噂の幽霊が現れたのだろうか？

「なんの音だろう。」

「ラップ現象ってやつだな！」

健司がよく分からない用語を言う。

霊的な専門用語か何かだろうか？

いまいち振り回されがちな状態に不満を覚えつつも食堂を目指す。

ガタガタという音がはつきりと聞こえる距離まで近づいた。

——誰かいる。

明らかに何かの気配を感じる。

——ガタリ。

急に物音が止まった。

幽霊もこちらに気づいたのだろうか？

「誰かいるのかー！」

健司が声をかける。

「当然のごとく返事は返ってこない。」

——コツン

無言で健司が歩き出す。

一步、また一步とその影へと近づく。

健司が振り向いてこちらを見る。

行くぞという合図だ。

こちらも首を縦に振って答える。

パッ！

影にライトを向けた。

そこには――

「ま、待ってくれ！ 警察だけは勘弁してくれ〜！」

見覚えのある男がうずくまっていた。

「兄さん……う？」

そう、彼の名前は柊 誠。

この学校の卒業生であり、僕の兄だ。

「お、お前ら！」

「なんでこんな所に？」

「いや、まあな。」

記憶通りなら、その才能を買われて市役所勤務になったはずだが。

「先輩まさか……」

兄さんは確かに優秀なのだ。

優秀なのだが……

「——それ以上は言うな。」

もの凄く、お馬鹿なのである。

まさに天才とアレは紙一重を地でいく人物である。

「うわあクビになったのかよ！」

空気を読まずにそう告げる健司。

その台詞にうう、と兄さんが唸りはじめた。

「……」

レイが話についていけずに黙りこくっている。

——しまった、一人だけ新参であるレイには先輩の事は分からなくて当然だ。

「えっと、彼は終誠。　　この卒業生で僕の兄さんなんだ。」

ほほう、と相槌をうつ。

「しかしその卒業生が何故ここに？」

もつともな意見である。

しかし理由は健司が先ほど……

「あんまりだ。絶望した！」

後輩の心ない言葉に発狂しかけている兄さん。

その時だった。

背後に宙に浮く生首が――

『うわああああ！』

結局幽霊はいなかったという事でこの件はケリがついた。

最後に現れたのは寮母さんで、騒いでた僕達を驚かそうと現れたらしい。

なんともまあ……

予想通りの成果があがらず、健司はいじけモード。レイはレイで、いつもと変わらずに過ごしている。僕も何一つ変わらず日常を過ごしている。

ああ、兄さんだが……

寮母さんに頼み込んで部屋を一つ貸してもらえる事となった。その代償に寮の仕事の手伝いをさせられている。まあこれはこれで良かったのでは？　と思う。

季節はもうすぐ真夏にさしかかろうとしていた。

僕の脳裏には、あの言葉が今も反響している。

“あいつを信じてはダメ”

柗誠という男

夢を見ていた。

それはぼんやりとしていて、目覚める頃には忘れてしまう儚い夢。

繰り返しされる毎日。

繰り返しされる映像。

まるで録画されたホームビデオを毎日見せられているような気分。

——誰が？

繰り返しされる毎日。

繰り返しされる映像。

——誰の？

「ねえ、今度はいつ帰ってこれるの？」

——それは誰の言葉？

「今度もすぐ帰ってこれるさ。」

——それは誰の返答？

分からない。

俺は、僕は、私は……

何者なのか。

「兄さんおはよ。」

「おはよう弟よ！」

いやあ、朝から元気だなあ。

そう思いながら食堂の席に着く

珍しく真面目に仕事をしているようだ。

兄さんは昔から気分屋だ。

天気のようにコロコロと気分が変わっていく。

子供の頃はそれでよくイラついていたのを覚えている。

あげると言った玩具を返せと言ったり、遊びに行こうと予定を立てれば直前でやめると言ったり……

両親が離婚してからは、疎遠になってしまったのだが……

最後に会ったのは、確か入学式の後だったか――

「俺、感激です！」

健司は感動に打ち震えていた。

入学式早々仲良くなった彼だが、どうやら兄さんの事を知っていたらしい。

問題児だとはいえ、優秀な人なのは間違いないのだ。

「そう硬くなるなって、健司君だっけ？」

「は、はい！ 是非俺を弟子にして欲しいんです！ 先輩は俺の目標で憧れで——」
「ストップ、すとりっぷ！ 気持ちは分かったから！」

健司の勢いに、流石の兄さんも困っている。

こんな兄さんを見るのは初めてかもしれない。

「今度会う時に特訓メニュー作っておくからさ、それで納得してくれ？」
「わかりました！」

ああ、絶対嘘だろうなあ……

「そうだ弟よ、最近の調子はどうだ？」

「どうって？」

「魔法の鍛錬だよ、あれから上達したかな〜っと思っちゃってな。」

「別に……」

「ふーん。」

—

—

—

朝食を食べながら、そんな少し古い記憶を思い出していた。

——今日の食パンは少し硬い。

「見よ、これぞありがたいーい特訓メニューであるぞー!」

「ははっ、ありがたき幸せ!」

朝からバカ二人が何かやっているようだ。

って、あの約束覚えてたんだ。

珍しい……

正直言うと、僕は兄さんが嫌いなのだ。

何が嫌いかと言われれば難しいが、根本的に苦手意識を持っている。

自分とを比較してしまうという部分もあるのだが、これは僕自身の問題でもある箇所だ。

しかしこれから毎日顔を合わせると頭が痛くなる。

早々と朝食を食べ終え、僕は食堂を後にした。

またトラブルが起きなきやいいけど……

夏休み

あつい……

外からは蝉の鳴き声が絶えず聞こえてくる。

冷房の故障した、地獄の教室の中で動く気力を完全に削がれていた。

「なあ葉助——夏休みどうするよ？」

「特に予定はないな」

そう、僕達は夏休みで青春を謳歌できるようになりア充ではないのだ。

野朗二人で出かけても空しさだけである。

「どうした？」

机に突っ伏している僕達を見て、レイが話しかけてきた。

「夏休みの予定についてき。レイは何か予定あるの？」

「いや、私は特に無いが。」

これは予想外。

大方、予定ぎつしりだと思っていたのだが。

「やあ青少年、青春してるかい？」

そんな会話の中、急に教室の中へ兄さんが乱入してきた。

「こんな所に何しにきたんです？」

寮の手伝いや新しい仕事探して忙しいはずの兄さんが、何故ここにいるのだろうか？
まあいつもの如く、そういう気分になって来たのだろうか。

「いやあ、君達に青春を分けに？」

『…………』

その一言に場の空気が凍りついた。

「いや、一斉に黙らなくても……」

焦りながらもポケットから地図を取り出した。

「この島にさ、皆でキャンプでもしようかってお願いなのさ。」

「そういうのは最初から言ってもらえませんか？」

「——すまん。」

申し訳なさそうに兄さんが謝る。

お誘いは嬉しいがそういうノリはちよつと……

「レイと健司はどうするっ？」

「予定もないし私も行くぞ。」

「俺も特に予定はないしな。折角だから誠先輩に特訓してもらおうぜ！」

それってキャンプに出かけなくてもできるんじゃないや……

ともあれ、僕達の夏休みの予定が急遽出来上がったのであった。

「わあ……」

僕達の目の前には海に囲まれた島。

今は引き潮の関係で、陸から島までの道が出来上がっている。

自然が作り出す奇跡というものだ。

「な、凄いだろ?」

得意げに兄さんが胸を張る。

いや、別に兄さんがすごいわけでは無いのだが……

しかし関心して騒ぐ健司と得意げな兄さん。

理想的な先輩後輩像が目の前で展開されている。

なんというか、このバカ二人はお似合いである。

「こういうのも悪くは無いな。」

そう呟いて、レイが先導して進んでいく。

僕も馬鹿な2人を置いて後に続いた。

「あの二人まだやってるよ。」

島にたどり着いた僕とレイだが、あの馬鹿二人はまだこちらに來ない。

まだあのやりとりをやっているのだろうか？

「どうするっ？」

このまま待っているわけにもいかないし。
かといって置いていくわけにもいかない。

そうしているうちに、向こうから健司が走ってくる。

「はあはあ……」

「遅いぞ健司。」

息を切らして膝に手をつけている。

急にどうしたのだろうか？

「誠先輩が忘れ物したみたいでさ、先に行つててくれるか？」

やはりお馬鹿だった。

「……わかったよ。」

「わりいな！ 俺付き合ってくるわ。」

そう言つて健司は引き返していった。

僕とレイはお互い呆れた顔で奥へと進んでいった。

木々が生い茂る中をひたすら前に進む。

「あつい……」

日陰を歩いているものの、まるで熱帯のような蒸し暑さが容赦なく襲ってくる。

「すまない、何か飲み物はあるか？」

額から汗を流しながらレイが尋ねてくる。

僕は背中に背負ったリュックから水筒を取り出した。

「レイ、顔色が悪いけど大丈夫。」

水筒を受け取ったレイは軽くふらついている。

顔色もよくない。

「大丈夫だ。」

「いや、少し休んでいこう。」

もはや耐久遠足にきたような感じになっていた。

当初の予定とはなんだったのか。

「予定のキャンプ場所までまだあるなあ……」

僕は兄さんに渡された地図とにらめっこをしていた。

正直アバウトすぎてよくわからない。

——このへん とか印がしてあるし。

レイは日陰で木にもたれかかっている。

「すまないな……」

「気にしなくていいよ。」

しかし、なんだろう？

さつきから妙な既視感を感じる。

“大丈夫か？ ——は身体が弱いからな”

ん……？

——気のせいだろうか。

「それよりさ、レイって身体弱いのか？」

なんとなく、そう尋ねてしまった。

「昔はな……」

そう答えが返ってくる。

「今は？」

「多少体力に難あり、という所だ。」

「へえ……」

そういえば、レイとはこういう他愛のない会話するのは初めてかもしれない。せつかくの機会だし、色々と話してみよう。

「ここに来る前は どうしてたの？」

「ふむ、今とそう変わらないな。書物を読み漁ったり、訓練をしたりだな。」

確かに今と変わらない。

毎日見ているが、本当にやる事が無いってくらいに勉学のみ励んでいる。

「ん〜 ほら、趣味とか無いのかなって。」

「趣味か……」

少し考えこむように俯き、しばらくしてから顔をあげた。

「ないな。」

あ、その……

考えても出てこなかったわけね。

「そ、そっか。」

真顔でそう言われてしまっはそれ以上は突っ込めない。

なんだろう、会話のキャッチボールがうまくいっていないような。

「もう大丈夫だ、そろそろ出発しよう。」

そう言ってレイは立ち上がった。

結局、それほど話を聞くことはできなかった。

「やっとか……」

おそらく地図が示したのであろう開けた場所に出た。
確かにここならキャンプをするには最適のようだ。

「企画した本人がいないってのも問題だけどね。」

そう文句を言いながら僕は荷物を広げた。

「私も手伝おうか？」

「そこで休んでいいよ。」

先ほどの事もあるし、レイには休んでいてもらおう。

しかし、兄さんと健司はいつここにくるのやら。

——ぼやいていても仕方ないか。

思考停止して作業を再開する。

——

——

——

結局テントを一人で建て、食事の準備も一人で終わらせてしまった。

未だに二人は現れる気配はない。

レイは疲れていたのか、小さい寝息を立てている。

空を見上げると、日もすっかり暮れていた。

——少し休んでから、二人きりの食事を終えた。

「結局来なかったな。」

「どうしたんだろうね。」

周りからは虫の鳴き声すら聞こえない。

静寂が全てを支配していた。

まるで世界が僕達二人だけしか存在していないような錯覚さえ覚える。
空を見上げると無数の光点が辺りを照らしている。

「不思議だよね。」

「ん?。」

「あの光点だよ。」

僕は空を見上げながらそう言った。

限りのある世界。

天に映っているものは幻。

その先には世界同士の境界線レイ・ラインしか存在していない。

「お前、意外とロマンチストなのか？」

そう笑って返された。

「幻影に名前があるなんておかしいだろ？」

昼夜という概念は人間達の安定のために作られたもの。

しかし、それは当たり前のように生活に溶け込んでいる。

当たり前すぎて誰も違和感すら覚えない。

誰が生み出したのか。

どうして、そう呼ばれるようになったのか——

「もしかしたら……」

「ん？」

“——誰かがこの世界をを望んだのかもな”

やれやれ、どっちがロマンチストなのやら。

不吉な予感

二人で見上げる空。

どこまでも広がるかのような夜空。

いつかした約束。

“一緒に星を眺めようと”

今こうして寄り添う二人。

——違う

“——誰かがこの世界をを望んだのかもな”

違う、この言葉は。

そう、確か……

でもそれは――

“でも俺は――この世界が嫌いだよ。”

――暗転

全て壊れてしまえばいいんだ。

――こんな世界壊れてしまえ。

それは憎悪。

それは憎しみ。

それは悲しみ。

それは絶望。

あらゆる感情が、俺を、僕を、私を蝕む。
感情の奔流に流され、自己が消えていく。

ワタシハダレ……？

——ワレワ

違う……

コレは違う……！

「っはー！」

胸が苦しい。

全身を締め付けられるような息苦しさを感じる。

寝具は汗でびっしょりと濡れている。

しかし、原因はまったく思い出せない。

何か悪いものを見ていたような不安感だけだった。

——まだ意識がはっきりとしない。

夜風に当たりたい……

寝袋から這い出てテントから抜け出す。

——こんな世界壊れてしまえ。

夏場なのに多少肌寒さを感じる。

まだ頭痛が収まらない……

ふらふらと夜道をさ迷い続ける。

——こんな世界壊れてしまえ。

脳裏に何かの言葉がよぎる。

分からない……

ただ彷徨う。

何をしているのか分からない。

頭痛がひどくなっている気がする。

森の中を彷徨う。

あてもなくフラフラと……

まるで夢の中にいるような感覚。

「んっ……っ？」

目の前に洞窟のようなものが見える。

特に考えもなしに中に入っていく。

冷えるな。

身体が冷えると共に頭痛も徐々に治まってきた。

「あれ、()は……？」

自分が今置かれている状況がよく理解できない。

先程までの事がよく思い出せない。

「戻らないと。」

とりあえず洞窟のようなので、風の入ってくる方向へと足を進めた。

「これは……？」

入り込む風を頼りに進んできたのだが、出口ではなく奥へと進んでいたようだ。

目の前には明らかに人口的に作られた扉が、先に続く道を遮っていた。

明らかに異質のソレは進む事を拒んでいるようにも思える。

戻るならこの道に背を向けて歩いていけばいい。

だが何故だろう……

“——ソレを知ってる気がする”

ドクドク、と心臓が高鳴る音が聞こえる。

好奇心は猫を殺す、とはよく言ったものだ。

でも僕は——

扉に手をかけた。

取っ手はない。

冷たい金属の感触が手のひらで感じられる。

——音も無く、扉が横にスライドする。

来客を歓迎するように奥の通路の明かりが灯された。

見たこともないような設備が並んでいる。

何故こんなものが、この無人島にあるのだろうか？

明らかに不自然である。

ただひたすらに前に進んでいく。

その足取りに迷いはなく、何かを目指すように動く——本人の意思とは関係なく。やがて行き止まりに遮られた。

行き止まり、というよりは部屋だ。

本棚が数多く並び、大きな水槽が7つ置かれている。

”No1 人型を保てず失敗”

水槽の側面張られた紙に、汚い字でそう書かれている

——水槽の中身は濁った水で見えない。

何か背筋にゾクツとした悪寒を感じる。

恐る恐る、隣の水槽に目を向ける。

” N o 2 生成後すぐに死亡、原因究明求む”

「っ……っ！」

水槽の中に人骨が漂っている。

おそらくその実験体 N o 2 なのだろう。

一体、ここでどんな実験が行われていたのだろうか。
明らかに異常である。

” N o 3 現在稼働実験中”

水槽の中は空である。

成功した実験体のようにである。

何を生み出しているというのか……？

——ズキン

こめかみ辺りに痛みが走る。
嫌な感じだ。

次の水槽を調べる。

” N o 4 暴走したため N o 3 により処理”

うえつ……

あまりのひどい有様に夕食を戻しそうになる。

頭部を薄皮一枚でぶら下がり、手足はもがれて水槽の中を漂っている。

N o 5, N o 6 も似たような状態であった。

そして最後の水槽に近づく。

— N o 7

頭痛が更にひどくなる。

——で、からの——

——という、しかし……

どこかで見えた風景。

——だと言って——

——失敗だ。

何が……？

——利用——の可能性。

分からない。

全ては——だ。

パリン！

ガラスの割れるような音で意識が覚醒する。

嫌な予感がして振り返る。

水槽から溢れた汚水が辺りを汚している。

その中央に倒れこむ人型の異形。

おそらくN O 1だ。

ピクリ、と一瞬身体を痙攣させる。

生きているのか……？

ゴクリと生唾を飲み込む。

何が起きてもいいように、呼吸を整えて臨戦態勢に入る。

——むくり。

ソイツが起き上がった。

こいつはまずい。

直感的にそう悟る。

ゆつくりと、気づかれないように来た道に戻る。

幸い、相手にはまだ気づかれていない。

ウーン！　ウーン！

急にサイレンが鳴り渡る。

“ 緊急事態のため、当研究所は破棄されます ”

実に嫌な予感がする。

“ 5分後に完全に水没するため、残っている職員はただちに脱出してください ”

どうやら最悪の状態のようだ。

扉に辿りつき、そのまま通路へと走り出す。

「グオオオオオ！」

先ほどの化け物が唸り声をあげながら追ってくる。

「なんでついてくるんだ！」

見た目に似合わず素早い動きで追いかけてくる。

” ウインドカッターII!”

苦し紛れに魔法を放ってみるが多少の足止め程度にしかならない。

それに走りながらでは大技を唱える事すら許されない。

どうすれば……

走り続けるも、互いの距離はどんどん縮まっていく。

——その時だった。

“ ファイヤールウォールIII!”

炎の壁が僕と化け物を遮った。

まさか……!!

「今だ!」

聞き慣れた声が聞こえる。
間違いない……

ぼんやりとだが遠くに人影が見える。

「うおおお！」

走った。

体力なんて残っていない。

しかし今は……！

思いつきり腕を伸ばす。

——プツン

同時に僕の意識も途切れた。

それはありふれた風景。
幸せな家族の描写。

僕は椅子に座りながら母親の作るご馳走を待っている。

母は微笑みながら好物のハンバーグをテーブルへと並べた。

僕のためだけに用意されるご馳走。

“僕のためだけに”

ああ、なんて幸せ者なのだろう。

僕は最愛の母を独り占めできる。

誰にも奪われはしない。

“誰も奪えない”

奪われるわけがない。

だって……

——で、からの——

——という、しかし……

——だと言って——

——失敗だ。

——利用——の可能性。

——全ては——

誰かの手のひらが近づく。

“うわあああああ！”

急速に意識が覚醒する。

「っ……………！」

伸ばした手をレイがしっかりと掴む。

「うおおお！」

そのまま外へと放り投げられた。

ゴロゴロと勢いのまま地面を転がる。

——はあはあ

止まっていた呼吸が再開する。

不足していた酸素が体中を駆け巡る。

「大丈夫か？」

コクリ、と頷いて、レイの肩を借りて立ち上がる。
入り口を覗くと、奥側が完全に水没している。

「……」

アレはなんだったのか。

全ては水の底だ。

「葉助……」

「大丈夫だよ、レイ。」

色々なものが頭の中を駆け巡っているようだ。

きつとこれは……

しかし、無情にも答えは——

文化祭

夢を見ていた。

それはぼんやりとしていて、目覚める頃には忘れてしまう儚い夢。そのはずだった。

——そのはずだったんだ。

これは夢で、普段が現実で……

“その区切りは？”

あの日常が現実で……

“その真意は？”

だから、アレは夢で……

“ 本当に？ ”

間違っているのは……

“ 偽っているのは…… ”

『お前だ』

—

—

—

いつにも増して教室内が活気立っている。
その原因は一つ……

「では意見のある者は挙手しろ。」

1年に一度の文化祭の時期だからだ。

「なあ葉助、お前やりたい事とかあるのか？」

「特にないかな」

僕と健司は文化祭でのクラス展について話し合っていた。

レイは眠そうに欠伸をしている。

周りの生徒達は騒がしいくらいに意見を出し合っている。

別にこういう行事が嫌いなわけではない。

ただ単にやりたい事がないだけである。

「やっぱりさ、出店とかもやりたいよな。」

「それさ、健司が自分で食べたいだけじゃない？」

「そうそう、タダ食いできるし——って違うわ！」

それが本心だろ、と心の中で突っ込んだ。

「ほら静かにしろ！ 結果を発表するぞ。」

どうやら意見がまとまったようだ。

「今年のクラス展は、メイド喫茶とする。」

——— どういうことなんだろうか。

何故そんな結果に……

「しかしこれでは不公平ね。」

キャシー先生がニヤリと笑う。

「どうだ？ 男子共も着るか？」

急激に周りがざわめきだす。

まあ先生がいう事が実現してしまつたらと考えると……

「流石に冗談よ。その代わり男子共はしっかりと準備をやつてもらおうよ。」

——よかった。

「でもよ、レイのメイド姿はみてみたかったよな？」

そう健司が耳元で呟いた。

——悪くないかも。

つい想像してしまった。

ちよつと目つきのきつい女子としてなら妥協点だ。

ともかく、今回の文化祭は波乱の予感がする。

——最近よく夢を見る。

いつからだろうか？

とても曖昧で、宙に浮いているような浮遊感。

それでも意識ははつきりしていて、なんとも不思議な夢だ。

もちろんそれを誰かに相談した事はない、する必要もない。

だってこれは夢なのだから。

目覚めれば終わってしまう儚いものだから。

——ダカラ、意味ハナイ

文化祭当日、珍しく僕は寝坊した。

健司とレイは既に学校に向かってしまったようだ。

起こしてくれればよかったのに。

玄関から出ようとする寮母さんとすれ違った。

「珍しいわね。」

そう言って笑った。

なんだろう、何か引つかかる。

そう考えつつも、僕は学校へと急いだ。

教室の前にたどり着く。

メイド喫茶へと改装された入り口が目に入る。

昨日遅くまでかかって準備したものだ。

遅刻しかけたのもそのせいなのだけど……

中へ入ると、着替えを終えたクラスの女子達が開店の準備をしていた。
一方、男子達は、暇そうに教室脇にたむろしている。

「ギリギリセーフだな。」

健司もその中にいた。

「起こしてくれないなんて、ひどいじゃないか」

「いや、起こしても起きなかっただろ。」

そうは言われても……

当然起こされた記憶はないし、実際に遅刻しかけているのが現実だ。

「まあぐつすり寝てたみたいだしな。いい夢見れたか？」

「うん、まあね。」

——確かに何か夢を見ていたような気がする。

「色気のない女子共のメイド姿を見るのもつまんないしな、学校の中回ろうぜ。」

「そうだね……そういえばレイは？」

さつきから姿が見当たらないがどこにいったのだろうか？

「せつかくの文化祭を楽しまないでどうするよ？」

レイの事は気になるが、健司を待たせるわけにもいかない。

「そうだね、まずはどこにいく？」

結局、深く考えず楽しむ事にした。

——だった。

ん……？

間違いだった。

「葉助、どうした？」

「な、なんでもないよ。」

不意に頭の中に浮かんだ言葉を振り払い、健司についていく。

健司はたこ焼きや焼きそばなどを両手いっぱいを持ち歩き、文化祭を堪能している。
というか食い気だけのような……

「そんなに食べてお腹苦しくならない？」

「いや、まったく。」

相変わらず驚かされる食欲である。

その姿に呆れていると、遠くに人だかりが見える。

「何の集まりかな？」

健司と二人で人だかりへと近づく。

そこには見覚えのある老人が、記者に囲まれていた。

黒島市長……

この魔道都市ヴェネティアの市長にしてこのラタトクス学園の学園長でもある男。そのカリスマ性に民衆にも一目置かれる存在だ。

——視線が合った。

一瞬だけだが、間違いないくこつちを見ていた。

何故？

たまたま？ それとも学園の生徒だから？

しかも、彼が微笑んだように見えたのは、それこそキノセイだろうか。

「どうした、葉助？」

健司に呼ばれて我に返る。

「ん、なんでもないよ。」

「今日のお前、なんかへんだぞ？」

——確かにそうかもしれない。

そうかもしれないが……

——は——だ。

「きつと寝不足で頭が働いてないんだよ。」

そう言い訳した。

健司に向けた言葉なのか、自分自身に言い聞かせたのか。

「おい、あれ見ろよ。」

健司が指差した先で、メイド服の誰かが黒島市長と話していた。

あの服は、間違いなくうちのクラス展のものだ。

「あんな子いたっけ？」

「いや、知らないな。」

二人で頭をかしげる。

そこまで人数の多くないクラスだ。

クラスメイトの顔を忘れるわけがない。

「どうするっ…」

健司がそう尋ねてくる。

僕は……

—

—

—

「やめておこう。」

こういう事情に触れないのが一番だ。

それが最も確実な護身である。

好奇心は猫を殺すと言ったものだ。

「じゃあ教室に戻るか。」

そう健司が言った。

——瞬間。

唐突にぼやける視界。

そして、手足の感覚が消失していく。

まるで自分が消えていくかのような……

“なんだこれ……?!”

セカイガマワル

動いているのは自分?

ワカラナイ……

徐々に蝕まれる思考。

アア、何モ……

——プツン

意識が途絶した。

——

——

——

——最近よく夢を見る。

いつからだろうか？

とても曖昧で、宙に浮いているような浮遊感。

それでも意識はつきりしていて、なんとも不思議な夢だ。

もちろんそれを誰かに相談した事はない、する必要もない。

だってこれは夢なのだから。
目覚めれば終わってしまう儂いものだから。

——ダカラ、意味ハナイ

文化祭当日、珍しく僕は寝坊した。

健司とレイは既に学校に向かってしまったようだ。
起こしてくれればよかったのに。

玄関から出ようとすると寮母さんとすれ違った。

「珍しいわね。」

そう言って笑った。

なんだろう、何か引つかかる。

何か身に覚えのある感覚。
そう考えつつも、僕は学校へと急いだ。

文化祭？

教室の前にたどり着く。

メイド喫茶へと改装された入り口が目に入る。

昨日遅くまでかかって準備したものだ。

遅刻しかけたのもそのせいなのだけど……

中へ入ると、着替えを終えたクラスの女子達が開店の準備をしていた。

一方、男子達は、暇そうに教室脇にたむろしている。

「ギリギリセーフだな。」

健司もその中にいた。

「起こしてくれないなんてひどいじゃないか」

「いや、起こしても起きなかっただろ。」

そうは言われても……

当然起こされた記憶はないし、実際に遅刻しかけているのが結果だ。

「まあぐつすり寝てたみたいだしな。いい夢見れたか？」

「うん、まあね。」

——確かに何か夢を見ていたような気がする。

「色気のない女子共のメイド姿を見るのもつまんないしな、学校の中回ろうぜ。」
「そういえばレイは？」

さつきから姿が見当たらないがどこにいったのだろうか？
それに何か違和感が……

「せっかくの文化祭を楽しまないでどうするよ?」

レイの事は気になるが、健司を待たせるわけにもいかない。

「そうだね、まずはどこに行く?」

結局、深く考えず楽しむ事にした。

——だった。

ん………?

間違いだった。

「葉助、どうした?」

「な、なんでもないよ。」

不意に頭の中に浮かんだ言葉を振り払い、健司についていく。

健司はたこ焼きや焼きそばなどを両手いっぱい持ち歩き、文化祭を堪能している。というか食い気だけのような……

「そんなに食べてお腹苦しくならない?」

「いや、まったく。」

相変わらず驚かされる食欲である。

その姿に呆れていると、遠くに人だかりが見える。

「何の集まりかな?」

健司と二人で人だかりへと近づく。

そこには見覚えのある老人が、記者に囲まれていた。

黒島市長……

この魔道都市ヴェネティアの市長にしてこの学園の学園長でもある男。

そのカリスマ性に民衆にも一目置かれる存在だ。

——視線が合った。

一瞬だけだが、間違いなくこつちを見ていた。
何故？

たまたま？ それとも学園の生徒だから？

しかも、彼が微笑んだように見えたのは、それこそキノセイだろうか。

「どうした、葉助？」

健司に呼ばれて我に返る。

「ん、なんでもないよ。」

「今日のお前、なんかへんだぞ？」

——確かにそうかもしれない。

そうかもしれないが……

これは——だ。

「きつと寝不足で頭が働いてないんだよ。」

そう言い訳した。

健司に向けた言葉なのか、自分自身に言い聞かせたのか。

「おい、あれ見ろよ。」

健司が指差した先で、メイド服の誰かが黒島市長と話していた。

あの服は、間違いなくうちのクラス展のものだ。

「あんな子いたっけ？」

「いや、知らないな。」

二人で頭をかしげる。

そこまで人数の多くないクラスだ。

クラスメイトの顔を忘れるわけがない。

「どうする?」

健司がそう尋ねてくる。

僕は……

—
—
—

思考にノイズが走る。

何か見覚えが……

——が——のか。

「葉助？」

「ちよつと見てくるよ。」

そう言つて僕は二人に近づいた。

——

——

——視界が歪んでいる。

まるで魔法が解けるような。

まるで世界が終わるような。

まるで……

メイド服の人物がこちらを振り向く。
顔が歪んで見えない。

「お前は……」

「お前が……」

ああ、そうか……

君が——

——

——

——

——最近よく夢を見る。

“とても長い夢だった。”

いつからだろうか？

とても曖昧で、宙に浮いているような浮遊感。

それでも意識ははつきりしていて、なんとも不思議な夢だ。

“それも、もう終わりだ。”

もちろんそれを誰かに相談した事はない、する必要もない。

だってこれは夢なのだから。

目覚めれば終わってしまう儚いものだから。

——ダカラ、意味ハナイ

—
—
—

文化祭当日、珍しく僕は寝坊した。

“そこからまず間違っていた。”

健司とレイは既に学校に向かってしまったようだ。
起こしてくればよかったのに。

「違う、だって僕は……」

——文化祭には向かってないのだから。

—
—
—

薄暗い部屋の中で二人の男が密談を交わしている。

一人は椅子にもたれかかり、もう一人はその正面に立っている。

「——ようやくだ。」

椅子に腰掛けた男の声は歓喜に震えている。

その眼差しは、ココではない何処かを見ている。

「では、最終フェイズに？」

男がそう尋ねると、椅子に腰掛けた男は頷いた。

「Rシリーズの数も揃った。日取りは……学園の文化祭としよう。」

唇の端を吊り上げて笑う。

全てが順調、多少のイレギュラーが発生したが問題はない。

自信に満ちた顔で男を見る。

「それとだ……」

“ 7番は処理しておけ”

「――御意」

夢から覚めて

どこで間違っただのだろうか？

どうして、こんな結末になってしまったのだろうか？

今となっては、分からない。

—
—
—

気がつけば僕達は戦っていた。

あれほど一緒にいたのに。

色々な思い出を作ってきたのに……

あの時の僕たちは、その平和がずっと続くと思っていたんだ。

でも今は……

そんな小さな平和なんて、粉々に砕けてしまった。

“この都市ごと”

—

—

—

「うつ……」

目を開くと自分の部屋の天井が見えた。

「目が覚めたか？」

心配そうに健司が僕の顔を覗き見る。

「ここは——なんで?」

起き上がろうとするが、身体に力が入らない。
節々からは激痛が走り、魔源^{マナ}もだいぶ消費している。

「まだ寝てろって、あんな事があつた後だ。」

“ アンナコト? ”

「——」

「そろそろ先輩が帰ってくるはずだから、もうしばらく寝ておけて。」
「うん。」

ゆつくりと目を閉じ、頭の中の整理を始める。

そう、確かあれは——

いつもより早く目覚めた僕は、身支度を済ませ出かけようとしていた。玄関から出ようとすると寮母さんとすれ違った。

「珍しいわね。」

そう言つて笑つた。

その笑顔に見送られながら寮を出る。

そう、ある人物との待ち合わせのためだ。

—
—
—

いつもと同じ通学路を歩いていく。

歩き慣れた道。

いつも3人で歩いた道。

その道を今は一人で歩いている……

学校の近くの公園で歩みを止める。

「来たか」

そこにレイが立っていた。

「呼び出した本人が遅刻してどうする？」

そう言って笑っている。

「おかしいな、まだ約束の時間より10分早いけど。」

僕は腕時計を見ながらそう答えた。

「それよりも、話があるんだろ？」

こちらにレイが歩み寄ってくる。
そう、そのために僕は来たんだ。

「レイ——君は何者なんだい？」

——ピタリ

レイの歩みが止まる。

「どういう意味だ？」

レイの表情が強張る。

「そのままの意味だよ。」

僕はずっと疑問に思っていたんだ。

彼の存在が……

異例の転校、ずば抜けたセンスと魔力、そして……

“この前の島での一件だ”

ずっと僕の中でひっかかっていた。

“何故、レイはあの場に間に合ったのかと”

ありえないはずだ。

お互い見知らぬ土地。

しかも、突然僕はいなくなったのだ。

あんなタイミングで現れるわけがない。

だとすれば……

——彼は最初からあの場所を知っていた。

「一つだけ聞かせて欲しい。」

そうレイが尋ねた。

僕はうなずいて続きを促した。

「お前は、真実を知る覚悟があるか？」

ゴクリ……

生唾を飲み込む。

答えはすぐそこにある。

しかし、搾り出そうとしても声がない。

嫌な汗が額から滴る。

「今ならまだ、平穏なままでいられる。それでもお前は——」

「知りたい、僕は答えを出したいんだ。」

それが、やっと搾り出せた返事だった。

しばらくの沈黙が続く……

先に沈黙を破ったのはレイだった。

「ラインズワーブ境界移動は知っているな……？」

僕は頷いて答えた。

——ラインズワーブ
境界移動

それは時空龍達によって禁忌とされる秘術。

その秘術を以て、レイ・ライン境界線の向こうにあるとされる別世界に行くことだ。

しかし何故今それを……

「私と奴は、ラインズワーブ境界移動してこの世界に来たんだ。」

奴……？

「奴、黒島は——」

ドクン

大きく心臓が跳ねる。

あまりにも意外な名前が出てきたからだ。

「私と同じ世界から来た。」

一瞬俯き、一呼吸置いてから話を続ける。

「初めは自分の世界に帰る事だけを考えていた。」

——だが

「奴は、この世界の知識を得るたびに野心に膨れ上がらせた。」

ドクン、ドクンと心臓が高鳴る。

「そして——」

“ 自分の世界を支配しようと考えた ”

「そのためには手駒が必要だ。 そのために奴は実験を始めた。」

「実験……？」

「そう、最強の兵士を作るための実験だ。 お前も気づいてるだろう？」

ドクン……ドクン……

そあの研究所が……

そうだ、僕は知っている？

「R計画の実験体7号——それが、お前だよ葉助。」

あ……

自分の中の疑問の答えが、彼の口から告げられた。

そうか……そうだったのか。

だからあの時も、あの時も――

忘れようとしていた記憶が溢れ出てくる。

ぼやけていた過去がはつきりとしてくる。

“ R 計画 ”

黒島市長の最強の兵士を作る計画。

とある人物の遺伝子を使用して、人造の魔法兵士の作成。

4属性の魔法を操り、どんな怪我も瞬時に治してしまう、そして病にもかからない無敵兵士。

そうだ、僕は……

“最後のテストタイプ”

そのためにずっと監視されて――

「そうか、君が。」

「そうだ。」

そうだ、今分かった。

彼こそが――

「オリジナル。」

“あいつを信じてはダメ”

とある言葉が思い出される。

そういう事だったんだ。

こいつはずつと……ずつと！

“ 僕を笑っていたんだ ”

皆を騙して、嘲笑って！

“ あいつを信じてはダメ ”

反復される言葉。

今気づいた真実の囁き。

右手で握りこぶしを作る。

僕はいいつを——

呼応するようにレイも身構える。

——当然だ。

おそらく、今の僕は隠しきれないほどの怒りに打ち震えているからだ。

「レイ……僕は、君を——す」

平穩の終わり

“ ウインドカッターⅢ！ ”

“ ファイヤーウォールⅢ！ ”

互いの詠唱は同時だった。

各々の術が互いに打ち合い消滅する。

“ サンダーボルトⅢ！ ”

間髪入れずに次の詠唱を行う。

本来は僕が扱えない属性の術。

“ 火・水・雷・風の4種類のエーテル属性うちの二種類の属性を持っている ”

しかし僕にこの原則は適応されない。
そう作られたからだ。

これが僕がオリジナルに勝っている利点でもある。
しかし魔源マナの消費もそれだけ早い。

“マジックシールドⅢ！”

雷を打ち消してレイが僕から距離をとるように後方へと跳躍する。

“バブルボムⅢ！”

着地のタイミングを狙い放つ。

「っー！」

明らかにレイの表情が強張る。

僕はその隙を逃さずに一気に距離を詰める。

—
“アイスニードルⅢ！”

至近距離から氷の刃を放つ。

この距離なら！

— ガキン！

えっ？

氷の刃は見えない障壁に防がれ弾かれた。

そんな、いつの間に……

一瞬が永遠のように静止している。

レイの瞳はこちらを捉えている。

——やられる。

直感的にそう思った時だった。

“サンダーボルトⅢ！”

二人の間に雷が炸裂した。

パリン！

先ほどの障壁に裂け目が出る。

そして僕は……

“ 眞実を見てしまった ”

目が覚める。

頭の中の整理も終わり、記憶もはつきりしている。横を見ると兄さんと健司が何かを話している。

痛む身体を無理矢理起こす。

僕は。行かなければならない。

「おい葉助！」

驚いて健司が駆け寄る。

「——行かないと。」

そうだ、僕は知ったから……

「一人じゃ行かせないさ。」

兄さんも頷く。

「健司、兄さん……」

「その前に、これを見てくれ。」

そう言うのと兄さんがテレビの電源を入れた。

映し出されたのは僕達の学園。

そして黒島市長の姿だった。

「今こそ時空龍の支配から脱する時なのです！」

黒島市長が演説している。

「そのための力を私は手に入れた！ 全ての属性を操る最強の兵士！」

黒島市長の前に並ぶ仮面の兵士達。

おそらく量産タイプだ。

僕達実験タイプのデータを元に作られた完成型。

「何も恐れる事はありません。私が皆さんを導きましょう。」

明らかなる反逆。

いや、これが黒島市長の本心。

「さあ、私たちだけの楽園を手に入れるために！」

自分の元々いた世界の支配。

そのための最強の兵士。

カメラの映像が都市の上空に変わる。

その配置はまるで魔法陣のようで――

“この都市の配列自体が境界移動ラインスワープするための準備だったのだ”

つまり黒島市長はこの都市ごと境界移動ラインスワープするつもりなのだ。

この都市が自らの要塞となるという事か……

「さつきからこの放送ばかりだ。」

そう言つて健司がテレビの電源を切つた。

「口ではああ言つて、やつてる事はなんだと思う？」

——わざわざ都市ごと移動するメリット。

1つは要塞としての運用。

もう一つは——

「徴兵という名の人間狩りさ。」

人間を集めて最強の兵士を製造する材料とするわけか……

「よく出来てるシステムだね……」

「お前、黒島のところに行くんだろ？」

そうだ、おそらくレイもそこにいる。

「うん。」

「だからさ、俺達も行くぜ。 あんな奴を野放しにはできない。」

ああそうか、僕にはこんなにも心強い友がいたんだ。

「ありがとう……」

「なんだよ、照れるだろ！」

もう一度レイに会うために……

「——いこう！」

変貌した学び舎

夢を見ていた。

それはほんやりとしていて、目覚める頃には忘れてしまう儂い夢。

繰り返される毎日。

繰り返される映像。

夢だと思っていた。

それは紛れも無い現実で、今までが夢だったと思い知らされる。

嘆きの木霊する町。

繰り返される惨劇。

あの日の記憶を再生する。

あの日の涙を思い出す。

眞実は暗闇の中で息を潜め、全ては胸の中に仕舞い込む。

例え誰に理解されずとも、最愛の人に理解されずとも……

——私はその道を進む。

見慣れた校舎。

仲間と共に笑い、泣き、苦楽を共にした校舎……

しかしそれは異様な姿へと変貌し、僕達に立ち塞がっている。
例えるならば要塞。

進入を拒む壁。

まるで、今までの僕達を否定しているようにも感じる。

もう、僕達の知っている校舎ではないのだ。

「黒島はおそらくこの中。多分レイもここに……」

レイは間違いなくここにいる。

レイの目的もまた、黒島なのだから。

3人で校門をくぐる。

しかし、何か起こるわけでもなく辺りは静寂を保っている。

レイの対処に追われているのか、または……

「なあ葉助、3人に分かれて探索しないか？」

急に、健司がそんな提案をする。

この状況での単独行動は明らかに危険だ。

しかし……

「——わかった。」

僕はその意見に賛成する。

いや、僕の中の何かが信用しろと言っている。

彼への絶対的信頼。

きつと何か考えがあることなのだ。

「そうだな、確かに危険ではるが、その方が早いだろう。」

兄さんも納得した。

「なら合流地点は、5階の俺達の教室にしよう。」

互いに頷き合い、それぞれの方向に走り出す。

「葉助！」

健司に呼ばれ振り向く。

「勝つぞー！」

「ああ！」

健司が、いつもよりも大きく感じた。

校内は静寂に包まれている。

見張りや警備がいるかと思っただが、無人である。

少々拍子抜けしつつもレイの搜索を始める

1階の教室を順番に探していく。

教室は特に変わった様子も無く、普段と同じ状態だ。

目の前にある机には擦れて消えかけている落書きがある。

少し前まで普通の日常が流れていた証だ。

それが今は、こんなにも寂しく感じる。

1階の教室全てをくまなく探したが、特に変わったものを発見することも、レイを見つけたる事もできなかつた。
階段を登り2階に向かう。

コツン…コツン…

足音が響く。

コツンコツン…

—ん？

コツンコツン…コツンコツン…

二重に足音が聞こえてくる。

誰かついてきている……？

階段の踊り場で振り返る。

——そこには階段を登ってきている兄さんの姿が見える。

安堵して声をかけようと——

「葉助！ 逃げろ！」

えっ？

急に健司の叫び声が聞こえる。

とつさの指示に思考が停止する。

「っ！」

その声を聞いた兄さんが階段を駆け上がってくる。

「あっ……」

——それは偶然だった。

兄さんの行動に反応した体が、階段で足を踏み外したのだ。
踊り場にしりもちをついてしまう。

早く逃げなければ。

健司の言葉が正しければ敵は近くにいるはずだ。

近くに……

その時、頭上を何かが掠めたのだ。

ガシャーーン！

——背後にあつた踊り場の鏡が碎ける。

放たれた魔法は、壁に仕込まれている魔法中和装置によって消滅した。校内での魔法使用の危険性を考慮して備えられている仕掛けだ。

今の魔法は間違いなく“ウインドカッター”だった。

そしてそれを放つたのは……

「兄さん……？」

そう、目の前にいる兄さんだった。

どうして？ 何故？

疑問が思考を埋め尽くしていく。

——だめだ、今は考えるな。

「……」

“ フレイムタワーⅢ ”

「っ！」

慌てて立ち上がって階段を駆け上がる。

ついさつきまで座り込んでいた床から炎の柱が立ち昇る。
間違いない、兄さんは僕を狙っている。

「葉助！ お前はそのまま行け！」

「健司、何言ってるんだ！」

「誠先輩は俺がなんとかする！ いいから行け！」

健司——

「わかった！」

僕はそのまま振り向かず階段を駆け上がった。

その男の真意

「誠先輩……」

健司と誠は互いを睨みつけ、微動だにしない。

「いつから、気づいていた？」

そう誠が問いかける。

健司は、さも当然だと言わんばかりに口元を吊り上げた。

「所々で怪しい行動があつたからな、特にさっきのが。」

そう言つて誠を指差す。

「お前あの時、葉助を助けようとしたんじゃないやなくて、二人まとめて殺そうとしただろ。」

そう、レイと葉助の戦いを止めたあの一撃は、二人諸共始末するための一撃だったのか。

あれはレイが葉助をかばったからこそ助かったのだ。

「ククツ、お前は予想以上に優秀だったよ！」

誠が腹を抱えて笑い出す。

「馬鹿だが実力はあると思っていたが、想像以上に頭が回るようだ。」

“ お前はいい素体になるよ ”

そう笑いながら、誠は健司に言い放った。

「誰が素直に言う事きくかよ！」

“サンダーボルトⅡ！”

それと同時に誠に向かって電撃を放つ。

“マジックシールドⅢ”

誠はそれを涼しい顔で打ち消した。

「ちっ……」

そんな事は分かっていた。

一度も勝てなかった相手。

村田健司という人物の憧れの存在。

だが——今は勝たなければならない！

“フレームタワーⅢ！”

大きな火柱が噴出す。

誠は軽々と後方へと飛び退き、それを避けた

正直どう攻めればいいのか分からなかった。

葉助を逃がすという意味では、消費を抑え時間を稼ぐだけがいい。

だが俺は、村田健司が求めるのは――

「へへっ。」

「何を笑っている?」

自然と笑みが零れた。

“俺はあの人に勝ちたかった”

『お前の戦い方、俺は好きだぞ?』

あの人は、そう言つて俺を褒めた。

あの人は雲の上の人だ。

成績は学園トップ。

容姿も性格も完璧。

なんでこんな人が俺達の相手をしてくれているのか不思議だった。多分弟の友達だからってだけだろうけど、それでも！

『お前の戦い方、俺は好きだぞ？』

俺の攻撃だけのスタイルをそう褒めた。

だから俺は決めた。

このままのスタイルで強くなろうと。

炎と雷の属性を持つ者は総じて不遇である。

身を守る術を持たず、ただ攻撃に特化した属性。

それはある意味では致命的であり、仲間の援護無しには戦うことさえままならない。

俺はそんな属性を持って生まれた。

葉助は風と水の属性を持って生まれた根っからの補助タイプだ。

俺とは真逆のタイプであり、最適のパートナーだ。

おかげで俺達は連携を積み重ねていくことで成長していった。

しかし葉助は――

今のあいつは4属性全てを操れる。

そこに俺の居場所はない。

「気づいたのさ。」

「何にだ？」

ただの嫉妬だった事に。

「自分が馬鹿だったことにさ！」

“ サンダーボルトⅢ！ ”

強力な電撃が真つ直ぐ誠へと突き進む。

しかし右手を掲げた誠が――

“マジックシールドⅢ”

やはり無力化されてしまう。

あのバリアをどうにかしなければならぬ。

バリアなら高負荷を与えれば破壊が可能だろうか？

誠先輩との魔力差を考えると無謀か。

ならばバリアを展開する前に技を叩き込むしかないか。

しかし電撃の速度にすら反応して展開するほどだ。

——それなら

健司は誠めがけて駆け出した。

徐々に縮まる距離。

その行動を見た誠は、前方に腕をクロスさせて身構えた。

魔法が効かないのならば物理。

そう考えての体勢だろう。

——だが

「うおおおお！」

ゴツン——と拳がぶつかるとの音。

しかしそれだけでは終わらない。

そのまま勢いに任せて拳を捻じ込んでいく。

「くっ……」

力では誠を上回っている。

その拳はガードを抜けて腹部へと到達した。

——ニヤリ

つい、笑みが零れた。

その意図に誠が気づいた時には、もはや遅かった。健司は拳に溜め込んでいた魔力を放出したのだ。

「しまっ——！」

放たれた電撃は、誠の内部から炸裂した。

臓器を焼き、中をズタズタにする。

もちろんこの近距離で放った健司もただではすまない。

突き出した健司の右腕もまた、自らの電撃で焼け爛れていた。

「いっ……！」

誠が大量に吐血する。

あまりにも決定的なダメージであった。

「はあ……はあ……！」

俺の勝ちだ。

力押しでもなんでもいい。

ついにこの先輩を打ち倒したのだ。

「強くなつたな……」

「え？」

それは意外な言葉だった。

まさか敵である誠からそんな言葉が出るとは思っていなかった。

「この結果を、望んでいたのかもしれない……」

口から血を零しながらそう言った。

「所詮は、黒島の実験体——歯向かう事はできなかつた……」

「誠先輩……」

「実験体N o. 3、それが俺の名前さ……」

誠は膝をつき座り込んだ。

「そんな事……」

そんな事はない。

この人だって人間だ。

確かに命令で強制的に葉助やレイに手を出そうとした。
でも、どうだ？

それは本人の意思ではなかった。

確かに許せない。

おそらくあの手は、多くの罪を重ねてきているだろう。
それでも、償うチャンスがあるというなら、俺は――

「さあ、止めを刺してくれ……」

俺が下す判断は――

「帰ろう、先輩。」

そう、これしかない。

「……」

「全部償って、やり直せばいい。一人の人間として。」

「健司、お前は……」

“ 本当に……馬鹿な奴だ ”

ずぶり、と肉を抉る音。

ああ、俺はなんてお人よしで単純なんだろうか。

自らの腹部に突き刺さる腕。

それは間違いなく誠の物で――

「いっ……」

盛大に口から血を吐き出した。

傷口から焼けるような痛み。

いや、“ような”ではない。

実際に焼かれているのだ、同じ方法を使われて。

「健司、殺しはしない……」

そう言って笑う誠。

俺はその顔を睨むことしかできない。

また裏切られた。

少しでも信じた俺が馬鹿だった。

やっぱりこいつは悪魔だったんだ。

徐々に朦朧となつていく意識。

おそらく、次に目覚める時は黒島の人形になっているだろう。

俺はそんな運命はごめんだ！

ガシッ!

しっかりと誠の腕を握った。

「——なんのつもりだ?」

この状況で出来ることは一つ……

これから待っている運命を覆す唯一の方法。
掴んだ腕に直接魔力を叩きつける。

“ フレイムタワーⅢ! ”

「お前!」

明らかに焦った誠の表情。

それもそうだろう。

これは自殺にも等しい行為なのだから。

「葉助の邪魔はさせねえ——お前はいいで。」

“一緒に死ぬんだ!”

これは自分の甘さが招いた結末。

少しでも、誠に人間としての感情があると思つた自分の判断ミスだ。
だからせめて——

悪いな葉助……

もう戻れそうに、ない……

燃え盛る炎が二人を包んでいく。

せめて憂いを残さないように、跡形もなく。

“エクस्पロージョンⅢ!”

——炎の閃光が巻き起こった。

下の階から地響きがした。

おそらく健司と兄さんが戦っているのだろう。

どうしてこんな事に……

疑問が頭から離れない。

なぜあの二人が戦わなくてはならないのか。

そもそも兄さんは何故あんな事を……

止めていた思考が今更動き始める。

その度に足の動きが鈍っていく。

“引き返せ”

という言葉が頭の中で反響している。

今更引き返してどうなる？

兄さんを問いただす？

健司を助ける？

——違う

僕は進まなければならぬ。

もう一度喝を入れて駆け出す。

目の前には見慣れた教室。

「……」

そして、見慣れた姿が視界に入った。

レイだ。

レイの周りには夥しい数の死体が転がっていた。

おそらく警備兵士達だろう。

警備が手薄だった理由は、先に侵入したレイが壊滅させたからだろう。

「何故来た？」

レイは睨みながらそう僕に言い放った。

その瞳は、2度目は無いと警告している。

少し前に僕を殺そうとレイは襲ってきた。

果たしてそれは真意だったのだろうか？

それとも……

「君の本当の気持ちを知りたい。」

「私はお前を殺したい。」

そう即答する。

「仇の手先だから？」

そう聞くとレイは頷いた。

——違う。

それは絶対に違う。

だって……

「もう、誤魔化しはいらぬよ。」

あれは——

“レイ・リヴァイアスが、嘘をついている時の瞳だからだ”

刻まれた真実の記憶

夢だと思っていたものの、それは記憶の断片。
とある青年と少女の記憶。

「俺はお前が欲しかった。 自分だけのものにしたかった。」

青年は狂気に満ちた笑顔で語る。

少女は、この青年がもう自分の知ってる兄ではないと悟る。

「貴方は誰……?」

その問いに青年は行動で答えた。

「今こそ愛の契りを！」

青年はその血濡れの剣を……

——少女へと振り下ろした

しかし刃は、少女を切り裂く事は無かった。

「くっ、俺は……」

青年、ユニス・リヴァイアスは何かに耐えるように苦悶の表情を浮かべている。

少女には分からなかった。

自分の両親を殺したのが、本当に自分の最愛の兄なのか。

目の前には確かに兄がいる。

しかし、兄であって違う者を感じている。

「貴方は誰……?」

もう一度同じ問いを投げかける。

「俺は！」

ユニスは握っていた剣を自らの腹部へと突き刺した。

少女は、兄の唐突な行為に啞然となって見ている事しか出来なかった。

「いいか、よく聞け。」

腹部から血を流しながら語りかける。

確かにその姿は、最愛の兄のものであった。

「お前だけでも、ここから逃がす。」

分からない。

何を言っているのだろうか……？

「お前が、クロトの手の届かない所まで……」

聞き覚えのある名前。

たしか校長先生の名前——

ユニスは、自らが妹に送った胸元のペンダントに触れる。

これは境界結晶レイクォーツを使つて作つたものだ。

ペンダントが眩しく光りだす。

「えっ?」

何をしようとしているのか分からなかった。

ただ、兄が何かを眩くたびに光は強さを増していく。

「まずい!」

誰かが部屋に乱入してくる。

いや、見覚えがある——

「ちっー！」

その姿を捉えたユニスは、左手で短剣を投げつけた。
ずぶり！

つと短剣は男の左足に突き刺さった。

「何をしているユニス！ これでは話が！」

「クロト、お前に邪魔はさせない！」

ああ、この人を私は知っている。

セイントガルド魔法学校の校長先生だ。

「さっさと妹を殺せ！ それでお前の願いは！」

ペンダントの光が更に増す。

「レイ、生きろ……」

ユニスは、少女——レイ・リヴァイアスに向けて最後の言葉を贈った。

「やっと気づいたんだ、本当の君に。」

レイは視線を逸らす。

それは否定か拒否か。

「何を言っている……?」

そう、あの時見た。

レイの障壁が砕けた瞬間に——あの幽霊と瓜二つの姿を。

障壁は魔法に対しての障壁でもあり、彼女自身を隠す障壁でもあったのだ。

「レイ……」

幻として現れていたレイは、おそらく僕の遺伝子に刻まれた記憶。それがレイ本人と呼応する事によって出現していたのだろう。

1歩ずつレイに近づく。

「くるな！」

レイがそう叫ぶ。

違う、それは彼女の言葉じゃない。

また一歩近づく。

「それ以上近づくな、今すぐ殺すぞ！」

そう言っつきつく僕を睨む。

でも、僕は歩みを止めずに近づいていく。

「——っ！」

“サンダーボルトⅢ！”

レイが放った雷は、僕にかすりもせず、壁に当たり消滅した。当然だ、元から当てる気が無いからだ。

「どうしてお前は！」

あの夢はレイとその兄、ユニスの過去。

何が原因かは分からない。

ただ、黒島がRシリーズを生み出すために使った、レイとユニスの遺伝子が関係しているのかもしれない。

「レイ、君は戦っちゃいけない。」

そうだ、間違ってる。

彼が望んだ事はこんな事じゃない。

その思いを知ってるからこそ僕は――

“彼女を守りたい”

「でも私は！」

「大丈夫だよ、レイ……」

彼女を突き動かしているものは復讐。

家族の仇、兄の仇。

あの男の顔が浮かぶ。

「僕が、黒島——いや、クロトを殺す。」

その言葉を聞いてレイが驚愕した。

「何故、その名前を知っている。」

おそらくこの名を知るのは、この世界では黒島本人とレイだけだろう。しかし、僕はレイの過去を見てしまった。

責任、というわけではない、ただ――

「僕にも分からない。」

――でも

「でも、きつとこれが、彼の願いだから。」

それは直感。

事故であつても継承してしまった記憶。

知った代償。

僕はその責務を果たす。

「葉助………?」

ピシッ………

何かに亀裂の入る音。

それはレイの障壁か。
あるいは心の壁か。

「だから君は、普通の女の子でいてくれ。」

そう言つて、彼女の頭を撫でた。

「あ……」

パリン！

彼女を纏う障壁が音を立てて碎け散った。

「僕が、守るから。」

「ああ……」

レイの瞳から、一筋の涙が流れた。

それは懐かしき兄の姿を思い浮かべた涙だろうか？
撫でている手を下ろしてレイを背にする。

「じゃあ、いつてくる。」

「ねえ、今度はいつ帰ってこれるの？」

何処かで聞いた言葉。

「今度もすぐ帰ってこれるさ。」

そう言うと、彼女はいつも嘘つきと言ってくれる。

「待ってる——だから！」

“ 必ず、帰ってきて”

もちろんさ、僕は必ず帰る。

全てに決着をつけて！

決戦の時

教室を後にして校長室を目指す。

そこには奴、黒島が待っているはずだ。

レイが暴れてくれたおかげか、罾も見張りも見当たらない。

目の前にある校長室の扉に手をかける――

ビリッ！

ぴりつとした感覚が指先に走る。

これは、防護障壁か何かだろうか。

強力な衝撃を与えて壊すのが手っ取り早いだろうか？

まるで健司みたいな考え方だな、と自嘲気味に笑る。

しかし、特に手を出す事なくその障壁は自然と消滅した。

「入りたまえ。」

中からそう声をかけられる。

——罨だ！

脳はそう訴えている。

しかし、結局は入らなければ進めないのも事実だ。

「っ！」

僕は思い切って扉を開けた。

狭く暗い部屋の中に、大きなソファ―に腰掛ける初老の人物。

市民には市長と呼ばれ、この学校の校長でもある男。

「まさか、君が来るとはな……」

大して興味もなさそうに黒島が呟いた。

「黒島……」

全ての黒幕。

この悪夢を作り出した張本人。

そして——僕を作り出した男。

「レイが来ると思っていたのだがね。」

「レイは来ない、だから僕がここにいる。」

そうだ、レイがもう戦わなくてもいいように。

普通の女の子として暮らすために。

「ほう、実験体ごときに何ができると?」

「二人の少女の夢は守れる!」

精神を集中させ臨戦態勢に入る。

「人形ごときが……」

ぐにやり、と視界が歪む。

いや違う、空間自体が歪み始めている。

「いったい何が！」

狭いと思つた部屋が歪み、形を失っていく。
息苦しさに立っているのがやつとのほどだ。

「境界移動ラインスワープの予兆が始まったようだ。」

なんだって！

この男は、もうここまで準備を終えていたというのか！

早く止めなければ、このままレイや黒島の世界に飛んでしまう。

「ならその前に、お前を止めてみせる！」

“ ウィンドカッターⅢ！”

真空の刃を黒島めがけて放つ。

「ふん……」

しかし、黒島の体に到達する前にかき消された。

この現象には見覚えがある。

そうだ、レイのあの障壁と一緒に。

ならば対処方法も一緒だ。

間髪入れずに黒島に向かって駆け出す。

懐に入りさえすれば！

しかし、どんなに走ろうと距離は一向に近づかない。

「ふんふん……」

ふいに背後から声が聞こえた。

“マジックシールドⅢ！”

反射的に展開した障壁は、背後から迫っていた炎を打ち消した。もし直撃していたらと考えるとぞつとする。

「どとうした……？」

声は四方八方から聞こえてくる。

いつの間にかソファに腰掛けていた黒島の姿は消えていた。

——魔力の塊がくる！

“マジックシールドⅢ！”

今度は雷が遅いかかる。

再び障壁で攻撃を防ぐ。

このままでは防戦一方だ……

しかし、現状を打ち破る策が思い浮かばずにいる。

敵の姿は見えない。

部屋が更に歪み、事態は悪化する一方だ。

「ふうふう……」

黒島の不気味な笑い声が部屋中に響く。

まるで嘲笑うかのような響きに苛立ちが増す。

「くそっ！」

“ ウインドカッターⅢ！”

真空の刃を広範囲に拡散させて放つ。

しかし掠った感触はない。

「無駄だよ。」

まるで、奴がここに存在していないかのような……

いや、本当に存在していないのではないか？

心を落ち着けてもう一度思考をめぐらせる。

「……」

そもそもこの部屋におびき寄せるのが奴の目的だったとしたら——

「観念したか。」

だとすれば、この部屋から脱出しなければ。

「では——死ね！」

全方位から真空の刃が迫る。

これは、マジックシールドでは防げない――

パリン！

何かが碎ける音が響く。

空間に裂け目が出てくる。

「こっちだー！」

誰かの声がする。

僕は夢中でその裂け目に飛び込んだ。

――

そこは見覚えのある廊下だった。

どうやらあの空間からは脱出できたようだ。

「葉助、よかった……」

「レイー！」

声の主は僕がよく知る人物だった。

いつもの見慣れた障壁を展開したレイの姿だ。

「校舎が歪み始めて様子を見に来たら——ぎりぎりだったな。」

「ごめんレイ……」

「大丈夫、これは戦いじゃない。」

それでも僕はまたレイを危険な目にあわせてしまった。

しかし、このままでは——

校舎の歪みは着々と進行している。

それは境界移動ライズアップが進行しているのと同義である。

“ …… ”

一瞬誰かの気配を感じて振り向く。

“ …… ”

ああ、彼女だ。

今まで何度も僕の前に現れた……

過去のレイの姿をした幻影。

それが今、再び僕の前に現れたのだ。

“ …… ”

彼女はついて来いと言わんばかりに、僕達に背を向けて歩き出した。

「葉助？」

急に歩き出した僕に驚きながらも、レイが後ろをついてくる。

——たどり着いたのは2階の警報機の前。

レイの幻影はにつこりと微笑むと、警報機を指差した。

これを押せっていうのか……？

警報機のボタンへと指を伸ばす。

「葉助、何を……？」

“ そう、それでいいの ”

誰かの声が聞こえる。

“ 私が干渉できるのはここまで、あとは貴方達が…… ”

強く警報機のボタンを押し込む。

ガチン！

何かがはまる音。

それと同時に、音もなく警報機のある壁が消えていく。

「この先に——」

この先に——奴の本体がいるのか。

おそらく相手はまだ気づいていないはずだ。

時間もない。

「レイ——」

「断る。」

言おうとした言葉は即座に却下された。

「お前の言いたい事はわかる、けど——」

「……」

「これが最後だから——だから！」

強い意志を持った瞳。

僕はそれを、止めることはできなかつた。

暗闇の中を二人で歩いていく。

無限に続くのではないかと錯覚するほどの深淵。

気を抜けば全て飲み込まれてしまいそうだ。

この闇はいつ終わるのだろうか？

レイの足音と息遣いだけはしっかりと聞こえてくる。

「葉助……」

不安そうなレイの声が聞こえる。

「大丈夫、きつともうすぐだよ。」

そうは言うものの、先は一向に見えない。

どこを見ても、闇、闇、闇。

闇は不安を掻き立てる。

まさかこれも黒島の術の一つなのだろうか？

相手の攻撃はもう始まっている…？

そもそも、この校舎自体が奴のテリトリーなんだ。

先ほどの校長室の事を考えてもありえない事ではない。

こちらの行動を先読みされていても不思議ではないのだ。

——違う！

そう、この暗闇の正体は僕の弱い心だ。

僕が奴との対決を恐れているからだ。

もしかしたら負けるかもしれない。

レイを守りきれるか自信がない。

その気持ちが一——

徐々に暗闇が晴れていく。

そして、目の前に一筋の光が見えてくる。

そうだ、僕は！

守るって決めたから。

だから！

さらに光が強くなる。

「来たのか……」

開けた空間に出た。

中央には黒い鎧のような物に覆われた大男が立っている。

その声が辛うじて黒島のものだと分かる。

「お前は……？」

これが本来の彼の姿なのか？

それとも何かあるのだろうか？

「……まで来るのは意外だった。」

表情も声音も分からない。

感情も何も感じられない。

人間らしさが欠落していて気持ち悪い。

本当にこの男があつた黒島なのだろうか？

あれほど帰還を望み、世界を欲した男なのか？

「境界移動はさせない！」
ラインズワープ

考えても仕方がない、奴を倒さなければ終わらないのだ。

「向かってくるか、愚かな。」

急に空気が重くなる。

まるで全身を押し付けられているかのような錯覚を感じる。

脳ではありえないと否定しているが、身体が思うように動かない。レイも同様のようだ。

「所詮、その程度というか事か。」

「——で」

「ん？」

「こんなところで……！」

立ち止まっていられない！

“ ウィンドカッターⅢ！ ”

真空の刃を黒島に向けて放った。

「む……………」

刃は黒島の鎧ごと腕を引き裂いた。

「はあ、はあ……………」

体を覆う圧力が消える。

これでなんとか動ける。

「ほう……………」

驚いたような口振りだが、驚きという感情は感じられない。

「黒島、お前の好きにはさせない！」

“ バブルボムⅢ！ ”

無数の泡を弾幕のように拡散させる。

黒島は避ける事もせず棒立ちしている。

泡の爆発で鎧を削っていく。

「ふん。」

ありえない事が起きる。

一瞬で、さっきまでのダメージが回復したのだ。

「馬鹿な……」

レイも驚愕している。

こんな事があつてたまるか！

しかし、現実には完治した黒島がそこにいた。

「一体、あれはどうなってるんだ。」

「もう終わりか？」

黒島は何事もなかったかのようにそこに立っている。
強力な再生能力？

それとも効果の高い治癒魔法？

いや、違う。

あれはまるで時間が戻ったかのような感じだった。

ありえない。

時を操る魔法など聞いたことがない。

時空龍ですらそんな魔法は扱わない。

“サンダーボルトⅢ！”

雷撃を黒島に浴びせる。

そんなわけがない、攻撃し続ければ奴も消耗するはずだ！

「葉助！ 無駄に魔源^{マナ}を消費しすぎだ！ あれは——」

“ファイヤーウォールⅢ！”

“ウインドカッターⅢ！”

同時詠唱で奴の心臓辺りを集中攻撃する。

「んぐっ……い！」

貫通した攻撃は奴の胸に大穴を空けた。

「やった！」

あれだけの再生力の化け物でも、魔源^{マナ}を生み出す器官ごと破壊すれば！

「無駄だ。」

「そ、そんな！」

しかし、奴は何事もなかったようにそこにまた立っていた。

胸の傷も完治している。

「はあ、はあ……」

魔法の連続使用で魔源^{マナ}を多く消費してしまった。

しかし、奴はまったくの無傷の状態だ。

「葉助、奴の弱点はおそらく別にある。」

レイは冷静にそう言った。

弱点？

頭を潰しても、心臓を吹き飛ばしても死なない相手に弱点があるっていうのか。

「おそらく奴は抜け殻だ。あの抜け殻を動かしている何かがあるはずだ。」

「そんな事言われても！」

この円形の空間には何も無い。

辺りを見回しても、数本の柱が聳^{そび}え立っているだけだ。

いや、この柱の配置に何か意味が？

——なら、試してみるか。

“ウインドカッターⅢ！”

柱にめがけて真空の刃を飛ばす。

「——！」

黒島はその攻撃を自ら盾となって防いだ。

「レイ、どうやら当たりのようだ。」

あの柱を全て壊せば、もしかしたら！

微かな勝機が見えてきた。

問題は自分の残りの魔源^{マナ}だ。

そつと、レイが僕の手を握った。

「レイ？」

「私の魔源マナも使え。」

手の平が熱を帯びていく。

魔源マナが流れてくる感覚。

本来ならば、同じ属性の魔源マナを扱う者同士でしか不可能だ。

しかし、全属性のエーテル器官を持つ僕ならば、誰からでも魔源マナを譲り受ける事が出来る。

「うん、一緒にいこう。」

“ ウインドカッターⅢ！ ”

二人同時に詠唱する。

その真空の刃はいつもの数倍の速度と大ききで飛んでいく。

「グウウー！」

その刃は黒島の腕を貫通して柱を一本破壊した。

“サンダーボルトⅢ！”

今度は雷が柱を砕く。

“ファイヤーウォールⅢ！”

“バブルボムⅢ！”

詠唱の早さ、威力、いずれにも黒島は対応できない。自分でさえ何が起きているのかわからない。でもレイの暖かさだけは伝わってくる。

「一体コレハ！」

残る柱は1本！

「レイ。」

「ああ、分かっている。」

「この一撃で終わらせる！」

「サセルカアア！」

焦った黒島がこちらに向かって走ってくる。

しかし、今更僕達を止める事はできない。

僕とレイの体から光が発せられる。

2つの属性の魔源^{マナ}を収束させる。

理論上は可能だが、誰も実践しなかった魔法が今紡がれているのだ。

“ユニオンエクストリーム！”

僕とレイの詠唱が重なった。

「こ、こんなものは！ コンナ！」

暖かな光が広がっていく。

ああ、僕は、この光を――

光で視界が埋まっていく。

何が起こっているのか、もう分からない。

「葉助。」

声が聞こえる。

レイ……？

「約束。」

ああ、そうだった。
君を守るって――

「違う。」

違う？

「もう一つの方。」

“ 必ず、帰ってきてきて ”

ああ、そうだった。

でも体が動かないんだ。

“ 必ず、帰ってきてきて ”

きつと魔源マナの使いすぎだ。
体が鉛のように重い。

「大丈夫だから。」

僕は――

「だから――帰ってきて！」

全てを失った男

夢を見ていた。

それはぼんやりとしていて、目覚める頃には忘れてしまう儂い夢。手で触れると消えてしまいそうで……

いつからだろうか？

とても曖昧で、宙に浮いているような浮遊感。

それでも意識ははっきりしていて、なんとも不思議な夢だ。でもそれはすごい幸せで。

僕はずっとその夢を見ていたかった。

だって、目が覚めたら——全て失われてしまうから。

現実がまた僕に襲い掛かってくる。

嫌だ、目覚めたくない。

“目覚めなさい”

ずっと夢を見ていたい。

“前に進みなさい”

でもこれは、やっぱり夢で――

現実には、あの日僕は――

“ごめんなさい”

誰かの謝る声が聞こえた気がした。

――

――

――

「んっ……っ？」

冷たい雫が頬を滴り落ちる。

「ハハハハハ。」

太陽が雨雲で隠れたおかげで、なんとか睨を開く事ができた。周りを見渡すと、半壊した校舎の瓦礫が散らばっていた。体は鉛のように重い。

おそらく魔源マナの使いすぎによる症状だろう。

「レイ？」

そうだ、レイはどこに？

確か最後の魔法を放った時に――

“ごめんなさい”

あの誰かの声が思い出される。

コツン、つと左手に何かがぶつかった。

ひんやりとした感触

「——レイ」

そこにはレイが横たわっていた。

その体は温かみを感じられない。

そして何故か、血まみれの健司の生徒手帳を握っていた。

「」

ポツポツと、雫が瓦礫へと滴る。

ああ、僕は——

全てを洗い流すかのように、雨が降り注ぎ始めた。

「——帰ろう。」

そうだ、帰ろう。

みんなで……

“この日僕は、全てを失った。”

|
|
|

目が覚めたら葉助は眠っていた。

その鼓動は、今にも止まってしまいそうなくらい弱々しい。

おそらく、魔源マナを使いすぎたせいだ。

このままではおそらく死ぬだろう。

選択肢なんてなかった。

だって、彼に生きていて欲しかったから。

「よお……」

「健司！」

そこに現れたのは血まみれの健司だった。
傷を見る限り、彼はもう――

「葉助のやつ、やばいんだろ？」

その言葉に黙って頷く。

「俺の魔源^{マナ}、使えよ――コイツならいけるだろ？」

その瞳に強い意志を感じた。

二人で葉助に手を掲げる。

“ごめんなさい”

一人にしてしまう事への謝罪。

でも、貴方に生きていて欲しいから。
だから――

“ありがとう”

――
――
――

「オオオオ……」

この匂い、この空気、間違いない！

私は帰ってきたのだ、セレニティアに！

しかし、体中の傷は癒える気配がなかった。

黒き鎧は砕け、本来の体がむき出しになっていた。

だが、まだチャンスはある。

時間をかけて、また力を蓄えればいいのだ。

私には、かの世界で得た知識がある。

この知識を行使すれば、セレニティアを掌握するのも容易い。
そしていずれはロキアも我が手に――

「誰だ……?」

足音が聞こえる。

「……」

「お、お前は!」

なんとということだ!

何故ここに!

「この裏切り者が!」

「これが運命だ。」

認めない、私は認めないぞ！

こんな最後はああ！

「ユニ——」

男の剣先は、無慈悲に黒島に振り下ろされた。

この世の物とは思えない、憎悪の表情を浮かべながら……

「ここから始まる、レイ。」

男はニヤリと、唇を吊り上げた。

後編

登場人物

桂木葉助
かつらぎようすけ

本作の主人公。

男性 21歳 身長166cm 体重58kg

黒髪の短髪、瞳はダークブルー。細めの緑色のフレームの眼鏡。

? せ型体系で、腕や足に数ヶ所傷がある。

黒のスーツに、黒いローブを羽織って行動している。

多くの戦いを経て、肉体的にも精神的にも成長した姿。

魔銃まがんと呼ばれる特殊な武器を使用している。

魔銃まがん・フェンリル、ヘイムダルを所持。

リーダーであり、師匠でもある銀華を慕っている。

レイ・リヴァイアス

ラタトクス学園に突然転校して来た謎多き人物。

女性 18歳 身長155cm 体重45kg

金の長髪でポニーテール、瞳はライトグリーン。

3年前に比べ、より大人の女性として成長している。(全体的な肉付き)

白のワンピースで過ごしている。

魔源欠乏症の影響で、3年前の事件より以前の記憶を無くしている。

現在はある程度記憶を取り戻したが、まだ完全ではない。

以前のような戦闘力は取り戻している。

銀華^{ぎんか}

時空龍でありながら、時空龍と戦う謎の美女。

女性 ??? 歳 身長167cm 体重59kg

金の短髪、瞳はダークブルー。

やや細身だが、筋肉質な体型。

時空龍の民族衣装、“和装”を身に纏っている。

3年前にボロボロの葉助とレイを拾い、部隊に引き入れる。

彼女自身も時空龍で、同族殺しとして他の時空龍に狙われている。

時空龍殺しと呼ばれる、魔銃^{まがん}使いとは彼女の事である。

葉助に魔銃^{まがん}の扱いを教え、自分の後継者となるよう教育している。

その目的は、父である九垓^{くがい}の仇討ちである。

魔銃・ナルヴィ、ヘル、ロキを所持。

ヨルムンガルドは宗月との戦いでの使用で故障した。

黒翼

葉助達を助けた、心優しきセレニティアの住人。

男性 ???歳 身長192cm 体重79.2kg

髪はライトグレーの長髪、瞳はダークブラウン。

やや細身だが、筋肉質な体型。

黒のキャバリア・ブラウスを纏い、斧槍を背負っている。

倒れていた葉助達を助け、治療をしてくれた。

銀華とはかつての恋人のようで、二人の子供である鈴華を一人で育てていた。

彼は時空龍ではなく、この世界特有の黒竜族という種族である。

時空龍と同じく、人型から龍型へ変身する事が出来る。

鈴華

黒翼と共に暮らす時空龍の少女。

女性 ???歳 身長112cm 体重18.8kg

金の長髪、瞳はダークブルー。

6歳児相応の体格。

赤いローブを纏い、赤いベレー帽を被っている。

銀華と黒翼の娘。

時空龍の血を引くため、その魔力は見た目に似合わず強大である。

銀華が母親だという事は知らされていない。

ユニス・リヴァイアス

生きていたレイの兄。

男性 26歳 身長185cm 体重72.4kg

金髪のセミロング、瞳はライトグリーン。

色白の?せ型。

赤とブラウン基調の貴族の服を着用。

レイの兄で、現リヴァイアス家当主。

世間一般では死亡した事になっているが、ひっそりと屋敷の復旧に勤しんでいた。

妹に比べ、魔法の才能は凡庸である。

クロトとの間に何があったかは未だに不明である。

魔銃使い

魔道都市ヴエネティアの某所。

時空龍達にも秘匿されたこの場所に、3人は集まっていた。

「今こそ時空龍の支配から脱する時なのです！」

テレビには黒島市長の演説が流されている。

その映像を見て、初老の男が頭を抱えている。

中年の女性は、テレビに興味は無いようで、自らのネイルの具合を確認している。

中年の男性は、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、初老の男に尋ねる。

「さてカスパ、この状況をどうする？ あの学園はお前がスポンサーとして管理してい

たはずだぞ？」

「言われずとも分かっている、バルト。」

バルトと呼ばれた男は、まるでこの状況を望んでいたかのような態度であった。それがまた、カスパの悩みを加速させる。

黒島が怪しいのは分かっていた。

しかし、それを分かっているながら、この現状を止める事が出来なかった。

それは、黒島のバックに時空龍達がいたからだ。

3賢者と呼ばれるこの3人でさえ、時空龍に刃向かう事は出来ない。

力でも、知識でも、彼らには到底及ばないのだ。

事実上、時空龍に人類は支配されていると言っている。

「メル、お前は何か意見はないのか？」

「さてね、自分達の汚点なら、勝手に処理するんじゃない？」

メルは話自体に興味が無いようで、眼鏡を外すと椅子に寄りかかった。

どうやら、自分以外危機感が全く足りないようだ。

しかし、一番の疑問がある。

何故、時空龍子飼いのあの男が、わざわざ時空龍に刃向かうような行動に出たのだろうか？

「これではまるで——」

「奴らも平和に飽きてるんだよ、カスパ。」

「そんな事……」

「しかしだ、これで互いにいい口実が出来ただろ？」

嬉しそうにバルトが語る。

「そうか、この男も求めているのだな……」

「戦争のか？」

「当然！ 黒島は時空龍達が処理するとして、我々は戦争の準備を始めるべきだ。」

「よくも言ったものだ。」

ともあれ、今回の事件の事後処理も必要だ。

もし、本気で時空龍達と戦争するというなら——

「では、今宵は解散とする。」

「事後処理は頼んだぞ——カスパ・ラグナール」

「ああ、眠い……」

号令と共に、カスパを残して2人の賢者がその場を後にする。

「レイ、無事でいるのじゃぞ。」

カスパは、送り出した少女の顔を思い浮かべた。

あの事件から、3年の月日が流れた。

事件自体は、一夜のうちに時空龍達の攻撃で学園を崩壊させる事によって解決した。

しかし、黒島の乱と呼ばれた大事件は、時空龍達と人類に大きな溝を作った。

黒島の言葉は、元々支配に不満を持った人々の心に火を点けたのだ。

そして現在、その火は炎となり、いつこの都市を焼いてもおかしくない状態へとなっていた。

しかし、状況は変わった。

時空龍の高官達が、次々と暗殺されたのだ。

人類の手では不可能な事件に、時空龍達は身内を疑い、人類への対策どころではなくなつたのだ。

それと時を同じくして、一つの噂が流れ始めた。

ドラゴンスレイヤー
時空龍殺しと呼ばれる、魔銃^{まがん}使いの噂である。

男は眠れなかった。

不安が心を押し潰しそうになる。

そろそろ“自分の番”だという事実が男を蝕んでいた。

古ぼけた部屋のベットの^上、シーツに包まり、ガタガタと震えている。

こんなはずじゃなかった、こんな事になるなら手を出すんじゃないかった。

そんな後悔ばかりが思い浮かぶ。

最初は商売になる、上手い話しだと思った。

戦争になれば、人間にも身内にも品が売れる。
ある程度儲けて、この世界からおさらばすればいいと思っていた。

ガタン！

何かが倒れる音がする。

男は情けない声を出して、更に震え始めた。

死にたくない！死にたくない！

それはありえない言葉。

時空龍は、その生命力故に簡単には死ねない。

例えば、人間の強力な魔法使いが相手だろうと、殺される事はないだろう。

しかし、この男は知っていた。

かつての同業者の死体。

その死体は内部から破壊されていた。

絶対的な死のイメージ。

だからこそ、この男は死に囚われていた。

いつ現れるとも分からない死神を恐れて――

「——睦人むつとだな？」

心臓が大きく跳ねる。

きた、キタきたきたきた！

死神がきた！

「こ、殺さないでくれ！」

男は無様に命乞いをする。

包まったシーツを捨て、額を床に擦り付け、命だけはと乞い願う。

「——」

漆黒の死神は、ただその姿を眺めている。

「出来心だったんだ！ 反省している！ だから見逃してくれ！」

「——聞きたい事がある。」

「わ、私に分かる事ならなんでも！」

一筋の希望が見えたとばかりに、男は話に食いついた。

「黒島がいた世界、その名を知っているか？」

「——は？」

それは男にとっても予想外の質問だったようだ。

「二度は言わん。」

そう言って、死神は銃を構えた。

銀色の銃身が、暗闇の中でもはっきりと見て取れる。

「ひい！ ま、まっってください！」

男は必至で記憶を引っ張り出す。

3年前、取引を持ち掛けた高官との話。

確か、異邦人の男の話をしていたはずだ。

そうだ、思い出したぞ！

「た、確かロキアとか言っていました！」

「ほう？」

助かった。

男は心の底から安堵した。

「なるほど、貴重な情報をありがとうございます。」

死神は感謝を述べると、男に狙いを定める。

希望が絶望に変わる瞬間だった。

「なぜだ！ 私情報は——」

男の言葉と同時に、死神の手で引き金が引かれる。

打ち出された銃弾は、男の心臓目掛けて真つすぐ飛んでいく。

しかし、銃弾は男に接触する前に空中で静止する。

時空龍達は、強力な魔法障壁を持っている。

これのおかげで、通常兵器はおろか、魔法すらもほぼ無効化する。

それは男も分かっていた。

だが、男の死は覆らない——

何故ならば……

目の前にいる死神は、時空龍殺しドラゴンスレイヤーと呼ばれる魔銃まがん使いだからだ。

静止した銃弾は、まるで食い破るように魔法障壁を貫通していく。

3重の魔法障壁を貫通し、その銃弾は男の胸へと吸い込まれるように入り込み——

そして、爆ぜた。

臓物は飛び散り、顔は半分吹き飛んだ。

不幸なのは、時空龍はこれで即死出来ない事だ。

男は、死の苦しみを数十分味わいながら、やがて絶命するだろう。
ただ一つ、男にとって幸運なのは、これから先は安眠出来る事だろう。
死神は、哀れな肉塊に背を向けて、その部屋を後にした。

喪失の先

暗い夜道を照らすのは壊れかけの街灯。

時折点滅し、そのか細い光が消えかける。

ここは魔道都市ヴェネテアの影だ。

急速な発展の結果生まれた闇、スラム街と呼ばれる場所。

その夜道を一人、俺は歩いていた。

数人、闇の中で蠢く人影が見える。

しかし、誰も俺に見向きもしない。

纏ったローブは、闇に紛れば誰も視認出来ない程の漆黒。

そう、誰も俺には気づいていないのだ。

寂れた酒場の前に辿り着くと、俺は壊れかけのドアを2回ノックする。

「アイコトバハ？」

“銀の龍はまだ羽ばたく”

そう答えると、偽装された古ぼけた木造の扉は掻き消え、代わりに鉄の扉が姿を現す。

“角膜スキャン完了”

機械アナウンスが流れると、音もなく扉が横にスライドして開く。

外部の見た目とは違い、中の設備は近代的な構造となっている。

あくまでも外部の酒場は偽装のためでしかない。

通路を真っすぐ進み、エレベーターに乗り込む。

階層表記はなく、下の居住区との行き来専用だ。

フードの部分を脱ぎ、外界に顔を晒す。

ここならば見られても問題は無いからだ。

今や時空龍達に追われる身だ、外で素顔を晒すわけにはいかない。

「ご苦労だったな。」

エレベーターから出た俺を出迎えた女性の、第一声がそれだった。彼女は銀華^{ぎんか}さん、俺の命の恩人だ。

そして、上司でもある。

「目標は死亡、無事任務完了しました。」

「それで、何か有益な情報は？」

「それは後で報告に行きます。」

銀華は一瞬眉を吊り上げると、何か納得したように頷いた。

「わかった。とりあえず、“妹”にでも顔を見せておけ。」

「了解です。」

「それと、得物の整備も忘れるなよ。」

そう言つて、自らの得物をちらつかせた。

“魔銃^{まがん}”

俺が銀華さんに教え込まれた特殊な武器だ。

当然、俺のホルスターにも魔銃^{まがん}が格納されている。

人の身で唯一、時空龍を殺せる大事な武器だ。

「おかえりなさい！」

自室に入ると、元気な声が出迎えてくれた。

綺麗なブロンドの髪は、丁寧^{ていねい}にリボンでポニーテールに結われている。

清潔感のある白のワンピースは、このスラム街とはかけ離れたイメージを与える。

「ただいま、レイ。」

脱いだローブをレイに手渡し、椅子に腰かける。

机の上には、銃のパーツが散乱している。
こいつの組み上げも、早く終わらせたいとこだな。

「新しい弾、机の引き出しに入れておいたよ。」
「いつも悪いな。」

レイにはいつも助けられている。

昔のように前線で戦わなくなった分、こちらとしては気が楽ではあるが。
そう、死んだと思っていたレイは生きていたのだ。

しかし、その代償は大きなものであった。

“ 魔源^{マナ}欠乏症 ”

体内の魔源^{マナ}が、長時間不足している状態が続くと起きる病気だ。

結果、脳への負荷がかかり、彼女はあの事件以前の記憶を失った。
それが奇跡の代償。

しかし、あんな過去ならば、忘れてしまってもいいのではないか？

実際、今の彼女は生き生きしている。

女性としても真つすぐに成長していると思う。

「どうしたの？」

「いや、我が妹ながら可愛いなど。」

「もう！」

じつと見ていたのに気づかれたので、適当にはぐらかす。
レイは顔を赤らめながらも、可愛く頬を膨らませた。

そう、確かに俺はあの日全てを失った。

その代わりに、新しい居場所を手に入れた。

そう、この“紅桜”^{ベにぎくら}という新たな居場所を……

運命の日

あの日の事は、今でもはつきり覚えている。

そう、あれは僕われがレイを背負って歩いてきた時だ――

――
――
――
校舎が少しずつ離れていく。

僕等が帰る場所――寮を目指して歩く。

他に帰る場所もない、今思いつくのはそこだけだ。

重い身体を引きずるように進む。

背中に背負ったレイは冷たいままだ。

壊れかけた眼鏡が地面に落ちる。

それでも、前に進む……

「——したのか？」

「え……？」

人だ。

ぼやけてよく見えないが、そこに人がいた。
でも、この声はどこかで——

「黒島を殺したのか？」

「——」

そうだ、僕は黒島を——

急速に意識が遠のいていく。

もう、立っているのも、限界だ。

消えゆく意識の中、レイと健司の顔が浮かんだ。

——

「おい、どうしたんだよ葉助？」

「健司？」

辺りを見渡すと、そこは見慣れた教室だった。

どうやら、休憩時間に眠ってしまったらしい。

目の前にいる健司が、心配そうにこつちを見ている。

「大丈夫か？ まだ寝ぼけてんのか？」

「いや、大丈夫だよ。」

「そうか、なら良かったよ。」

そう言つて健司が微笑む。

その笑顔は、どこか寂しさを感じさせるものだった。

「健司？」

「頑張れよ、葉助。」

「——健司！」

—
—

伸ばした手が空を掴む。

その時点で、僕の意識は現実に戻っていた。

「派手なお目覚めだな。」

聞き慣れた声が聞こえる。

ぼやけた人影は、僕に眼鏡を手渡してくれた。

それをかけて、改めて相手の顔を見る。

「寮母さん？」

「ああ、そうだ。」

いつもと雰囲気が違うが、間違いなくその人は寮母さんだった。
微かに揺れる部屋。

レイはベッドの上に寝かされて、何か機器を取り付けられている。

「状況が理解出来ない、という顔だな。」

「……」

この異常な状況。

寮母さんの脇には、黒いスーツ姿の男が2人座っている。

その手には見慣れない金属の塊が握られている。

「お前が倒れた後、二人共私の車に乗せた。他に知りたい事は？」

「レイは無事ですか？ それと、貴女の目的はなんですか？」

第一にレイの安全だ。

そして、この寮母さんの正体が気になった。
普通ではないのは、この状況が物語っている。

「見ての通り、今治療中だ。魔源欠乏症の症状さ。」

「そんな……」

“魔源欠乏症”とは――

短時間に大量の魔源を消費する事によって起こる症状の事を指す。
その症状は意識混濁、生命維持活動の低下等、結果的に死に至る。

魔源の譲渡によって、減少した魔源を補充するのが治療法だ。

しかし、譲渡を行えるのは、同じ属性の魔源を持つ者だけだ。

あの機器は、魔源の譲渡を行っているのだろうか？

「それと私の目的と言ったな？ それはもう果たされているよ。」

「どういう事ですか？」

「私の任務は、黒島の監視――最終的には暗殺だったからな。」

暗殺……

つまり、この人は黒島の目的を知っていて、最初から泳がせていたんだ！

「それ、動くのが遅すぎじゃないですか？」

結果的に、街の崩壊を防いだのは僕達だ。

この人達は何もしてくれなかったじゃないか！

「あくまでも、目的は監視だ。情報が必要だった。」

「そのせいでこんな事になったんでしょ！」

つい、声を荒げてしまう。

そうだ、この人達がもっと早く動いていれば、レイは、健司は！

——健司はどこだよ。

記憶の片隅にある、血まみれの生徒手帳。

僕は、ゆつくりと制服の右ポケットに手をつ突っ込む。

手に当たる感触、二つの生徒手帳。

一つは間違いなく僕の、そしてもう一つは……
握りしめ、ポケットから取り出す。

「あああ……」

血まみれの生徒手帳が、その手に握られていた。

“生徒名 村田 健司”

その生徒手帳が全てを物語っていた。

あいつはもう――

「感傷に浸るのはそれくらいでいいだろうか？」

「――貴女は！」

寮母さんは、冷え切った瞳でそう言った。

まるで、人の死など何も感じていないかのような目だ。

暗殺なんて言葉を軽々しく言える人なんだ、それが当然の異常者なのだろう。

「お前達には、今二つの選択肢がある。」

「どういう意味です?」

「黙って聞け。」

寮母さんの目の鋭さが増す。

睨まれただけで、心臓の鼓動が止まりそうになる。

「二つ目、時空龍共に捕まって実験体になる。」

ああ、そういう事になるのか。

黒島の研究には、時空龍達も興味を持つだろう。

生きた検体がいるのならば、確実に手に入れようとするだろう。

僕達二人は、そもそも身を寄せる相手もない。

逃亡の果てに捕まるのも時間の問題であろう。

「二つ目、私が与える試験に合格して、私達の仲間になる。」

「え?」

それは意外な選択肢だった。

この人達の仲間に？ 僕達が？

ありえない、なんでわざわざそんな……

「私は、黒島を殺したお前達を評価している。 奴はかなりの魔法使いだった。

それを、子供二人が倒したという事実……」

「それがスカウトの理由ですか？」

「そうだ。 逃げ場の無いお前達には最高の申し出だろ？

住む場所も、仕事も与えてやろうと言ってるのさ。」

でも、その選択肢を選ぶという事は――

一瞬、黒島の顔が脳裏に浮かぶ。

僕も、人殺しになるという事だ。

生きるために、誰かの生を奪う存在に。

「さあ、どうするっ？」

「……」

横たわるレイの姿を見つめる。

そうさ、僕は守るって決めたんだ。

夢のあの人の代わりに、彼女を守ると。

「——その試験、受けさせてください。」

僕は、覚悟を決めてその言葉を吐き出した。

初めての仕事

僕はスラム街を彷徨っていた。

顔を見られないように、黒いローブのフードを深く被っている。

目的はただ一つ、ある男を見つけるためだ。

何のために見つけるかだって？

そんなの……

——殺すために決まってる。

「試験の内容は簡単だ、この仕事をこなしてこい。」

そう言つて寮母さん——いや、銀華と名乗った女性は僕に資料を渡した。

いくの
生野 秀雄

年齢38歳、独身。

犯罪内容、性的暴行。

「この男の首を持つてくるのがお前の初仕事だ。」

「簡単に言ってくれますね。」

「こいつはただの性犯罪者で、凶悪犯ではないからな。いや、別な意味で凶悪か。」

そう言つてニヤリと笑う。

嫌な予感がして、再び資料に目をやる。

——確かに最悪だ。

コイツは少年専門の性犯罪者だ。

つまり、僕も標的の範囲内に入ると言いたいのだろう。

「タイムリミットは日没までだ、行ってこい。」

どうやら、居場所を突き止める事から始めなければならぬようだ。

僕はため息をついて、車のドアを開けた。

「そうだ、こいつを持っていけ。」

そうやって、銀華さんは黒いローブとお金を渡してきた。

「ここがスラム街とはいえ、顔は隠すに限るだろう？ それとこれは——前祝いだ。」

ひんやりとした感触と金属の重さ。

スーツの男達が持っていたものに似ている。

「使い方は、後ろの撃鉄を指で引き起こして、後は狙いをつけて引き金を引くだけさ。

簡単だろう？」

「……」

「別に今回の仕事で使ってみるとは言わないさ、魔法でケリをつけてもいい。」

僕はその金属の塊をポケットに仕舞い込んだ。

黒のローブを羽織り、車から降りる。

まずは情報収集からだ。

それから数時間が経過していた。

情報は中々手に入らず、熱さが体力を奪っていた。

まずは水分補給をしなければいけなさそうだ……

お金はあるんだ、どこかお店に入って……

「君、大丈夫かい？」

見知らぬ男性に声をかけられる。

見た目は20代後半といったところだろうか。

やや筋肉質の身体に、スラム暮らしには見えない小綺麗な服装だ。

「だ、大丈夫です。」

過度な接触は避けた方がいいだろう。

そう思い男から離れようとするが、足元がおぼつかずに倒れそうになる。

「危ない！」

地面に接触する前に、男に抱きかかえられてしまう。

「こりゃ熱中症だな。」

そう言うと男は、僕を抱きかかえたまま歩き出す。

抵抗しようと試みるが、身体に力が入らない。

「俺の家はすぐそこだ、水くらいご馳走してやる。」

男は厚意を受けるのが正しいのだろうか、何故か妙な胸騒ぎがしていた。

「すみません、助かりました。」

男の家で休ませてもらったおかげで、多少は動けるようになった。
どうやら僕の思い過ごしだったか？

「気にするな、それよりこんな場所で何をしてたんだ？」

男は水の入ったグラスをテーブルに置くと、そう尋ねてきた。

僕はそのグラスを手に取り、一口水を飲む。
乾いた喉を潤す感覚が心地いい。

「人を、探しているんです。」

そう言って、男に写真を見せた。

その男は写真を見ると、驚いた顔をした。

「——なんでコイツを探しているんだ？」

「知ってるんですか？」

「ああ、この辺に住んでる奴だからな。」

どうやら正解に近づいていたらしい。

怪我の功名とはこのことか。

「良かったら教えてもらえませんか！」

「いいとも、その前にもう少し休んでいきな。」

時計を見やると、まだ13時を回ったくらいだ。

これなら時間も問題なさそうだ。

そう考えながら、先ほどの水を一気に飲み干した。

——あれ？

視界がぼやける。

まずい、これは……

「そうだ、ゆ〜っくり休んでおきな、そしたらソイツに会えるぜ。」

やはり嫌な予感は的中していたようだ。

意識が朦朧とする中、なんとか意識を保とうとする。

しかし、その抵抗も空しく、意識は微睡まどろみの中に沈んでいった。

ぴちやぴちやと耳障りな水音が聞こえてくる。

その音に合わせて、頬を何かが這っている感触――

気持ち悪くなり、手で撥ね退けようとするが、両腕が動かない。

徐々に意識が覚醒していく中、自分が置かれている危機的状况に声も出ない。

どうやら、今ベッドの上に横になっているらしい。

両腕は、ベッドの支柱にロープで縛られている。

目の前には、先ほどの男が覆い被さっていた。

先程の気持ち悪い感触は、どうやら男の舌のようだ。

「よう、お目覚めか。」

男はニヤニヤと笑っていた。

ターゲットは一人じゃなかったのか……

明らかに、この男はターゲットのお仲間だ。

「きもちわるい。」

「そう言うなよ、アイツが帰るまでに味見くらい許されるだろう？」

そう言ってペロリと唇を舐めた。

不思議と、激しい感情が沸き上がってこなかった。

ある程度、こういう状況になるのは覚悟していた。

さて、手は縛られているが、魔法を使うのには支障はない。

風属性の魔法を使えば、ロープを切るのに造作もないだろう。

問題は、コイツが離れてくれればいいんだが……

ピンポーン！

インターホンの音が家の中に響く。

「くそっ、お楽しみの最中に誰だよー！」

そう言うと、男は立ち上がり歩き出す。

どうやら来客の対応に向かうらしい。

これは抜け出すチャンスだ。

男が部屋を出たのを確認してから、ロープの位置を確認する。

“ウインドカッター”

出力を抑えて、風の刃をロープに向けて放つ。

綺麗に両腕の真ん中を飛んでいき、ロープは真つ二つに切れた。

僕はベッドから起き上がり、静かに扉へと近づく。

——何か話声が聞こえる。

ゆつくりと扉を開き、聞き耳を立てる。

「てめえ、俺より先に手えだすなって言っただろ！」

「わ、悪かったよ兄貴！」

男2人の話声——先程の男と、相手はターゲットの男か？

どうやら言い争っているようだが、これはチャンスかもしれない。

「やっばりお前は足引っ張りだな……」

「兄貴……?」

ゴン！ という鈍い音が響いた。

「いけねえよなあ、お前は出来損ないだからよお！」

何かを殴るような、鈍い音が規則的に聞こえてくる。

大体予想はつくが、ゆっくりと部屋から出て様子を伺う。

丁度、2階から下が吹き抜けで観察出来る作りになっている。

1階では、予想通りの惨劇が繰り広げられていた。

先程の男は、血塗れの床の上に寝そべり、ぴくりとも動かない。

その頭部は、無残にも潰れてしまっていた。

ターゲットの男は、鉄パイプを今も男の頭部に振り下ろす動作を繰り返している。

「くひゃひゃひゃー！」

下品な笑いを続け、それでも尚殴る事をやめない。

まともじゃない、というのが率直な感想だった。

元々、普通ではない性癖の持ち主だが、今は別の意味で普通ではない。

逃亡生活は、そこまで人を追い詰めてしまうのだろうか？

もし、僕とレイが二人で逃げ続ける選択をしていたなら、アレも一つの可能性なのかもしれない。

「さて、美味しくいただくとするかあ。」

そう言つて、男は階段へと向けて歩き出した。

どうやら、狙いの僕の所へ来るつもりらしい。

まともな判断が出来ない今なら、罠にかけるのも容易いだろう。

僕は部屋に戻り、先ほどと同じ態勢でベッドに横になった。

このまま待つていれば、男は確実にこの部屋に来るはずだ。

床を荒々しく歩く音、その音は徐々に近づいてくる。

「ハハハかあー！」

勢いよく扉が開かれる。

男の目は血走り、口からは唾液が垂れていた。

“バブルボムⅢ！”

案の定、全く警戒していない男は簡単に魔法に捕らえられた。

手足にバブルボムを押し付け、壁へと貼り付けにした。
無理矢理動かこうとすると、破裂した衝撃で手足は弾け飛ぶだろう。

「なんじやこりやあああ！」

「生野秀雄だな？」

生野は奇声を上げるだけで答えない。

写真と顔は一致しているため、間違いはないだろう。

“この男の首を持つてくるのがお前の初仕事だ”

銀華さんの言葉を思い出す。

つまり、殺した証拠が必要なわけだ。

殺す——そうだ、今から僕はこの男を殺す。

いざその時が来ると、恐怖が生まれてくる。

犯罪者とはいえ、ヒト一人の命を奪うのだ。

自分が生きるために……

「はなげええ！」

相変わらず、生野は暴れている。

それは、生に執着した者の姿そのものようだ。

彼も、生きたいと必死にもがいているのだ。

“今更綺麗事か？”

頭の中に黒島の声が聞こえてくる。

“いい子ぶっても、お前はもう人殺しだろう？”

そうだ、だって僕は――

火内先生も、黒島も、この手で殺したじゃないか。

今更綺麗事を言っただって、僕の手はもう血で濡れているじゃないか。

僕は、ポケットにしまったアレを取り出した。
自分を変革するには、何かきつかけが必要だ。

「それは、てめえ！」

生野はソレを見て絶句する。

きつと、何か知っているのだろうか。

でも、今の僕には関係ない。

「後ろの撃鉄を指で引き起こして——後は狙いをつけて引き金を引く。」

「お前紅桜の——」

花火のような音を立てて、金属の塊が撃ち出される。

それは真つすぐと生野へと飛んでいき、左胸へと吸い込まれていった。

——瞬間、それは炸裂した。

そう、これは魔法だ。

生野の体内で、魔法が発動したのだ。

ウインドカッターⅢの風の刃が、内部から切り刻む。

内臓を引き裂き、胴を切り開き、血管を細切れにする。

仮に魔法障壁を展開しようとも、生き物である限り内部からの攻撃は防げない。

きつと、これはそういう武器なのだ。

何故か僕は、妙な高揚感に包まれていた。

それは今まで、経験した事のない感覚だった。

「コレ、すごいじゃないか。」

この武器の扱い方を、詳しく銀華さんから教えてもらう必要があるそうだ。

僕は武器をしまい、生野の死体に近づく。

「うん、首が必要なんだよね。」

“ウインドカッターⅠ”

思いついたように、僕は風の刃を男の死体に向けて放った。

夕焼けが辺りを照らす頃、僕は車の前へと辿り着いた。

僕の顔を確認すると、銀華さんはドアのロックを解除して中に招き入れた。

僕は銀華さんの前に、戦利品を差し出した。

車の中に血の匂いが充満する。

「なるほど、首を持ってきたわけか。」

ソレを見た銀華さんは、口元を歪めて笑った。

まるで、少々意外だが面白いと言いたそうな顔だ。

「どうでしょうか？」

「うむ、文句なしの合格だ。」

どうやら満点という事らしい。

これでとりあえずは、僕達の身の安全は保障された。

レイは相変わらず、眠ったままであった。

「そういえばお前、^{まが}魔銃^んを早速使ったな？」
「^{まが}魔銃^ん？」

そう尋ねると、銀華さんは僕のポケットをつついた。

ああ、これの事か。

僕はポケットから^{まが}魔銃^んと呼ばれた武器を取り出す。

「これ凄いですよね、びつくりしました。」

「気に入ってくれて嬉しいよ。ソイツの扱い方はこれからたつぷり教えてやるさ。」

そうか、コイツは^{まが}魔銃^んというのか。

僕は綺麗な銀色のボディを眺める。

一瞬で相手の命を刈り取る武器。

これがあれば、燃費の悪い自身の魔法を酷使する必要もない。

「そうだ、一番大事な事を言い忘れていたな。」

「なんですか？」

「その魔銃まがんの名は——」
「フェンリル」だ。」
「魔銃まがん・フェンリル……」

僕は、その名を繰り返し読み上げた。

新たな魔銃

「ねえ、お兄ちゃん。」

「……」

「葉助お兄ちゃん、聞いてる？」

レイの呼ぶ声が、現在いまに意識を引き戻した。

俺は組み立てていた銃を机の上に置き、背後のベッドの上に座っているレイに振り返った。

「どうした？」

「そろそろ銀華さんの所に行かなくていいの？」

そう言われて腕時計を確認すると、作業を始めてから1時間が経過していた。確かに、そろそろ報告に行った方がいいかもしれない。

「こいつの組み上げが終わったら行くよ。」
「もうー！」

レイは呆れた顔でベッドに潜り込んだ。

僕は机に向き直すと、机の上に置いた銃を手を取った。

ガンメタルブラツクのボディが、光に反射して鈍く光る。

これは、今組み上げている新しい魔銃だ。

コルト・ガバメントという最新の銃をベースに、俺好みにカスタマイズしている。

装弾数は魔銃・フェンリルよりも多く、威力も多少劣る程度だ。

更に反動を抑えて左手で扱えるように改良している。

暗殺用にサプレッサーも使用可能である。

組み上げを終え、軽く構えてみる。

重さはフェンリルよりも軽いな……

腕を下し、ホルスターへと銃を収める。

「ちよつと銀華さんの所に行ってくる。」

「はーい。」

レイは布団に潜ったまま、顔を出してはくれなかった。

「入れ。」

3度のノックの後、銀華さんからの入室許可が出た。

俺はゆっくりとドアノブを回して扉を開く。

目の前に広がるのは散らかった部屋。

足元には丸めた書類が散乱し、机の上は銃のパーツが占拠している。唯一、本棚の本だけは綺麗に並べられていた。

「銀華さん、少しは掃除したらどうですか？」

「気が向いたらやる。」

こんな人が寮母さんをやっていたとは、見る影もない有様だ。床のゴミを避けながら、なんとか机の前まで辿り着く。

「では報告します。」

「うむ。」

「ターゲットは処理、奴が持っていた情報はこれで全部です。」

机の上に、遺品と資料を置く。

銀華さんは、資料に目を通し始める。

「今度はターゲットの首でも持ってきてくれ。」

「もう、その話で弄るのはやめてくださいよ。」

こうやって、今でも初任務での事を言っただけで弄ってくる。

余程、銀華さんにとって“面白い”事だったのだろう。

「おい、ちよつと待て……この最後の表記は間違いないんだな？」

「はい、確かに奴は〝ロキア〟と言っていました。」

ロキアという名に、何か覚えがあるのだろうか。

銀華さんの表情が、一層険しくなった。

それどころか、殺気さえも纏っている。

「これは、私も他人事では無くなってきたな……」

「銀華さん？」

「いや、これは後日話そう。今はそれよりも——」

急に表情を変え、新しいおもちゃを見つけたように目を光らせている。

やはり、コレに気づいたって事か。

俺は観念してホルスターから新しい魔銃まがんを取り出した。

「そのデザイン！ 新型のガバメントをベースにしているな！」

「さ、流石ですね。」

俺の手から銃を奪い取り、観察を始める。

その姿はまるで子供のようだ。

「拡張性を高めて臨機応変に対応出来るようになっていたのか。しかも——」

「あの、銀華さん？」

「この口径で、リボルバー系よりも装弾数は多いし、反動も——」

だめだ、自分の世界に入って全く話を聞いてくれない。

こうなつてはもうダメだ……

「名前は？」

「は？」

「コイツに名前はもう付けたのか!？」

「いえ、まだですけど。」

それを聞くと、銀華さんは急に悩み始めた。予想通りなら、魔銃まがんの名前を考えているのだろう。

「そうだな——」ヘイムダル」

渾身の命名だとばかりにドヤ顔を決めている。

また銀華さんお得意の、昔読んだ本に出てくる名称なのだろうか。

「魔銃まがん・ヘイムダル、いい名前だろ?」

「そうですね。」

彼女の命名からは誰も逃れられない。

それは呪いのように絶対的なのだ。

——たまには自分で名前をつけてあげたい。

「よし、じゃあ早速試し撃ちに行くぞ!」

「い、今からですか!?!」

「当然だ、さあ行くぞ葉助！」

意気揚々と準備を始める銀華さん。

俺は、拒否する事すら叶わずに、ただついていくしかなかった。

最悪の再会

まさか本当に出かけるとは思わなかった。

必要な装備の準備をし、そのまま二人で外に出かけたのだ。

お互いいつものスーツの上に、コートを羽織った姿である。

魔銃まがんの試し撃ちと言っていたが、どうするつもりなんだろうか。

「こうして二人で歩いていると、デートのようだな。」

「そんな雰囲気あります？」

「場所も時間も論外だな。」

「間違いない。」

夜中のスラム街など風情も何もないだろう。

むしろ不審者に襲われる可能性だってありうる。

銀華さんは、俺と腕を組んで本当に恋人のような態勢になった。

一体何を考え——

その態勢のまま、手のひらを指でなぞってくる。

“ 1人、背後”

言葉の意味を理解し、感覚を研ぎ澄ませる。

足音も気配も感じないから油断していた。

確かに、誰かいる。

魔法で存在を消していても、魔法に精通している者ならば魔力を感じて発見できる。

しかし。魔法使いが何故こんな場所に……

「しかし、暗いな。」

「この辺は街灯も壊れてついてませんからね。」

その言葉が合図だった。

俺達は同時に魔銃まがんをホルスターから抜き取り、背後に発砲した。

透明な影が、慌てて横の建物の影に隠れた。

俺達もすぐ横の建物の影に隠れる。

「最近色々嗅ぎまわってるようだが、貴様何者だ。」

銀華さんが叫ぶが、相手は何も答えない。

息を潜めて、こちらの出方を見ているのだろう。

「だんまりか？ なら言い方を変えよう——宗月はお前にどんな命令をしたんだ？」

宗月だって……！

その名が出てくるのは意外だった。

宗月という名は、おそらくこの街で暮らしている限りは必ず耳にする名だ。

この街——いや、この世界の実質的な支配者だ。

3賢者に技術を伝え、このヴィランを繁栄させた。

そして、時空龍達のトップでもある。

つまり敵は、時空龍の手先という事である。

「葉助、おあつらえ向きの相手が来たんだ。 さつさと片づけて来い。」

多分この人は、コイツの存在に気づいていて、魔銃まがんの試し撃ちなんて言つて外に連れ出したんだ。

なんというか——嫌になる。

俺はヘイムダルを握り直し、相手の隠れている場所を再確認する。

相手が魔法使いという事は、攻撃の初動ではこちらの方が早い。

かつ、格闘戦を苦手とする者も多い。

すぐに隠れたのも、距離を詰められたくない証拠だろう。

そこまで入り組んだ地形ではないが、市街に入られると面倒だ……

決着をつけるならここでだろう。

“ウインドウエアⅢ”

俺は魔法を唱え、自らの脚力を強化する。

「ふい——」

建物の影から躍り出ると、相手に向けて駆けだす。

“フレイムタワーIII！”

相手も、こちらに向けて魔法を放ってくる。

俺はその火柱をスレスレでかわ躲しながら、相手への距離を縮めていく。

ローブのフード部分でその表情は見えない。

だが、その挙動は確実に焦っている。

俺は相手に向かって2発の弾丸を撃ち込む。

その銃弾は魔法使いの魔法障壁を簡単に貫通して、あいての両肩目掛けて飛んでいく。

俺は跳躍し、相手の頭部を狙って銃を振り下ろそうと――

「甘えよ。」

魔法使いの口元が、笑みを浮かべたように見えた。

それと同時に、凄まじい殺気を感じた。

本能的に、殴る行動を止めて銃を盾にするように構えていた。それは一瞬だった。

魔法使いは、銃弾を“殴り”落としたのだ。

その拳は炎を纏っている。

2 発目の銃弾も殴り落とし、3 撃目が俺目掛けて放たれる。

俺はなんとかヘイムダルで受け、後ろに大きく後退した。

「ちっ、やるじゃねえか。」

「近接型か、面倒なやつだ。」

俺は相手を睨む。

ヘイムダルのバレルが少し融解している。

魔術的強化を施しているが、それを貫通するほどの火力ということだ。

存在は知っていたが、まさか近接を極めた魔法使いの相手をさせられるとは。

「オレはよ、この時を待ってたんだぜ！」

魔法使いはこちらに向けて駆け出した。

さっきまでとは、まるで逆の立場になっていた。

近接戦に持ち込まれたら、確実にこちらが負ける！

不用意な射撃は弾かれて弾の無駄になるだろう。

まずは相手の足を止めるのが先か。

俺は相手の足元に向けて2発撃ちこんだ。

“バブルボムⅢ！”

弾丸に込められた魔法^{マナ}から魔法を発動させる。

発動した泡は、相手の左右から両足を狙う。

「ちっ！」

魔法使いは進む足を止め、後方へと跳ぶ。

その際に、左足に泡が掠った。

俺はその隙を逃さず、左足に向けて1発撃ちこんだ。

“ ウインドカッターⅢ！ ”

強力な風の真空波が左足に向けて放たれる。

魔法使いは慌てて魔法障壁を左足に集中させた。

だが、それは俺の予想通りであった。

真空波は無傷とはいかないが、止められてしまう。

しかし、その攻撃はフェイクなのだ。

俺の本命である第二射は、相手の左肩へ吸い込まれるように撃ち込まれた。

“ ウインドカッターⅢ！ ”

そのタイミングに合わせて魔法を発動させる。

体内から放たれる真空波は、どんな防御手段を持つとうと無意味だ。

「ぐがつー！」

真空波は相手の左肩を食い破った。

腕と肩が離れ、ぼとりと地面に落ちる。

しかし、飛び散ったのは赤い液体ではなく、黄金色の液体だった。

——人間ではない？

「ちくしょう、こいつは予想外だぜ。」

「大人しく投降しろ。」

俺は銃を向けたまま魔法使いに近づく。

もしやこいつは、最近噂で聞いた人造人間なのでは？

だとしたら、両手両足を潰しておくべきかもしれない。

そう思い、俺は狙いを右肩へと移動させた。

「今日はお開きだな、葉助！」

「なっ——!?!」

魔法使いが急にフードを降ろした。

そうだ、忘れるわけもない。

その顔は、俺のよく知った顔だった。

「またやろうぜ、殺し合い！」

「ま、待て！」

一瞬の隙を突いて、魔法使いは飛び上がった。

慌てて追いかけようとするが、後ろから銀華さんに肩を掴まれた。

「不用意に深追いはするな、特に今のお前ではな。」

「……」

間違いない、あの顔は——健司だった。

それも、当時のままの……

背負うもの

帰還後に待っていたのは、副隊長のお説教であつた。
たつぷりと二人で絞られ、解放されたのは1時間後であつた――

「はあ……」

「葉助、吸うか？」

副隊長の皓月こうげつさんが煙草を差し出してきた。

俺は煙草を受け取ると、魔法で火を点けた。

口に咥え、軽く煙を吸う。

「俺も心配なんだ、あの人に何かあつたらと思うと……」

「皓月さん……」

「そういえば、お前に銀華さんの話をした事がなかつたな。」

領くと、皓月さんはソファーに座るように促してきた。
俺は素直に従い、ソファーに腰掛けた。

「あの人はな、全てを奪われたんだ。地位も、家族も——」

銀華様は、時空龍達の王“九垓^{くがい}”様の娘として生まれた。

つまり王女様だったって事だ。

それが何故、こんな生活をしていると思う？

彼女の父はとある男の計略で殺されたのさ。

その犯人が、お前もよく知る宗月さ。

当時の奴は宰相という立場にいて、自らが王になる事を望んでいたのさ。

まあ、結果としては失敗に終わったがな。

王は殺せたが、肝心の戦争に負けて時空龍達は敗走した。

各地の世界に生き残りが散らばり、宗月はこの世界で偉そうにふんぞり返ってるわけ
さ。

「つまり、銀華さんの目的は復讐？」

「その通りだ、だからこそ危なっかしいんだよ。」

そう言つて皓月さんは遠くを見つめるように天井を見上げた。

それは何かを思い出すような顔だ。

「もう、あの人を守れるのは俺だけになつてしまった。みんな死んじまつたのさ。」

「……」

「俺もいつまで生きてられるか分からねえ、だからお前に——銀華様を守ってもらいたい。」

「俺に？」

「そうだ、あの人を守つて欲しい。それが出来るのは、きつとここではお前だけだ。」

俺が、守る？

俺よりも遥かに強いあの人を守る？

守られてるのは、俺の方だ——

最初から、そして今も……

「お前に重荷を押し付けるようにで悪いな。」

「俺に、出来るでしようか？」

「仮にも、俺はそう思ってるよ。」

守る――

その言葉が頭の中で反響していた。

部屋に戻り、椅子に座り込む。

そのまま身体を背もたれに預けた。

ベッドでは、レイが小さな寝息を立てている。

俺は、レイを背負うだけでも精一杯なのだ。

それなのに、これ以上誰かを守るなんて事が可能なのだろうか。

そして――

脳裏には健司の顔が浮かぶ。

間違はなく、あの魔法使いは健司だった。

いや、健司に似せて作った人造人間という可能性もある。

問題は、何故健司に似せて作ったのかという事だ。

もしかしたら、本物の健司は時空龍達に囚われているのではないか？

そんな微かな希望さえ浮かんで来た。

結局の所、あの健司の顔をした敵と再び戦わなければならない事実は変わらない。

守りながら戦う、それはとても難しい事だと思う。

ヘイムダルをホルスターから取り出す。

まずはこいつの修理からか……

何か作業をしている時が一番楽だ。

嫌な事を全て忘れさせてくれる。

この時間が、ずっと続けばいいとさえ思える。

守る命、消える命、消した命、奪われる命。

どれも同じ命。

人の神秘の結晶。

だが、俺は？

紛い物の命に、価値はあるのだろうか。

それでも、紛い物でも本物の命を守る事は出来るはずだ。

「いっほっ！いっほっ！」

手で口を押えて咳き込む。

その手のひらは、真っ赤に染まっていた。

「そうだ、俺の命の限り守ってみせる。約束したもんな。」

背負ったお前を、絶対に守るさ——レイ。

オペレーションナガルザル

「以上が今回の作戦の概要だ。質問のある者はいるか？」

皓月さんの問いに皆が沈黙で答える中、俺は一人手を挙げた。

「3チームに分ける理由を教えてください。」

この作戦の内容はこうだ。

まず俺、皓月さん、銀華さんを中心とした3チームに分ける。

それぞれのチームが別々の入口から突入、目的地の宗月の部屋を目指す。

辿り着いたチームが宗月を暗殺する。

分散するメリットは少人数による発見されにくさだろう。

ただ、デメリットの方が圧倒的に大きい気がする。

まず第一に、相手はこちらの奇襲を読んでいる可能性が高いからだ。

何人もの高官や関係者を暗殺して来た今、残るは宗月だけなのだ。

次に自分が狙われていると分かったら、相応の準備をしている事だろう。

この前のあの人造人間もその準備の一つだろうし。

第二に、各個撃破されやすいという事だ。

少数精鋭だろうが、数の暴力には勝てない。

ましてや相手には時空龍の兵士もいるだろう。

そうになると、対処出来るのは魔銃まがん使いだけだ。

「この奇襲は失敗する可能性が高い、そういう事だろうか？」

「そうです。ならば一点に戦力を集中して突破するべきかと。」

そう、それがベターな選択だと俺は思う。

ここまで来たら穩便に済ます事など出来ないだろう。

戦力差は進撃スピードで誤魔化す。

奴さえ打ち取れば勝ちなのだから。

「その作戦だと、おそらく全滅するだろうな。」

「……」

「3チームに分ける意図を教えてやろう葉助。それは——」

“ どれか1チームでも生き残って宗月の首を獲れつて事さ”

背筋がぞくりとした。

奴さえ殺せるならほぼ全滅してもいいという作戦なのだ。

明らかに、今までとは違う任務だ……

俺はその解答に、黙って俯く事しか出来なかった。

「他に質問は無いな？ では各自準備に取り掛かれ。」

誰もが無表情で作戦室を出ていく。

これから死地に赴こうというのに、誰も顔色ひとつ変えていなかった。

恐れているのは、恐らくこの空間では俺一人だった。

いや、俺が恐れているのは自らの死よりも——

「心配するな、お前は死なせない。」

その言葉が、今の俺には気休めにしか聞こえなかった。

「レイ……」

「いいかレイ、今回もいい子でお留守番してるんだぞ。」

「……」

レイは何故か神妙な面持ちでこちらを見ている。

俺はあえて視線を逸らして、準備を続ける。

「返事がないな、どうなんだ？」

「——やだ。」

「ん？」

明らかに様子がおかしい。

確かにいつも怒ってはいるのだが、返事はしてくれていた。

明確に拒否反応をするのは初めてだ。

「そうやって、また私を一人にするんでしょ？」

その瞳には涙が浮かんでいた。

“また”

彼女はそう言った。

それは普段の任務に対する“また”なのかそれとも――

「レイ、それはどういう――」

「どうしてそんなに死にたがるの！」

問いただす前に、彼女の言葉に遮られる。

「そうやって、お兄ちゃん達は私を一人に――」

レイは急にふらりと倒れかける。

俺は咄嗟にレイの身体を抱きかかえた。

腕の中で、頭を押さえながら苦しそうにしている。

「くっ……！」

俺は急いで医務室に走った。

まさか、彼女の記憶が戻りかけているのだろうか？

息も荒く、額には汗が浮かんでいる。

俺は走る速度を上げて医務室を目指す。

彼女の異変に気づけなかった俺の責任だ……

すまない、レイ——

俺は医務室に駆けこむとすぐにベッドにレイを寝かせた。

医者は驚いた顔をしたが、彼女を見るとすぐに診察を始めた。

「こりゃあ、魔源マナが不安定になつとるな。」

「どういう事だ？」

「彼女のエーテル器官が何かに過剰に反応しとるんじゃ。」

そう言いながら、医者は彼女に何かを注射した。次第に、レイの表情が柔らかくなっていく。

「レイは、過去の記憶を思い出しそうになっていた。」

「それが関係しているのかもしれない。」

知らなかった。

もしかしたら、この症状を今まで隠していたのかもしれない。

そうさせたのは、俺だった。

「すみません、俺は任務があるので彼女を頼みます。」

「ああ、分かった。」

そうだ、この任務が終わったら彼女を元の世界に返してあげよう。

そうしたら彼女も良くなるかもしれない。

彼女の戦いはもう終わっているのだ、普通の少女としての人生を歩ませたい。

ならば、ここにいるのは間違いだろう。

そして、その傍で最後まで彼女を守るのが俺の仕事だろう。

「さっさと終わらせてくるか。」

先を考える事で、目の前の恐怖を押し殺した。

それが、俺に出来るやせ我慢だった。

数台の車に全員が乗り込み、各々席へと座った。

自らの得物の最終チェックをする者、目を瞑り精神統一する者、それぞれだ。

「おい、例のアレは持つてきてるだろうな？」

「もちろんですよ隊長。でも、あんなものの出番なんてあるんですか？」

「万が一の備えだ、相手はあの宗月だからな。」

銀華さんが何か話しているようだ。

例のアレとは一体なんだろうか。

「なんです、それ？」

「私のとっておき、”ヨルムンガンド”だよ。」

前に聞いた事があるような——

記憶の底から”ヨルムンガンド”という用語を掘り起こす。

確か——皓月さんがポンコツとか言っていたような。

「使えるんですか……？」

「何を言う！ あれは私の自信作だぞ！ そもそも——」

銀華さんが熱く語り始める。

こうなると手がつけられない……

俺は適当に長しながら、銀華さんを観察する。

彼女の衣装は仕事用のスーツではなく、普段から着ている和装だ。

その見た目は、薄手のワンピースによく分からない模様の刺繍がなされている。

和装は時空龍達の民族衣装らしいが、何故この衣装を今回は纏ってきたのだろうか。

「聞いているのか？」

「は、はいもちろん！」

「——ならばよろしい。」

たつぷりと語つて満足したらしい。

彼女は嬉しそうに魔銃まがんを取り出し、各部の調子を確認し始めた。

きつと、銀華さんにも何か思う事があるのだろう。

俺には分からない決意の結果なのかもしれない。

宗月、彼女にとつて仇なのだから。

車に揺られながら死地へと徐々に近づいている。

俺も自らの魔銃まがんであるフェンリルとヘイムダルの最終確認を済ませる。

「頼むぞ、相棒。」

ホルスターに収め、大きく深呼吸をする。

少しでも最低な気分がマシになった。

宗月——

黒島と裏で繋がっていた男。
俺の戦いも、これで決着が付くのだろうか？

二度目の別れ

「Cチーム、潜入完了。」

「Aチーム、了解。」

「Bチーム、了解。」

Aチームは銀華さん、Bチームは皓月さん、Cチームは俺が担当だ。屋敷の中はしーんと静まり返っている。

中の警備システムと電源は全て切断してある。

奇襲に成功しているならば、このまま何事もなく宗月の部屋まで行けるはずだ。メンバーの一人が先行して、慎重に進んで行く。

気持ち悪いくらい何も起きずに進んで行く。

宗月の部屋まではあと200mという所だろうか。

「さて、誰かいる。」

広い廊下の真ん中に人影が見える。

暗がりでのその表情はよく見えないが、俺には確信があつた。

——奴だ。

あの時戦つた魔法使い。

その男が、今ここで立ちふさがっているのだ。

「やつと来たな、葉助。」

「お前は、健司なのか？」

「……」

返答は無かつた。

そもそも、健司であるわけがないのだ。

彼は3年前の事件で死んでいるはず。

もし生きていたとしても、3年前の姿のままではいるはずがないのだ。

考えられるのは時空龍達が生み出した人造人間。

問題は、何故健司の姿をしているのかだ。

「答える気は無いという事か？」

「いいさ、教えてやるよ。 3年前のあの日の事をな。」

オレはあの日、誠先輩と相打ちになった。

死を待っただけのオレが選択したのは、お前を助けるために魔源^{マナ}を全て捧げる事だった。

—
—
—

「俺の魔源、使えよ——コイツならいけるだろ？」

レイは静かに頷いた。

二人で葉助に手を掲げる。

身体から命が流れ出る感覚を感じた。

多分、俺はこのまま死ぬのだろう。

そう確信した。

レイの顔色も蒼白になっていた。

それと比例して、葉助の顔色はだいぶ良くなっていた。

俺はふと考えた、別にレイも死ぬ必要はないだろうと。

犠牲は一人で充分だ。

多分残りは、俺一人の分で充分だ。

「わりいな。」

「え?」

俺はレイの首筋に手刀をお見舞いして気絶させる。

「逝くのは俺一人さ。」

そうして俺は、全ての魔源^{マナ}を葉助へと明け渡したのだ。

本来ならばそこで終わりだった。

カッコ悪い死体を見せたくなかつた俺は、死ぬ前に場所を移動したのさ。

そう、それが悪かった。

“奴ら”が現れたのだ。

奴らは死にかけの俺を拾って実験体にしたんだ。

手に入れた黒島の研究を試すのに手頃だったのだろう。

「見てくれよ、脳味噌以外もう機械の身体なんだぜ？　こんな生きてるって言えるか？」

「それは……」

「まさに生ける屍ってやつだよな。」

彼との学生時代の思い出が脳裏に浮かぶ。

あんなに楽しかったのに、どうしてこんな事に……

「だからさ——オレを終わらせてくれよ。これはお前にしか頼めない事だ。」
「健司……」

彼は笑いながら涙を流していた。

もう人ではない彼は、人としての死を望んでいるのだ。

「——わかった。」

俺は、他のメンバーに先行して他のチームと合流するように指示を出した。多分、俺は間に合わない可能性の方が高い。

俺はポケットからカプセルを取り出して、地面に投げつけた。

辺その瞬間、辺りは光に包まれる。

視界は真っ白に染まり、空間の認識は失われる。

やがて空間の認識は書き換えられ、見覚えのある風景を形成した。

「懐かしいな。」

「ああ。」

俺達二人が通った学び舎。

その校庭に二人は立っていた。

俺が使ったのは、結界を形成する術式を封じ込めたカプセルだ。

銀華さんが、宗月を逃がさないようにするために、各自に1個ずつ用意したものだ。

「ここなら、確かに邪魔は入らないよな?」

「そのために大事な結界を使つたんだ、感謝しろよ?」

「分かつてるじゃねえか!」

健司の返礼は拳だった。

最初から読んでいた俺は、フェンリルのバレル部分で受け流し少し距離をとる。

そう、これが彼が望んでいた事なのだ。

最後に相応しい戦いを。

いつか望んだ決闘を。

「なあ葉助。」

「——なんだ?」

「オレ、今最高に楽しいぜ。」

それに答えるようにフェンリルの弾丸を撃ち込む。

健司は拳に炎を纏い、弾丸を叩き落した。そのままの勢いでこちらへと駆けてくる。

前回の戦いから分かっていた事だ。

相手は必ずこちらに近づいてくる。

魔法使いらしからぬ行動をすると――

2発の弾丸を自らの足元に打ち込む。

健司は瞬時に危険を察知したのか、後ろに大きく飛ばうとする。

だが、遅い――！

“サンダーボルトⅢ！”

弾丸から魔法が発動する。

健司に向けて2本の雷が真っすぐ飛んでいく。

“ファイヤーウォールⅢ！”

防御魔法を使えない健司は、魔法同士の衝突で威力を削ろうとする。

彼の目論見通り、雷の威力は大きく削がれていた。直撃するが、ほぼダメージを与えられていない様子だった。しかし、それはさほど問題ではない。何故なら――

俺は今健司の背後に立っているからだ。そのまま2発の弾丸を打ち出す。

「なっ――！」

予想外の位置からの攻撃に、彼の反応が一瞬遅れる。

1発は右手で撃ち落とすが、もう1発は――

“ ウィンドカッターⅢ！ ”

発動と共に健司の左腕が爆ぜた。

辺りに緑色の液体と金属片がまき散らされる。

フエンリルの残弾は1発。

次は外さない……

「一体なに——っ！」

「終わりだ。」

今度は彼の右側に現れてみせた。

同時に最後の1発を撃ち込む。

弾丸は健司の二の腕に吸い込まれ、そして魔法が発動する。

“ ウインドカッターⅢ！ ”

「んがぁー！」

飛び散る液体と破片。

彼の両腕は見るも無残な状態になっていた。

断面からはバチバチと何か音を立てている。

俺はローブの中に隠していた、左手のソレを健司に向けて構えた。

「——それがトリックの種か。」

「サブレッツサーって知ってるか？ こいつは発砲音を軽減出来る優れたものなんだ。」

俺は作戦前に、ヘイムダルにサブレッツサーを装着しておいたのだ。

本来は暗殺用にと用意していたものだが、俺はある別な使用方法を思いついたのだ。

魔法使い同士の戦闘の場合は、魔源マナの反応で攻撃がばれてしまう。

しかし、魔銃まがんでの魔法発動にはそれが無い。

何故ならば、事前に魔源マナを弾丸に込めているためだ。

あとは起爆するだけの状態になっているため、相手が魔法使いでも有利に戦える。

ただ銃という性質上、色々と不便な部分があるのは確かだ。

だからこそ、このサブレッツサーはその問題の一つを消してくれる。

今の戦いの場合、フェンリルの発砲と同時にヘイムダルを発砲したらどうなる？

耳のいい奴でも判別は難しいだろう。

そう、俺はローブの中で自身にヘイムダルを撃ち込んで魔法を発動したのだ。

「自己強化と、姿を一時的に消す魔法か……」

「そういうことだ、さしずめ幻影フアントムパレット弾ってところか。」

「なんだよそれ、発想が、ガキくせえじゃねえか……」

健司は諦めたように地面に寝そべった。

しかしその表情は笑顔だった。

まるで満足だとも言いたそうに――

「完敗だ……やっぱりかてねえか。オレも頑張ったんだけどなあ……」

「――兄さんに会ったら宜しく頼む。」

「ああ、思いつきり自慢してやるぜ。」

俺は、そのまま健司の頭部に狙いを定め、ハイムダルの引き金を――引いた。

さよなら、そしてありがとう――健司。

復讐者

一方Bチームは、仕掛けに阻まれて迂回を余儀なくされていた。

Aチームは順調に進み、宗月の部屋の前へと辿り着いた。

銀華は扉を蹴破り、中へと入り込んだ。

「やあ、待っていたよ。」

「……」

まるで来るのが分かっていたとばかりに宗月は余裕の笑みを浮かべた。

銀華はホルスターから魔銃まがんを抜き放ち、銃口を宗月へと向けた。

「ほう?」

「覚えているか? わざわざこの銃を用意してやったんだ。」

彼女が構えた魔銃まがん口キは、初めて作った魔銃まがんだ。

レミントン・デリンジャーという銃をベースに作ったものだが、それには意味があった。

かつて宗月が父を撃った魔銃も、レミントン・デリンジャーをベースにしたものだったのだ。

だからこそ、彼女にとってこの魔銃で宗月を葬る事は重要なのである。

「復讐という事だろう？ よく分かっているよ——ククッ。」

「お前のその顔も今日で見納めだ！」

彼女は指に力を入れて引き金を引く。

撃ち出された弾丸は、真っ直ぐ宗月の心臓に向けて飛んでいく。

その弾丸は確実に宗月の命を終わらせるだろう。

そう、銀華も確信していた。

しかし、宗月はニヤリと笑みを浮かべた。

「さあ姫様、私と一曲踊って頂きましょうか！」

突如、宗月の身体が発光し始める。
銀華はこの現象を知っていた。

「貴様やはり！」

本来はリミッターにより封印された力。

それは時空龍本来の力を振るうための姿……

宗月の身体は、光と共に肥大化していく。

そして現れるのは――

「この姿も久方ぶりです。」

「やはり自らにはリミッターを施していなかったな。」

鋭い牙、大きな爪、大空を羽ばたく翼。

時空龍本来の姿に戻ったのだ。

こうなると、魔銃まがんですら奴の肉体は貫通出来ないであろう。

「死の輪舞を始めましょう、姫様。」

「宗月いい！」

銀華はロキをホルスターにしまい、別な2丁の魔銃まがんを取り出した。

右手にはシルバーボデイのリボルバータイプ、魔銃まがんヘル。

左手にはガンメタルブラックの短機関銃タイプ、魔銃まがんナルヴィ。

「いいか、さっさとアレの準備をしろ！」

「り、了解です！」

「ちっ、本当に出番が来てしまうとはな。」

二丁の銃を構え敵を見据える。

今は、準備の時間を稼ぐだけだ。

そう思いながら駆け出した。

“ ヨルムンガンド ” の準備には、早くても10分はかかるであろう。

それまで私が生きていればいいのだが。

銀華はそう思いながら右手のヘルの引き金を引く。

撃ち出された弾丸は魔法障壁を貫通するが、強固な鱗を貫通する事は出来ない。

やはり手持ちの火力ではダメージを与える事は不可能である。

「おや、姫様は変身しないのですか？」

「お前相手にその必要はない。」

「ふん、強がりだな。」

巨大な右腕を振り上げて、こちらに向けて勢いよく振り下ろす。

急いで後方へと跳ぶと、数秒前に立っていた床は粉々に砕け散る。

あの鋭利な爪の前では、魔法障壁ごとこの身を引き裂かれるだろう。

「まあ、当てられればだが。」

今度は狙いを右目に変えて、ヘルの引き金を引く。

無防備な目ならば攻撃も通るはずだ。

宗月は目をかばうように左手で顔を覆った。

弾丸はやはりその鱗に弾かれる。

しかし銀華は、同時に左手のナルヴィの引き金を引いていた。

「イリユージョンパレット
奇術弾」

撃ち出された弾丸が全て掻き消える。

状況を理解出来ない宗月は、がむしゃらに両手で虚空切り裂き続ける。

「そこかあー！」

微かな魔力を頼りに左手を振り下ろす。

数発の弾丸が切り裂かれた。

「残念、外れた。 “ ウインドカッターⅢ！ ”

「何っ——ぎやああああああ！」

咆哮のような悲鳴が上がる。

宗月が切り裂いた弾丸の反対方向から飛来した弾丸は、確かに彼の左目を貫いたのだ。

風の刃が、その目をズタズタに引き裂いた。

イリユージョンバレット
奇術 弾は、通常以上の魔源マナを込める事により遠隔操作を可能にした技だ。

先程の場合、わざと魔法を発動させて相手の注意を引き、本命を叩き込んだというわけだ。

「隊長！ 準備できました。」

「よくやった！」

部下の報告を聞き、銀華は唇を吊り上げた。

銀華は後方へと大きく飛び、部下が用意したヨルムンガルドの横に着地した。

すぐに狙撃態勢に入り、グリッブを握る。

宗月はこちらを見やると大きく口を開いた。

恐らくは炎の息で焼き殺そうというのだろう。

だが、奴の思い通りになる事はない。
何故なら――

「お前はここで、私に倒されるからだ。」

スコープで狙いをつける必要もない。

銀華は迷いなく引き金を引いた。

轟音のような発砲音と共に弾丸が打ち出される。

空を裂き、獲物の元へと飛んでいく。

宗月は回避するそぶりも見せずに攻撃の態勢のままだ。

この姿の自分を魔銃^{まがん}では倒せない、そう考えていたのだろう。

本来であればその通りだが、コイツは特注品だ。

何せ、元々は対装甲車用の銃だ。

破壊力は折り紙付きだ。

しかもおまけで、2属性の魔源^{マナ}を付加させてある。

「なこっ！」

宗月の予想を裏切って、弾丸は魔法障壁を破り、強固な鱗を引き裂き、内部へと突き進んだ。

肉を引き裂き、目指すは彼の心臓とエーテル器官。

“ コールドークネスⅢ！ ”

2つの魔源^{マナ}が混じり合い、4属性とは異なる魔法が発動する。

上位魔法とされる闇の魔法だ。

光と闇の魔法は、2つの魔源^{マナ}を掛け合わせて初めて扱う事が出来るのだ。

人間で扱える者はほほえないが、それは時空龍達には関係ない。

4属性の魔源^{マナ}を扱う時空龍達にとって、上位魔法を扱うのは造作でもないのだ。

「ぐがあ……」

闇の奔流が宗月の身体を内部から腐らせていく。

内臓も骨も血管も、全てその機能を停止していく。

身体を維持出来なくなった宗月は、人の姿に戻り地面に倒れ伏した。誰の目から見ても、彼が死ぬのは時間の問題だった。

「ロキで止めを刺せなかったのは非常に不本意だ。だが、父上と同じ苦しみを味わいながらお前は死ぬ。」

「——ククッ。」

血反吐を吐きながら、それでも宗月は笑っていた。

「何がおかしい!」

「姫様は、本当に——無知なお方だ……ゲホッ。」

「どういう意味だ?」

「そもそも、黒島と繋がっていたのは——ゲホゲホ……、誰だったでしょうね?」

黒島と繋がっていたのは、彼を派遣した宗月だ。

そして、その宗月と繋がった時空龍達——

いや、までよ……

黒島の市長としての身分を用意したのは――

「今頃、貴女のアジトは大丈夫ですかね――ククツ。」

「貴様！ 何を知っている！」

「せいぜい足掻きなさい、先に逝って待っていますよ……ふはははは――グハツ！」

宗月は笑いながら、最後に吐血して絶命した。

最後まで気に入らない顔であった。

「お前達、急いでアジトに引き上げるぞ。」

「隊長、それはどういう？」

「3賢者の老害共が私のアジトを潰しに来るんだよ！」

銀華は唇を噛みしめながらそう答えた。

桜散る時

夢を見ていました。

それは大好きな誰かと過ごす日常。

ずっと続く事を望んでいた時間。

夢の中の私はとても幸せそうで、ちよつと焼けちやいます。

—

目が覚めると、そこは見慣れた部屋の天井では無かった。

まだ身体は怠いが、ゆつくりと上半身を起こして周りを見渡す。

— どうやら医務室のようだ。

確か、お兄ちゃんと軽い言い争いをして、その後……

ズキン、つと軽く頭に痛みが走った。

私は再びベットに身体を預けた。

きっとお兄ちゃんが、ここまで運んでくれたのだろう。
もう少しこのまま休んでおこう。

そう思い瞼を閉じようと――

その瞬間、大きな揺れが襲った。

「きゅっ！」

私は咄嗟にベッドにしがみついた。

揺れはすぐ収まったおかげで、特に被害は無い様子だった。

急に揺れて何かあったのだろうか？

得体の知れない不安感が胸を締め付ける。

まさか、お兄ちゃんに何かないよね？

ゆつくりとベッドから立ち上がり、慎重に扉に近づく。

センサーが反応して自動で扉が開かれる。

廊下を数人の武装した人達が走っていった。

その表情は何か焦っているようだった。

やはり何かあったのだろう、あの慌て方は尋常じゃない。

「こら、そのまま医務室に隠れていなさい！」

「ふえっ!？」

声をかけてきたのは、お医者さんだった。

どうやら今、丁度戻って来たようだった。

そのまま私を医務室に押し戻すと、扉にロックをかけた。

お医者さんの手にも金属の塊——銃が握られていた。

「お嬢ちゃんは今私が守るから、そのままベッドで横になつていなさい。」

「な、何かあったんですか？」

「敵襲だよ。」

テキシユウ。

敵？　ここが攻撃されてるの？

一気に恐怖が押し寄せてくる。

「私、死にたくない。」

そう口から零れた。

「きやつ……」

再び建物が大きく揺れる。

「奴らめ、派手にやっているな。」

「どうやらこの揺れの原因は、戦闘での影響らしい。

一体何をしているのだろうか？

お医者さんはゆっくりと扉に近づく。

扉に耳を当てて外の音を聞こうとしている。

“ フレイムタワーⅢ！ ”

爆風が起こつたのはほぼ同時だった。

その一瞬でお医者さんは扉ごと消し炭になった。

「全く、めんどくさいつたらありやしないわ。」

部屋の中に入って来たのは女性だった。

年齢はおそらく30代後半くらい。

返り血で染まった、白色のパーカーとロングスカート。

三つ編みを左手で弄りながら——こちらと視線が合った。

「ひっ——!」

「アンタ、確かカスパの爺さんが拾った小娘じゃあないの。　なんでこんなところにいるわけ?」

女性は気怠そうにそう質問して来た。

どうやらこの女性は、私が失っている過去を知っている様子だった。

「あ、貴女は、私の事を知っているんですか？」

「何それ馬鹿なの？ 頭だいじょうぶ？」

なんだかイラつとする返答をされた。

正直、この人は嫌いだ。

「まあいいやあ、どうせアンタ——ここで死ぬんだから。」

「えっ？」

“ フレイムタワーIII！ ”

身の危険を感じて、私は咄嗟に身体を動かしていた。

先程まで横になっていたベッドは、跡形もなくなっていた。
ゾツと背筋に寒気が走る。

この人は、間違いなく本気で私を殺そうとしたのだ。

「私が3賢者のメルって知ってて刃向かってるわけえ？ 今すぐしねええ！」

“ フレイムスチームⅢ！ ”

私は咄嗟に魔法障壁を全面へと展開した。

しかし、荒れ狂う炎を完全に防ぐことは出来るわけがなかった。全身が焼けるかのような痛みと共に壁へと叩きつけられる。

「ガキが、私を怒らすところなるのよ。」

「……」

痛みで声も出ない。

指の一本さえ動かすことが出来ない。

私、ここで死ぬのかな……？

「カスパの爺さんの弟子でコレとか、よわすぎい！ あの爺さんボケでも始まったわけえ!!」

メルはそう言ってお腹を抱えながら笑い始めた。

その笑い声がすごい耳障りで嫌になる。
でも、カスパという名を聞くと何か、何か――

“それでもお前は行くのか？”

“ああ、それが兄の手向けでもあり、私のけじめだ”

そうだ、どこかで聞いたはずだ。

わたし、わたしは？

浮かび上がった老人の顔のモヤが消えていく。

そうだ、私は……！

「何よ、その反抗的な目。もしかして怒ってる？」

「その口を閉じろ……！」

メルの身体が大きく吹き飛ばされる。

流石の彼女も、急な反撃に対応が遅れたようだ。

“ ウィンドウエアⅢ！ ”

強化魔法を使い、壁への激突を避ける。

しかし、その顔に先程までの余裕はなかった。

「本気ってわけ？　ほんと生意気なガキねえ。」

「それ以上あの人のを愚弄するなら、3賢者であろうと——殺す。」

私は静かにそう言い放った。

あの日の記憶

——私がその人と出会ったのは、もう何年も前だ。

「君、大丈夫か!？」

「はい、は………?？」

私達は浜辺で出会った。

強制転移でこの世界に飛ばされた私を、彼が最初に発見したのだ。

彼の名はカスパ・ラグナール、3賢者と呼ばれる魔法使いの一人だった。

私はそのまま彼の元で暮らす事になった。

自分の世界への帰還方法を探りながら、魔法使いとしての技を磨いた。

元々の私の才能と、最高の先生である彼のおかげで、私の実力はメキメキと伸びていった。

—

そんなある日、彼が紹介したのがラタトクス学園だった。

彼は出資者の一人でもあるその学園に、あの男がいた。

私の仇、クロト・フェルナンドだ。

やっと私の目的を叶える時が来たのだ。

喜んで私は、その学園へと入学を決めた。

それでも彼は、最後まで私を引き留めた。

きつと、彼と共に過ごすのが一番ベストな選択であつただろう。

でも私は、戦う道を選んだ。

そうしなければ、私は前に進めなかつたから。

「それでもお前は行くのか？」

「ああ、それが兄の手向けでもあり、私のけじめだ」

でもそれは、私の自己満足だ。

結局クロトから、あの後何があつたかを問いただす事は出来なかつた。

真実は全て闇の中、それでも――

アイツが、生きていてくれるなら私は、もう――

「それ以上あの人のを愚弄するなら、3賢者であろうと――殺す。」

私は静かにそう言い放った。

完全でははいが、記憶は大体戻った。

あとはこの鈍った身体がどこまで動けるかだ。

私はワンピースの裾を破き、少しでも動きやすい状態にする。

「言ったわねえ！」

「さて、やるか。」

さて、この狭い医務室でどう立ち回るか……

出入り口は、先ほどの女がぶち壊した扉の場所だけである。

——よし！

“バブルボムⅢ”

水の泡を四方へと拡散させる。

機雷として機能させる事で相手の動きを抑制するのが狙いだ。

「うざったいー！」

“フレイムストームⅢ！”

火と風の複合魔法を放ってくる。

威力は先程身を以て体験している、二度も食らうわけにはいかない。

“ブリザードⅢ”

本来ならば吹雪で攻撃する魔法だが、あえて自らの周辺へと発動する。炎の嵐は勢いを弱め、私の魔法障壁で無力化できるレベルになる。バブルボムの位置を動かしながら、相手の懐へと近づく。

「ガキが、目障りなんだよー！」

明らかにメルは苛立っていた。

その感情が、彼女の魔法の冴えを鈍らせる。

それが大きなスキとなるのだ。

「起動——！」

周囲のバブルボムを一気に爆発させる。

その爆風を防ぐためにメルは魔法障壁を展開した。

私はそのタイミングを逃さなかった。

「ぐげっ！」

大きく跳躍し、相手の顔面を踏み台にする。

汚い悲鳴が聞こえたが、気にせず出口へと跳躍する。

「私はな、言った事を必ず実行する主義なんだ。」

“ タイダルウエーブⅢ ”

水属性最大の魔法を解き放つ。

メルは水流の渦へとそのまま飲み込まれる。

“ アイスウォールⅠ ”

出口に氷の柱で蓋をする。

あの女もこれで終わりだろう。

「さすがカスパ殿のご息女、天才と呼ばれる事はある。」
「——誰だ。」

一部始終を見ていたらしき男が、拍手をしながら目の前に現れた。
間違いない、こいつは3賢者の——

「バルト・ザーフィル……」

「会うのはいつ以来かね？」

こいつまでいるという事は、今回の襲撃は3賢者の意向らしい。
ならばあの人も……？

ふと先生の顔が浮かぶ。

あの人がそんな事を——

“ フレイムストームⅢ！ ”

後方の氷の柱が吹き飛ぶ。

やはりあの程度で倒すのは無理だったか。

「げほっ……くそがあ。」

鬼のような形相でメルが部屋から現れる。

中の水は全て蒸発させられたようだ。

しかし無傷とはいかないようで、その体はふらついていた。

「貴女もしぶといな、仕事くらいスマートに終らせられないのか。」

「うるさい！ そいつは私がコロス！」

流星に3賢者を同時に2人相手にするのは厳しいか……

タイミング悪く、メインの戦力は作戦で出払っている。

時間さえ稼げれば、まだ勝機はあるか？

だがもし、もう一人3賢者が来ているとしたら――

いや、やめよう。今は戦うしかない。

狙うならば弱っているメルの方からなのだが……

メルメルの属性は火と風、バルトバルトは水と雷の属性を持っている。つまりバルトをどうにかしなければ、メルを回復されてしまう。

しかしメルメルの火力は無視できるものではない。

メルを足止めしつつ、バルトを仕留めてからメルを殺す。

この順序が最適だ。

「何が目的か知らないが、私の記憶が戻ったのがお目達の運の尽きだな。」

まだ魔源マナには余裕はある、出し惜しみは無しだ。

さてまずは――

「ぶべっ!？」

攻撃前にメルメルの左腕が吹き飛んだ。

バルトバルトが慌てて回復魔法を唱える。

そう、このタイミングで現れるのは「アイツ」しかない。

「遅かったな、葉助。」

魔銃^{まがん}を構え、その男はそこにいた。

もう一度2人で

「レイ、お前!」

「話は後だ、今はこいつらを倒すのが先だろうか?」

この感じ——間違いなくかつてのレイだ。

何があったかは知らないが、無事に記憶を取り戻せたらしい。

正直、何事も無くてほっとしている。

しかし、再会を喜ぶ暇はなさそうだ。

相手はあの3賢者、どこまで戦えるか未知数だ。

「予想より早いな、宗月も使えぬ男だ。」

「いいいいい! なんなのおお!」

女の方はあと1撃で仕留められる、問題はもう一人の男の方が。弾を補充する暇が無かったせいで、残弾はあまり多くない。

上での戦闘が響いてくるな……

「レイ、女の方は頼んだ。」

「任せろ、すぐに終わらせる。」

俺はフェンリルとヘイムダルの引き金を引く。

フェントムバレット
——幻影弾

つい先ほどの戦闘で編み出した技だ。

“サンダーボルトⅢ！”

フェンリルの弾丸に込めた魔源^{マナ}に意識を集中させ、魔法を発動する。男は咄嗟に魔法障壁を展開してそれを防ぐ。

俺はそのまま相手の背後に回り、左手のヘイムダルの引き金を引く。

“トルネードⅢ！”

強力な竜巻が相手を飲み込む。

ウインドカッターの上位魔法だ、まともに食らえば無事では済まない。更に追い打ちをかけるようにフェンリルの弾丸も打ち出す。

“ブリザードⅢ！”

手ごたえは——ない。

俺はすぐに視線を上に向ける。

男はトルネードの風を利用して上へと逃れていたのだ。

「それが魔銃^{まがん}か、なかなか面白い！」

“サンダーウエーブⅢ！”

雷と水の複合魔法か！

大きく後方へと飛び退き、フェンリルの弾丸を撃ち出す。

“アイスウォールⅢ！”

氷の柱を盾代わりに展開する。

魔法障壁で耐えるには、少々強烈すぎる。

同時にヘイムダルで補助魔法も付与しておく。

やはり出し惜しみをして勝てる相手でもないか。

「…………やるしかないか。」

そう、複合魔法に対抗するなら、こちらと同じ土俵に立たなければならぬ。

消耗の激しさを気にしている場合ではないのだ。

フェンリルの残弾2、ヘイムダルは残弾5。

俺は迷わずフェンリルとヘイムダルの引き金を引く。

フェンリルは相手に向けて、ヘイムダルはローブの影から別方向に。

相手も魔銃まがんの特性を知っているはずだ。

受けるのではなく避けようとするはずだ。

予想通り、男はフェンリルの弾丸を避ける。

だがそれは狙い通りだ。

“ ウインドカッターⅢ！ ”

フェンリルの弾丸から魔法を発動させる。

当然、魔法障壁を展開して攻撃を防いできた。

俺はそのタイミングに合わせてもう一度フェンリルの引き金を引く。

「ふん、どこを狙っている。」

撃ち出した弾丸は、男から逸れて背後を通過していく。

当たらずとも魔法が発動する特性は知っているため、次の攻撃に備えて魔法障壁を展開するだろう。

だが、それでいい！

最初に打ち出したヘイムダルの弾丸が跳弾を繰り返し、先ほど逸れたフェンリルの弾丸に接触する。

お前自身の判断を後悔するといい、こいつはただの魔法じゃないぞ。

2つの弾丸に込められた魔源^{マナ}同士が混ざり、そして爆ぜる。

こいつはただの複合魔法じゃない、そうこれは――

“ユニオンエクストリーム！”

複合魔法の極致、光の魔法である。

かつて黒島を倒すために使った魔法でもある。

「ハ、ハ、これは――」

もう遅い。

この光からはもうお前は逃れられない。

待つのは――消滅だけだ。

「じゃあな。」

男の身体は光に飲み込まれていく。

一仕事終わったレイも、並んで一緒にその光景を眺めていた。

「あの時の魔法か。」

「ああ。」

そういえば、あの時も2人一緒に戦ったな。

またこんな日が来るとは思っていなかった。

出来れば彼女には二度と……

「レイ、記憶が戻ったんだな。」

「まだ完全じゃないがな、それでもこっちに來てからの事は全部思い出した。」

「良かった……」

つい本音が口から零れる。

流石に涙まで見せるのは恥ずかしいので、レイから顔を背けた。

色々あったが、やっとレイが帰ってきてくれたのだ。

こんなに嬉しい事はない。

「しかしなんだ、改めて思い返すとなかなか恥ずかしいな！」

「何が？」

「その私の——色々だ！」

レイは顔を真っ赤にしてそう答えた。

こういう所も変わってないなと思ってしまう。

「色々？」

「そう、色々だ。だから気にするな。」

「はいはい、分かったよ。」

時間が巻き戻ったかのような錯覚に陥りそうになる。

でも健司はもういない。

俺がこの手で殺したんだ。

「葉助。」

「ああ分かつてる。」

気配が近づいてくるのが分かる、しかもかなりの人数だ。この状況では敵の可能性が高い。手持ちの残弾ではかなり厳しいな。

「レイ、まだいけるか？」

「誰に言っているんだ？」

レイは強くそう答えた。

どうやら心配するだけ無駄のようだった。

「いいか、やばくなったらお前が先に逃げるんだぞ？」

「断る。」

「——頑固な所は変わらないな。」

まあ引きずってでも撤退するしかないか。
覚悟を決めて正面を見据える。

しかし、現れたのは――

「銀華さん！」

「カスパ先生！」

銀華さんと見慣れない初老の男だった。

新天地へ

「どうやら既に3賢者を倒したようね。」

「来るのが遅すぎますよ。」

敵を撃退したというのに、銀華さんの表情は硬いままだった。

まだ何かあるというのだろうか？

「銀華、あとはわしが説明する。」

そう言つて、レイに“カスパ先生”と呼ばれた男が歩みでた。

カスパ——カスパ・ラグナールの事だろうか？

だとしたら3賢者の一人だ、敵ではないのか？

「……」

「君が警戒するのはもつともな話だ、わしも3賢者の一人だからのう。」

しかし、銀華さんの判断ならば大丈夫という事なのだろう。
部下の俺は命令に従うだけだ。

「わしがここに来た理由は一つ、ある情報を伝えるためじゃ。」
「情報？」

「そう、今この場所を目指して時空龍の大群が向かって来ておる。」
「なんだって？」

銀華さんのあの顔の意味はこれか……

1体でもとんでもない化け物が大群か、想像もしたくないな。

「そういうわけだ葉助、お前はレイを連れてここから逃げろ。」
「何を言ってるんです？」

銀華さんの表情は変わらない。

本気で言っているんだろうか？

「皆で逃げればいいじゃないですか！　なんでわざわざ——」

「聞け！」

「っ！」

言葉を途中で遮られる。

「奴らの目的は、おそらく私だ。　自分達のトップを殺された復讐だろうよ。」

「……」

「だからな、その怒りの受け皿が必要なんだ。　それに適しているのがこの私だ。」

ああ、そうか。　この人はここで死ぬ気なんだ。

全てを終えて、先に意味はないと。　そう判断したからこそその選択なのだ。

「分かったなら命令を復唱しろ！」

「俺は——」

ゴツン——と鈍い音が響いた。

皓月さんだ。あの人が銀華さんを殴ったのだ。

「最初で最後です。無礼をお許し下さい。」

「皓月、どういふつもりだ？」

唇の血を拭い、銀華さんが立ち上がる。

その瞳は皓月さんを睨んでいた。

「俺の任務は貴女を守る事です。自殺に加担は出来ません。」

「私に刃向かうのか！」

皓月さんは何か考え込むように瞳を閉じる。

長く感じる沈黙の後、彼は目を見開いた。

「死んでいった者達のため！俺は命を懸けて貴女を止めます！」

「皓月……」

「それでも行くと言うなら、貴女を気絶させても止めますよ。」
「ククツ……あはははっ！」

銀華さんは笑った。

腹を抱え、涙を流しながら笑っていた。

それは俺が、今まで一度も見た事のなかった表情だった。

「はあ、そうか、そういうつもりなんだな？」

「はい。」

「わかった、お前の好きにしろ。」

「ありがとうございます！」

そう返事をする、皓月さんは部下を集めて指示を始めた。
銀華さんが俺達の前に近づいてくる。

その表情は、いつもと変わらないものに戻っていた。

「おい葉助。」

「な、なんででしょうか？」

「どうせ逃げるなら、思い切って遠征しないか？」

「え、遠征？」

一体どこに？

そんな疑問が頭に浮かぶ。

「そうだな、ロキアまで行くというのはどうだ？」

その言葉に、カSPAと話していたレイも反応した。

確かに、仕事が終わった後でロキアまでの移動をお願いしようとは思っていた。

時空龍である彼女ならば、簡単に境界線レイ・ラインを越えて境界移動可能であるからだ。

しかし、このタイミングでその名が出てくるとは思わなかった。

「本気なんですか？」

「行きたかったんだろ？ 私も暇になったし問題ないぞ。」

願ってもない申し出だが、この状況下でそれはどうなのだろうか？
これから時空龍達を迎撃をしなければならぬのに。

「それに、撤退組にはお前も含まれているからな？ 撤退ついでの遠征だ。」

「なんで！」

「私がそう決めた、お前はさっさと準備をしてくればいい。」

「——はい。」

そう、俺は命令に従うしかない。

状況に流されるだけで、何一つ選択出来ないのだ。

部屋で準備をしていると、ノックの音が響いた。

「どうぞ。」

「失礼するわね。」

「え？」

それはとても懐かしい声だった。

部屋の中に入って来たのはキャシー先生だった。

「やっと会えたわね、葉助。」

「どうしてここに？」

ただの教師であるキャシー先生が、ここにいる理由はない。そもそも訪れる事すら出来ないはずだ。

「カスパ様がやっと教えてくれたのよ、あなた達の事をね。」

「ずっと探してたのよ？」

「先生……すみません。」

「いいのよ、理由も全部聞いてるから。」

キャシー先生の瞳から涙が零れる。

きつと、俺達の事を探していてくれたのだろう。

機密上この場所は教えられるわけもなく、俺は黙っているしかなかったのだ。だとしたら、何故今更ここに？

「先生、でも何故ここに？」

「私も戦うからよ、あなた達のために今度こそ何かやるために。」

「そんな、ここはこれから！」

「分かってるわよ。でも、以前みたいな事は嫌なの。」

あなた達が戦っている中、私は何も知らなかったのよ？」

「それは……」

俺は俯いて黙る事しか出来なかった。

でもあの時は、誰も巻き込みたくなかったんだ。

「だから今度はね、先生も巻き込んでちょうだい？」

「——分かりました。でも、死なないでください。」

「そんなの当然よ、結婚するまで死ねないわ。」

その後、先生と他愛無い会話を続けた。

学校の事、今の教え子の事、まだ彼氏がない事――

「じゃあ、そろそろ行きましようか。」

「はい、先生。」

少しだけ、心が楽になった気がした。

「準備は出来たな？」

「はい。」

会議室には銀華さんと俺、そしてレイの3人が集まっていた。

レイは背中にリュックを背負っているだけで、あまり荷物が多そうには見えない。一方の俺や銀華さんは、弾薬や食料、野宿用の道具等でかなりの量になっている。

「よし、なら行くぞ。」

そう言うと、会議室のパネルを操作する。

駆動音と共に、壁が開いてエレベーターが現れた。

こんな場所にあるとは今まで気づかなかつた。

3人共エレベーターに乗り込むと、静かに地下へと動き出した。

「これ、どこに向かつてるんですか？」

「そうだな、滑走路と表現するのが正しいかな。」

「滑走路……?」

「飛行機にでも乗って境界移動ラインスワープつてわけでもないだろ? 答えは簡単だよ葉助。」

——大体予想はついた。

もつとこう、原始的というか物理的というか、そんな感じの方法なのだ。

辿り着いた地下空間は、大きな空洞だった。

滑走路というよりは、ドーム状の空間だ。

「よし二人共、覚悟はいいな？」

「もちろんだ。」

「ああ。」

返事を確認すると、銀華さんは魔源^{マナ}を集中させる。

あまりに強力な力に、光となつて魔源^{マナ}の流れが視認出来る程だ。

その光は銀華さんの周囲をうねり、螺旋を描く。

より一層光が強くなったかと思うと、その光が銀華さんを包み膨張していく。

光が霧散すると、銀色の龍が姿を現した。

「この姿を見せるのは初めてだな。」

その龍は銀華さんの声で話しかけていた。

こうして直接見る事で、銀華さんは時空龍なのだと言認識させられる。

「どうした？ さっさと背中に乗らないか。」

「や、やっぱりそうなるよな。」

予想通りの展開に、仕方なく荷物を持って背中へと飛び乗る。

一方レイは、楽しそうに喜んで背中に飛び乗った。

「そういえば、レイは一度、境界移動ラインスワープしてるんだよな？」

「まあな、問題はその以前の記憶がまだはつきりしない事だ。」

「もしかしたら、境界移動ラインスワープの最中に記憶が戻る可能性もありえるかも。」

「どうだろうな？　ありえない話ではないかもな。」

境界移動ラインスワープ

一体どんな体験が待っているのだろうか。

不謹慎だが、少しワクワクしていた。

「よし、行くぞー！」

銀華さんは二、三步後ろに下がると、一気に駆け出す。

その衝撃は背中に乗る俺達にまで伝わって来た。

「しっかり捕まっているよー！」

勢いをつけて大きく地面を蹴った。

翼を大きくはばたかせて、その巨体を空へと導く。

真つ直ぐとかなりの速度で進むが、目の前には壁が――

「ぶつかるー！」

「っー！」

俺は咄嗟にレイを庇った。

しかし、予想される衝撃が襲ってくる事はなかった。

「いつまでやっている、前を見てみる。」

「あ……」

目の前に広がっていたのは、虹の道だった。

境界移動（ラインズワープ）

「無事に行ったようじゃな。」

カスパは地下での強大な魔源マナの流れを感じていた。
それは彼らが無事に旅立った証拠でもある。

「そのようですね。」

隣に立っているキャシーが答える。

カスパも重い腰を上げ、空を見上げた。

「本当に、君は行かなくて良かったのじゃな？」

「はい——今度こそは私が戦う番ですから。」

キャシーは瞳を閉じ、何かを思い出したように言葉を続ける。

「3年前、私は何も知らなかった。自分の生徒が巻き込まれた運命に気づけなかったのです。」

「だから、今度こそは私が何かしてあげたいのですよ。」

「なるほどのう……」

「まあ、一つ心残りがあるとすれば……結婚したかったなあ。」

キャシーは自嘲気味にそう呟いた。

それを聞いたカスパは、笑いながらこう言った。

「ならば、わしと結婚せぬか？」

「はい!？」

突拍子もない言葉に、キャシーは目が点になっていた。

「さ、流星に冗談じゃよ。」

「——いいですよ。その代わり、この戦いでお互い生き残れたらのお話という事で！」

そう返すと、キャシーは地平線を睨む。

そこには何台もの車が見えた。

「どうやら来なすつたか。 わしが用意した策が多少は効くとよいのじゃが。」

生存確率はほぼ0に近い戦いに、彼らは挑もうとしていた。

—

皓月は最前線にいた。

こちらに走ってくる車を睨みながら、最後の一服を楽しんでいた。

本来ならば、この立ち位置にはあの青年を使う予定だった。

元から皓月にとって銀華以外に大事な者はいないのだ。

彼女が全てであり、そのためならばいくらでもこの手を汚そうと構わない。

ドラゴンスレイヤー
時空龍殺しを彼に継承させ、彼女の身代わりとしよう決めていたはずなのに。

「ふう……」

——煙草の煙を吐く。

吸い殻を地面に捨て、ブーツで踏みつぶす。

いつの間にか、その大事な者に彼も含まれてしまっていたのだ。

自分はなんて勝手な大人だろうと笑う。

だがせめて、自分が出来る事といえば——

「聞け！　クソ時空龍ども！」

右手に握った魔銃まがんを大きく空に掲げる。

それは誇るように、それは見せつけるように、大きく掲げる。

「俺の名は桂木葉助！　お前達が恐れる時空龍殺しであり、お前達のボスを殺した仇だ

！」

そう、これが俺の描いたシナリオ。

そしてその代役は——俺だ。

「死をも恐れるならかかってくるがいい。俺はお前達が戦いを止めない限り、この引き金を引き続ける！」

皓月という男はもうどこにもいない。

ここに居るのは2代目・時空龍殺し、ドラゴンスレイヤー桂木葉助だ。

「——姫様を頼んだぞ、小僧。」

その小さな言の葉は、銃声で掻き消された。

目の前に広がっていたのは、虹の道だった。

文献では読んだ事はあったが、これが本物の境界線レイ・ラインか。

「綺麗……」

「レイは一度通った事があるんじゃないか？」

「コホン——実は覚えていないんだ。気づいたらこっちの世界にいたからな。」

「そうなのか。」

「それに、まだ記憶が完全に戻ったわけでもない。」

そうだった。昔の調子に戻っているから勘違いしていた。

あくまでも戻った記憶は、こつちの世界に来てからのもので、元の世界での記憶は曖昧らしい。

しかし、その状態でレイの家を探す事なんて出来るのだろうか？

手がかりはレイ・リヴァイアスという名前だけか——先が思いやられる。

「悪かったな。」

「そんなに気にするな葉助、そのうち戻るだろう。」

銀華さんは黙ったまま境界線レイラインを飛び続けている。

そういうえば、境界線は色々な世界と繋がっているんだっけか。

ロキアまでの道は把握しているのだろうか？

「銀華さん、ロキアまでの道は大丈夫ですよね？」

「当たり前だ、久々の境界線レイニア飛行とはいえそこまでボケていないぞ？」

「す、すみません。」

なんだかいつもより気が立っているのは気のせいだろうか？

それとも、それだけ神経を使っているのだろうか。

実際に自分が飛んでいるわけではないから、その真相は本人のみが知ると言った所か。

景色は相変わらず、虹の道が続いているだけである。

「他の世界って、ここからじゃ見えないのか。」

「もうすぐトンネルを抜ける、その後に見えるぞ。」

確かに虹の道の切れ目が見えて来た。

「この虹の道は、それぞれの世界の入口を安定させるために用意されているんだ。
——さあ、抜けるぞ。」

虹の道を抜けた先には、漆黒の空が待ち構えていた。

漆黒の中に数多くの小さな点が光を放っている。

おそらく、俺達が夜空で見ることが出来る星と呼んでいる物と同じであろう事は想像がつく。

「あの光1つ1つに世界があるのだ。お前達の世界のようなものかな。」

「すごいな……」

「そして世界は全て境界線レイ・ラインで繋がっている、とある場所を中心にな。」

何か考えるように銀華さんは語り始めた。

「葉助、境界線レイ・ラインの知識はどこまである？」

「境界線レイ・ラインが、各世界を繋いでいるルールみたいなものってくらいかな。」

「まあ、大体は合っているな。」

いつの間にか眠ってしまったレイの肩を抱き、銀華さんとの会話を続ける。

「私達が与えた知識では、全ての世界は横並びになつていと教えている。イメージとしては——世界は駅と見立てて、私達は電車と言つた所か。」
「なるほど……でも、それはおかしくないか？」

「そうだ、だって世界は無数に散らばっているじゃないか。とても横並びに繋がっているとは思えない。」

「そうさ、この境界線レイ・ラインは繋がっているのは間違いない。だがそれは横並びではない。」

「そう言つて銀華さんは目の前を指さした。そこにはあらゆる方向から境界線レイ・ラインが収束している場所がある。」

「あれがこの境界ラインズの中心、ヴァルハラだ。」

「境界の中心？」
ラインズ

「そう、全ての世界はあのヴァルハラを中心とした三次元的スター構造になっているのや。」

そして私の生まれ故郷さ、そう呟いた。

「私達時空龍は、各世界の安定のためにあのヴァルハラから送り込まれる。」

私も同じく、あそこで生まれ育った。」

「ならば、何故時空龍達はそれを隠している？」

「簡単な話だ、このヴァルハラは既に無人だからだ。」

無人だと？　ここは時空龍達の故郷ではないのか？

「不思議だと言いたそうだな？　王が亡くなったのなら必然だろう？」

「跡継ぎは？」

「一族諸共さ。そして生き残りは各世界に散り、一部の者は宗月に付き従ったわけだ。」

時空龍達にそんな背景があったとは知らなかった。

その強大な力を誇示するため、あえて隠していたというわけか。

「向きを変えるからしつかり掴まりな。」

そう言うのと銀華さんは90度向きを変えると、上側へと羽ばたいた。

俺はレイをしつかり支えながら掴まる。

「くっ……」

「境界線の外側——宇宙に放り出されたら私達でも死ぬから必死に掴まりな。」

「そういうのはもつと早く言ってくれ！」

俺は更に指に力を入れた。

「——やけに境界線が不安定だな。」

「この揺れはきつすぎる！」

「こればかりは耐えろとしか言えん！」

揺れは更に激しさを増す。

最早、目を開いている事すら不可能な状態だった。

「だめだ、衝撃に備えろ！」

「くっ！」

大きな浮遊感の後、俺の意識はシャットダウンした。

—
—

「ついに、ここに辿り着いたのね。」

「ん………？」

夢のような浮遊感の中、どこか懐かしい声がある。

一体いつの記憶だったか……

「貴方はここで自らの宿命と対峙する事になるわ。」

「君は——そうだ！」

思い出した。彼女は3年前に現れた幽霊だ。

幼いレイの容姿の幽霊は、あれ以来俺の前に姿を現す事はなかった。今になってどうして——

「近づいているからよ、貴方に刻まれた遺伝子が反応しているの。」

「そうだぜ兄弟。」

逆方向から男の声がした。

それは自分の声と瓜二つだった。

「お前の身体の遺伝子、レイとユニスの遺伝子が反応してるんだぜ。」

「ここにはもう一人のオリジナルがいるからな。」

「貴方は黙っていて、私が彼と話をしているの。」

「妹が兄に意見するのか？ 反抗期にでも入ったか。」

正直この二人の会話についていけない。

つまりどういう事だというのか。

「簡単に言うとな、オレはユニスの遺伝子、こいつはレイの遺伝子としての意思だ。
俺達二人はお前の中の潜在意識として存在しているのさ。」

「なんだよそれ……」

「忘れたとは言わせねえぞ。オレだって何度もお前を助けてるんだぜ？」

ユニスの遺伝子の意思とやらは、わざと声のトーンを下げて囁いてくる。

「火内とかいう化け物を始末する時も力を貸してやったのによお。」

「っ！」

そうだ、あの時——

あの力が溢れる感覚、夢のような浮遊感……

「思い出したか？」

「そういう事だったのか。」

「いい加減にして、貴方も目的は同じでしょ？」

「はいはい、レイを送り届ける事、ユニスの事、分かってますよ。」

いかにも面倒だと言いたそうに答える。

本当にコイツは味方なのだろうか？

そもそも遺伝子自体に意思があるというのはありうる事なのだろうか。

「ともかく、貴方は無事〃セレニティア〃に辿り着いた。

あとは——」

「ちよつと待つてくれ！　ここは〃ロキア〃じゃないのか！」

「——」

二人の声はもう聞こえなくなっていた。

“ロキア”ではなく、“セレニティア”だと？
一体どういう事なんだ……

考える間もなく、俺の意識は急速に覚醒していった。

セレニテイヤ

何かが頬をつつく感触がする。

これは——指だ。

誰かが俺の頬をつついている。

「ん……」

ゆっくりと瞼を開く。

ぼやけた視界が少しずつクリアになっていく。

見慣れない木造の天井、一体ここはどこなのだろうか？

「おきた？」

「ん？」

つついていた張本人が右横にいた。

見た目は5歳くらいの金髪の少女だった。

「おとーさーくん、おきたおきた！」

そう言いながら部屋の奥へと駆けて行った。

ゆつくりと重い身体を起こすと、自分がソファーに横になっていた事に気づく。どうやら誰かの家の中のようなだ。

手足には包帯が巻かれ、誰かが処置してくれたのが分かる。そもそも、俺達は無事に辿りつけたという事なのだろうか？

“ 貴方は無事、セレニティアに辿り着いた ”

あの声はそう言っていた。

“ ロキア ” ではなく、 “ セレニティア ” と言ったのだ。

という事は、目的地とは違う世界に辿り着いたという事になる。

「気分はどうだ。」

部屋の奥から体格のいい男性がやってきた。

おそらく、幼女が言っていたお父さんだろう。

その割には少し若すぎる気もするが。

「なんとかか…… 貴方が助けてくれたんですか？」

「まあな、森で狩りをしていたら、倒れているお前達を見つけた。」

「——俺の他には？」

「女性が二人、別の部屋のベッドで眠っている。2つしかベッドが無かったものだな。」

なるほど、それで俺はソファアーだったわけか。

それでも、皆無事でよかった。

「ありがとうございます。えっと——」

「黒翼だ。こいつは娘の鈴華だ」

「ありがとうございます、黒翼さん。」

痛む身体を無理矢理動かして立ち上がろうとすると、慌てて黒翼さんが止めに入る。

「2人が気になるのは分かるが、動き回るにはまだ早いぞ！」

「——すみません。」

「もうすぐ夕飯が出来る、話はその時ゆっくり聞こう。」

「ありがとうございます。」

俺は再び、身体をソファアに預けた。

「成程、このご時世に別世界から来たわけか。」

「はい、見事着地に失敗しましたけどね。」

「このセレニティアの周辺の境界線レイ・ラインは不安定だから、それも仕方あるまい。」

シチューを頬張りながら、色々と黒翼さんと情報を交換する事が出来た。

この世界が、やはりセレニティアだという事。

ロキアとセレニティアは、密着した特殊な世界だという事。

そして、レイの家の事だ……

「しかし、本当に彼女はレイ・リヴァイアスなのか？」

「はい、本人の記憶は曖昧になっていますが間違いないと思います。」

俺が昔見た夢の内容も、今ではほぼ思い出せないため手がかりにはならない。

だから彼女の家を探すのは困難を極める事と覚悟していた。

しかし、それは予想もつかない事で判明した。

このセレニティアにおいて、リヴァイアスという家名は大きな意味を持っていたのだ。

「行方不明だったリヴァイアス家のご息女の帰還か、これは大きな波紋を呼びそうだな。」

「そこまでの影響力があるんですか？」

鈴華ちゃんはシチューに夢中になっている。

黒翼さんは、汚れた口を丁寧に拭いてやりながら、俺の問いに答えてくれる。

「事実上、このセレニティアの管理者だったからな。王族のようなものだ。」
「へえ、レイがお姫様ねえ……」

——想像したら、口元がニヤけてしまった。

だって、そんなイメージとは真逆なのだから。

むしろ、昔はそうだったのかもしれない。

あんな事さえなければ彼女は——

「ともかく、出発するにも2人の回復を待った方がいい。」

「すみません、お世話になりっぱなしで。」

「気にするな、明日はお前にも手伝ってもらいたい事があるしな。」

今日はもう寝ろと言って、テーブルから立ち上がる。

いい人に助けられて、本当に良かったと思う。

もし、あのまま誰にも見つけられずにいたらどうなっていたか……

そう考えるとぞつとする。

とりあえず、今は二人の回復を待つしかなさそうだ。
別に慌てる必要はないのだから。

「じー」

「――」

「じー……！」

視線が痛い。

鈴華はずっと俺を観察していた。

朝早く、黒翼さんは槍斧を背負い、カゴを持って薬草を採りに出かけた。

なんともファンタジーチックな得物だが、これがこの世界では普通なのだろう。

その間彼女のお守を頼まれたわけだが――

「な、なんだよ。」

「じーっ」

さつきからこの調子である。

そんなに銃が珍しいのだろうか？

落下の衝撃で破損がないか、ばらして確認していたのだが、それが彼女の興味を引いたようだ。

その作業を横からずっと眺めている。

——正直やりづらい。

「こんなの見ても面白くないだろ？」

「おもしろい。」

「そ、そうか……」

だから俺が困るんだって！

そんな心の声を飲み込んで作業に集中する。

フエンリルもヘイムダルも問題無さそうだ。

銀華さんの魔銃^{まがん}は、ここには無い^{まがん}ため確認できないのが心配だが。

「その金属の塊、すっごい綺麗。」

「綺麗？」

「うん、キラキラ。」

キラキラ？ 子供の考える事はよくわからない。

組み上げた魔銃まがんを懐まがに仕舞い込む。

そこまで警戒する必要はないが、万が一という事もある。

こいつらを握つかってる方が落ち着おくなんて、俺も変わったな。

さて、次は――

自らの両足に手を掲げる。

骨折程度なら、魔法で直してしまった方が早い。

血液中の水の魔源まがを意識して収束させる。

そして呪文に乗せて魔法を発動――！

「ヒーリングⅡ！」

元々使っていた水と風なら、そこまで意識せずとも発動出来る。

本来人間の身で4属性の魔源まがを扱うのは無理なのだ。

各々の魔源まがを認識し、それを収束させる行為。

その種類が増えるだけでこうも体に負担がかかるものなのだ。

「おー！ まほーだ！」

「驚いたか？」

「私もね、まほーつかえるんだよ！」

えっへんつと、腰に両手を添えてふんぞり返った。

なんとも微笑まし光景である。

「ほほう、それは凄いな。」

「みてて！」

そう言うのと彼女は俺の両足に手を掲げた。

どうやら俺の真似をするつもりらしい。

まあ、精々痛み止めくらいになる程度の――

恐ろしい量の魔力が練り上がっていく。

しかもその速度は俺の2倍の速さで量は何十倍も上だ。

とても子供が扱うようなものじゃない！

「リザレクション！」

ああ、これはやばいやつだ。

一瞬で骨がくつつくどころか、怪我の前と同じ状態に戻るのがわかる。

これはまともな魔法じゃない。

「すごいでしょー！」

「——言葉も出ないな。」

これ腕の一本は軽く再生出来るんじゃないか？

そう思うくらいは強力なものだった。

「でもでも、ちよつと気になるのです。」

「どうした？」

「おにーさんって、じくーりゅーなの？」

「えっ?」

あまりにも予想外の言葉が彼女の口から発せられた。

「今、時空龍って——」

「うん、私もそうなんだ!」

笑顔で語る彼女は、自分が時空龍だと言った。

それなら先程の説明はつく。

しかし、この世界にも時空龍は来訪していたのか。

「おとーさんはりゅーだけど、おかーさんがじくーりゅーだったって言ってた!」
「そ、そうなのか。」

“りゅー” って言うのはよく分からないが、どうやら母親が時空龍のようだ。

となると、黒翼さんの奥さんは時空龍か……

ならこの子はハーフなんだな。

見た目は普通の子供と変わらないのに。

「で、おにーさんはじくーりゅー?」

「俺は違うよ。」

「ええ、だつておにーさんキラキラだよ?」

「——そのキラキラつてどういう意味?」

「んとね! 緑とー赤とー、色んな色でキラキラなの!」

緑? 赤?

色の事だろうと予想はつくが、何を意味しているのかは正直分からない。

「わかんないかなあ、まほー使う時にキラキラつかうでしょ?」

「あ、魔源マナの事か。」

「それー! おにーさんは鈴と同じでキラキラいっぱいだから同じだと思ったのに。」

大体納得した。

つまり色とはそれぞれの属性の魔源マナの事だったのか。

それにしても色か……

「君は魔源^{マナ}が色分けで見えるのかい？」

「ええ、おにーさんはみえない？」

「俺にはわからないなあ。」

「うっそだあ、目で見るとんじやないんだよー！」

彼女が真剣な眼差しで言い寄ってくる。

「じゃあどうやって見るんだ？」

「感じるのー！」

笑顔で答える彼女は、俺には眩しすぎた。

感じるねえ、そんな簡単な——待てよ。

そもそも、なんで俺は水と風は負担が軽いんだ？

元々使い慣れてるからだろ？

慣れてるからそこまで意識してないって事だろ？

感覚で見ると、同じ事なんじゃないか？

無意識下で魔源^{マナ}を収束出来るようになれば、体の負担も減らせるようになるんじゃないのか？

「——頑張つて練習してみるよ。」

「なら私がせんせーするね！」

「ああ、頼むよ先生。」

——結局そのまま、黒翼さんが戻るまで小さな先生に思った以上の授業を受けさせられる事となった。

リヴァイアス家を目指して

「レイ、調子はどう？」

「ああ問題ない。」

このセレニティアに来てから1週間が経った。

俺とレイはすっかり回復したが、銀華さんは不調のままであった。

しかし本人の希望で、リヴァイアス家を目指すため出発する事になった。

黒翼さんは反対していたが、銀華さんが意見を変える事はなかった。

結果、彼はリヴァイアス家の屋敷跡までの道案内を申し出てくれたのだった。

「この辺りは魔物もよく出る、気を抜くなの。」

先頭を歩く黒翼さんが注意してくれる。

その横を銀華さんと鈴華ちゃんと歩いている。

俺達はその後ろを歩いている形だ。

「大体どれくらいかかるんですか？」

「そうだな、1日半も歩けば辿り着くだろうな。今晚は野宿する事になる。」

「みんなおくれるなー！」

「鈴華ちゃんは元気だな……」

そんな他愛のない会話をしている最中、銀華さんは無表情のまま黙つたままだ。

何やら黒翼さんとは顔見知りのようだが、何も教えてはくれなかつた。

彼女がロキアに来たがっていた事と何か関係があるのだろうか？

「確かに、この辺りは見覚えがあるな。」

「レイ、何か思い出せそうなのか？」

「なんだろう、喉元まで出かかつて止まってる気持ち悪い感じだな。」

「——その例えは何かとよろしくない気がするぞ。」

「そうか？」

悪気がないのがまた手に負えないな。

周囲を警戒しつつ歩を進めるが、屋敷らしきものは全く見えてこない。見えるのは一面に広がる平野と木々だけだ。

それに出発が遅かったせいかわ、既に日が落ち始めていた。

「予定よりも遅れているか…… 今日はこちらで野宿しよう。」

黒翼が足を止めてそう言った。

「ここは土地勘のある者の言葉を受け入れるのが賢明だ。」

「まだいけるだろ？」

「無理だな、特にお前がだ銀華。」

「私は！」

「少しは言う事を聞け。」

「……」

あまり良くない雰囲気は、更に悪化するように感じた。

夕食を済ませ、俺とレイは見張りの役に回っていた。

モンスターが徘徊してる中で野宿では、交代で見張りをするのが基本だ。

「……」

「何か思い出す事でもあったか？」

「近づいてる筈なのに、何も浮かんでこないんだ。」

「そうか……」

再び訪れる沈黙。

なんというか——気まずい。

無理矢理話題を探そうと辺りを見渡す。

特にこれといったものは無く、銀華さんと鈴華ちゃん、黒翼さんが眠っているだけだ。
途方に暮れて空を見上げる。

星々が空に輝いている。

「そういえば——」

「ん？」

「前にも、こんな事があったな。」

そうか、あの夏の話だ。

「色々ハプニングがあつてさ、こうやって二人だけで空を見てただろ？」

「ずっと昔の話みたいだ……」

「それでお前さ、“不思議だよね”って言いだしてた。あの頃のお前は可愛かったよ。」

「流石にこの歳でそんな事言わないぞ！」

俺は顔を真っ赤にして必死に抗議する。

レイはそれを見て小さく微笑んだ。

「そうだ、桂木葉助はその方が似合ってるぞ。正直、今の喋り方は背伸びしてるみたいで気持ち悪い。」

「は、はつきり言うな。レイだってそうだろ？」

「まあな、私は背伸びしてでも大人になるしかなかったんだ。　そうだ、私——」
「レイ？」

何かを思い出したように自分の荷物を漁りだす。

「あつた！」

取り出したのはペンダントだった。

そうだ、あれは確か——

“ お前だけでも、ここから逃がす ”

レイの兄であるユニスが妹に贈ったペンダントだ。

境界結晶レイ：クォーツを使ったそのペンダントの力で、レイは俺達の世界へと逃れる事が出来た。

でも、何故今それを……

「——まだ少し力が残ってる。」

「どうしたんだ？」

「な、なんでもない！」

「ふーん。」

そう言うと、レイはそのペンダントを身に着けた。

「どう?」

「どうって?」

「——この鈍感男。」

今ほそつと酷い事を言われた気がする。

「ん、銀華さんと黒翼さんがいないな。」

トイレか何かだろうか?

少し気になるな。

「少し探しにいつてくるから、鈴華ちゃんをお願い出来るか?」

「任せておけ、私を誰だと思ってる。」

「流石は天才魔法使いだ、当てにしているよ。」

俺は得物の感触を確かめ立ち上がる。

動く気配は感じなかった。

でも、そこまで遠くに行く事はないだろう。

テントの裏側にある林の中に足を踏み入れる。

考えられるのはこの近辺くらいだが――

「何故、ここに戻って来た。」

「それは私の勝手だろ、お前に関係ない。」

話声が聞こえる。

どうやら銀華さんと黒翼さんのようだ。

しかし、雰囲気的に出て行けるような状態じゃないのは分かる。

「お前はあの時の傷で！」

「ああ分かっている、次に龍の姿に戻れば死ぬだろうな。」

死ぬ？ 銀華さんが？

「分かっついて何故！」

「あの子達には借りがある、それを返すためだ。」

「それは、お前が命を削る程大事な事なのか？」

「宗月を殺す手伝いをしてくれた、理由はそれで充分だ。」

「——そうか。 仇を討てたんだな。」

黒翼さんも宗月を知っている？

一体この二人はどんな関係なのだろうか。

「なら、あの二人を送り届けたら3人で暮らさないか？」

「……」

「それが夢だっただろ？」

「今更、どの面下げてあの子の前に立てばいいのだ、私は……」

「銀華——」

「私はもう、あの子の母親にはなれないよ黒翼……」

母親……？

あまりの驚きに、少し物音を立ててしまう。

「誰だ！」

銀華さんがこちらに向けて魔銃まがんを向けてくる。

俺は両手を上げて二人の前に出た。

「——聞いていたのか。」

「まあ、半分くらいは。」

「分かっていると思うが——」

「言いませんよ、それは貴方が直接鈴華ちゃんに言う事ですよ？」
「……」

返答は沈黙だった。

きつと、この二人の間には恋人以上の複雑な関係があるのだろうか。

俺はそこに踏み込んではいけない、そんな気がした。

通りすがりの行商人から物資を補充し、再びリヴァイアス家の跡地を目指す。
黒翼さんの話では、あと半日も歩けば跡地が見えてくるらしい。

「しかしさっきの商人、獣のような耳と尾を持っていたが……」

「そうか、イデリティスの民は初めて見るのか。」

「イデリティスの民？」

「彼らはロキアに住む特殊な種族でな、ここ最近じゃ滅多に見かけないな。」

「そういえば、ロキアとのゲートは一時閉鎖されているんですしたね。」

となると、さっきの人は故郷に帰れないわけか。

まるで自分のようだと、ふと思った。

「あともう少しで辿り着く、お前達頑張れよ。」

「すみません、ちよつと用を足してきます。」

そう言つて俺は茂みの中へと入っていく。

皆からは見えない位置まで進み、そのまま目の前の木に寄りかかる。

——最近、間隔が短くなっている気がする。

全身を逆撫でるような悪寒、額には脂汗が浮かぶ。

「げほっ！げほっ！」

咳き込むと、口からは鮮血が溢れ出た。

どうやら、俺の時間もそう長くはないらしい。

急がなければ——

俺は瞳を閉じて、大きく深呼吸した。

生きていた主

近づくにつれて、その館の全貌が明らかになった。

大火事があったという話であったが、思った程損傷は見られない。

人が住むには十分な状態だ。

真相はレイの記憶のみぞ知るのだろうが、何かがおかしいのは明らかだった。

「俺と鈴華はここまで待つているから、用事があるなら済ませて来い。」

「ありがとうございます。」

俺とレイ、銀華さんの3人で館の門を潜る。

庭には花が咲き、芝生は綺麗に手入れされている。

この状況で考えられる答えは一つだ……

玄関のベルを鳴らす。

もし予感が当たっているなら——

“感じるんだろ？”

脳内で声が響く。

“兄弟、奴がいるのを感じてるんだろ？”

うるさい、少し黙っててくれ。

ゆっくりと目の前の扉が開く。

目の前に赤い絨毯が敷かれた巨大なホールが姿を現す。

「来客など何年振りだろうか、歓迎するよ。」

声の主はホールの中央に立っていた。

そうだ、奴だ。

初対面でもわかる、俺はこの男を知っている。

いや、知っているというよりは、刻まれているだろう。

「兄さんなの……?」

「そうだよ、レイ。よく帰って来た。」

青年はレイに微笑みかける。

「ユニス、リヴアイアス……」

「おや、君は初対面だね。」

ユニスは、今気づいたとばかりにこちらを見やる。

その瞳は刺すような冷たさを放っている。

「俺は桂木葉助、彼女をここまで護衛してきた者です。」

「なるほど、ご足労かけて済まなかったね。大事な妹をここまで連れてきてくれてありがとう。」

なんとというか、彼の反応は淡泊だ。

まるでレイの事しか見ていないように。

「いえ、むしろ遅くなつて申し訳ありません。」

「気に病む必要はないよ。客人を持って成したい所だが、我が館は修繕中でね。」

また後日という形でもよいだろうか？」

「俺は問題ないです。」

「——別に。」

銀華さんは短くそう答える。

何かを警戒しているという感じが窺える。

「近くの町の宿に部屋を取らせよう、準備が出来るまで好きに使つてくれて構わない。」
「色々ありがとうございます。」

俺と銀華さんは館を背にし、そのまま出ようとする。

急に右手に違和感を感じる

「葉助！」

どうやらレイが手を握ってきたようだ。

「どうしたんだレイ？」

「葉助、私……」

「折角の家族との再会だろ？ 俺に構ってる暇はないだろ？」

「違うんだ！ 私が言いたいのはそうじゃなくて——」

俺はレイの手を振りほどいて歩き出す。

きつと記憶が曖昧で不安なんだ。

そんな不安を消せるのは俺じゃない。

本物である彼女の兄なのだ。

「葉助！」

「また今度な。」

俺は振り向かずにそのまま館を後にした。

「彼女を置いて来てよかったの？」

少女の姿のレイが俺に語り掛けてくる。

「俺よりも家族の方がいいだろ？」

「本気で言ってるの？」

「もちろんだ、所詮俺じゃ家族ごっこだしな。」

「そうやって自分に嘘をつくんだ。」

「どういう意味だよ。」

少女のレイはその瞳に涙をためていた。

俺には彼女の怒りも悲しみも分らない。

俺が嘘をついているだと？ そんなわけがない。

これが俺が求めた、最高の結果だ。

「いいぜ兄弟、今のお前は最高だ。」

男の声がした方を向く。

そこには館にいたユニスを全く同じ姿の男がいた。

「お前が俺の中のユニスの遺伝子か。」

「ああそうだ。俺を見て何も思わないか？」

「別に何も——まてよ。」

男はニヤニヤと笑っている。

「なんで、こいつは同じ姿なんだ？」

「遺伝子達の姿が、採取した時と同じ時間ならば……」

「ユニスはもっと年老いていなければおかしいのではないか？」

「何かに気づいたって顔だな。」

「お前達の姿は、採取した時の年齢で間違いないのか？」

「そうよ。」

「そうだぜ。」

そうか、ならば今日会った男は誰だ？

「気になるだろ？ 心配だろ？」

「お前、知っていたな。」

「なーに言ってるんだ、お前も気づいてたくせに。」

俺が？

“ 葉助！ ”

あれがもし、レイからのSOSだったのなら俺は――

「最低だ……」

「この結果を招いたのは、貴方の嘘が原因よ。」

「だから嘘ってなんだよ！」

「——分かつてるくせに。」

そう言つて彼女は姿を消した。

「なあ兄弟、もう少し自分の欲望に素直になつたらどうだ？
昔のお前の方が輝いてたぜ。」

男もそう言い残して姿を消す。

暗闇の中一人だけ取り残される。

「俺は、僕は——」

“ 彼女を守りたい ”

その気持ちで僕は戦つてきたんだ。

そうだ、そのために人だつて殺してきた。

全ては彼女のため、そう自分に言い聞かせて来た。

“なら、僕の本質とはなんだ？”

僕は彼女にとって何なのだろうか？

僕は、どうしたかったんだっけ？

—

「おーい、聞いてるか？」

「——え？」

「お前が居眠りなんて珍しいな。」

そこは見慣れた教室。

横にはレイと健司がいた。

「レイ、健司……」

「なんだあ、変な夢でも見たか？」

「そうか、夢か——」

「今までののは悪い夢、そうさ夢だったんだ。」

「大丈夫か葉助？」

「レイが心配そうに僕を見ている。」

「良かった、あれは全部無かったんだ。」

「これから僕は、また楽しい学生生活を——」

「あれ、おかしいな……」

「涙が溢れてくる。」

「ちつとも悲しくなんてないのに。」

「なあ葉助、お前はとうしたい？」

「な、なにを？」

いつになく神妙な面持ちで健司が語ってくる。

「これからだよ、卒業したら何したい？」

「そ、卒業なんてまだまだ先だろ！」

「葉助、何を言ってる？ 卒業式は半年後だぞ。」

レイが呆れたように言う。

え、卒業？

だって僕達はまだ1年で――

「俺さ、誠さんの元で働く事になったんだぜ！」

「やるな健司、私は父の助手をする事になった。」

「親のコネかよ！」

知らない、こんなの僕は知らない。

「で、葉助はどうなんだよ？」

「僕は……」

二人は僕を見つめて答えを求めている。

違う、僕は……

「まさか、何も決まっていけないわけじゃないだろう？」

「葉助、早く教えてくれ。」

「——何も無かったんだ。」

そうだ、無我夢中で、何も考えてなくて……

ただ君だけを見ていた。

そんな学生生活だったなあ。

なのに今の僕は、建前だけのつまらない男になってしまった。

レイの記憶の事も責任を感じて、何かと遠慮してしまう。

そして一番は、自分はユニスの代わりでしかないという思いだ。

真実を知らなかった当時の僕には、そんな遠慮は無かった。

「これが、僕の嘘か。」

そうさ、代役を全うするために自分の気持ちを閉じ込めた哀れな男が僕だ。

「やっとわかったか兄弟。」

「やっと本音が言えたわね。」

目の前にいた健司とレイの姿が変化する。

どうやら僕のためにお膳立てをしてくれたようだ。

「うん、僕の気持ちを思い出せたよ。」

「なら、やる事は分かるな？」

「ああ、分かる。」

そうだ、僕は――

“彼女が好きなんだ”

ユニスのためとか、戦わせたくなかったとか、そんな建前は関係ない。
惚れた女のために戦う、それだけだったんだ。

なら、やる事は決まってる。

あいつが本物のユニスかどうか、そんな事”どうでもいい”。
惚れた女を取り戻すだけだ！

例えそれが、彼女を悲しませる事になってもいい。

もう考える事はやめる、今はこの思いに素直でいたいんだ！

思いのままに

夜道を駆け抜け、俺は屋敷の前まで戻って来た。
夜の屋敷は昼間と比べ不気味さを増している。

「いい加減出てきて下さいよ。」

「……」

後ろの茂みから銀華さんが出てくる。

宿からずつとついて来ているのには気づいていた。

「どうしてついて来たんですか。これは俺の問題です。」

「私には関係ないな、勝手についてきただけだ。」

「そもそも貴女には！」

「それは私が決める事だ。お前への借りを返してからゆっくり考えるさ。」

どうやら意地でも戻る気はないようだ。

俺はため息をついて歩き出す。

銀華さんもその後ろに続いた。

「やはり玄関の扉は開かないか。」

「隣の窓を割って入るか？」

そうやって銀華は窓に向かって銃口を向ける。

「少々手荒だが、問題ないか。」

「よし、いくぞ。」

そうやって2発銃弾を撃ち込む。

張つてあつた魔法障壁を貫通し、窓ガラスが砕け散る。

そこから屋敷の中に飛び込み、背中合わせて周囲を確認する。

敵影なし、魔源マナの反応もなし。

レイ、どこにいる……

「微量だが魔源^{マナ}の反応がある、3階だな。」

「畏^{オソ}の可能性は？」

「それにしても微量すぎる。しかし、警戒するに越したことはないな。」

「なら行きましょう。」

フエンリルのグリップを握りしめ、ホールの階段を駆け上がる。

相変わらず人の気配は感じられない。

通路に何体もの甲冑が飾られている。

「この先だ。」

その言葉に背を押されて、俺は前に進む。

きつとこの先に——！

目の前の大きな扉を開け放つ。

「葉助！」

そこには、礫にされたレイがいた。

扉の先は、礼拝堂のような部屋になっていた。

その部屋の奥で、レイは十字架に礫にされていた。

純白のドレスを身に纏い、まるで花嫁衣裳のようだ。

そして、その男もそこにいた。

「おや、まだ招待状は出していなかったはずですが？」

「俺の気が変わった、レイは返してもらおう。」

面白いものでも見たかのように、ユニスは声を上げて笑い出した。

非常に癪に障る笑いだ。

「いや失礼、君の反応があまりにも愉快だね。」

俺は躊躇なくフェンリルの引き金を引く。

ユニスは飛来した弾丸を、手にした剣で両断した。

「レイ悪い、先に謝っておく。」

「葉助？」

「俺はこいつを殺してでも、お前を手に入れる。」

もう自分には嘘はつかない。

そして俺の邪魔をするなら、誰であろうと排除する。

それが自分のオリジナルであろうと。

「ククツ、出来るならやってみるがいい。」

「言われずとも！」

フエンリルの引き金を引き、2発の弾丸を撃ち出す。

「アクセラ
加速」

2発目の弾丸が加速し、1発目の弾丸に接触する。

それと同時に魔法が発動し、1発目の弾丸は掻き消える。

“サンダーウエーブⅢ！”

敵の魔法障壁を貫通し、目の前で複合魔法を発動させる。
さすがに相手も、こちらの攻撃への対処が遅れる。
全身の魔源——緑！

“トルネードⅢ！”

その隙に乗じて、魔法で追い打ちをかける。

「早い、人間の発動速度ではないぞ！」

銀華さんも驚きを隠せないでいる。

鈴華ちゃんの言葉通り、俺は訓練を続けていた。

その結果、今まで以上の発動速度を身に着け、体力の消費も抑えられるようになった。ユニスの身体は大きく吹き飛び、壁へと激突した。

「立て、まだ死んではないだろう？」

俺はフェンリルを構えてユニスへと狙いをつけた。

「成程、クロトの玩具は予想以上の出来だ。」

「まだ、話せるくらいには元気のようなだな。」

もう一度、2発の弾丸を撃ち出す。

これをまた掛け合わせ、複合魔法で攻める。

「無駄だよ。」

加速させる前に銃弾が空中で静止する。

違う、これは……

「魔法障壁か。」

距離にして30mといった所か。

通常の魔法障壁は、5m前後にしか展開出来ない。

それだけ相手が桁違いなのか、あるいは――

「お前が考えている以上に、私は化け物だよ。」

「そっか、やっぱり無理だよな。」

俺はフエンリルをホルスターに戻り、代わりにヘイムダルを取り出す。

ロングバレルと拡張マガジンを装着し、いつもとは仕様を変更してある。

勿論、この仕様変更には意味がある。

「少しでも余力を残して、レイとの時間を増やしたかったんだけどな。

そう上手くいくわけないよな。」

「ほう、まだ私に勝つ気にいると?」

ユニスは剣を構え直し、こちらの出方を伺っている。

「銀華さんは手出ししないでください、すぐに終わらせますから。」

今のヘイムダルは、マシンピストルのようなものだ。

引き金を引き、装填されてある弾丸を一気に吐き出す。

今の俺には、弾丸に込められた魔源マナの色が鮮明に見える。

「各属性で収束——目標ユニス！」

無数の弾丸は4つのグループに別れ、それぞれ機動を変えながらユニスに向けて飛んでいく。

イリユージョンバレット
奇術 弾の自己流アレンジだ。

今の俺ならば、銀華さんのように弾丸を全て自由にコントロール出来る。

「ここまでは、既に人間の枠を超えているわけだな。」

——強烈な魔源マナの流れだ。

おそらくは、強力な魔法で全ての弾丸を魔法発動前に消滅させるつもりらしい。敵の魔法障壁を貫通するまでは、俺が魔法を発動しないと踏んでの行動だろう。だが、俺の目的は違う。

“ コールダークネスⅢ！ ”

“ ユニオンエクストリーム！ ”

弾丸を接触させ、敵の魔法障壁付近で光と闇の魔法を発動させる。

その威力に、相手の魔法障壁に穴が出来た。

その穴を、ファンタムバレット幻影弾で消した銃弾を通過させる。

そしてあとは——

“ ウインドカッターⅢ！ ”

相手の肉を食い破り、その身体をミンチにするだけだ。

いくつもの弾丸が、ユニスの体内に飲み込まれては弾けた。残ったのは彼だったものの肉片だけである。

俺はレイの元に駆け寄り、両手の鎖を外した。

「無事で良かった。」

「——来るのが遅い！」

「ゾメーン……」

その瞳に涙を浮かべながらも強気な返事を返してくる。

それでも、彼女は俺を待っていてくれたのだろう。

「来てくれたから許す。」

「ああ……」

「お前達、いちやつくのはいいがそろそろ脱出するぞ?」

銀華さんが呆れ気味に脱出を提案してくる。

レイを取り戻せたのだ、もうここに用はないだろう。

「全く、能天気なものだな。」

「——え？」

それは、聞こえてくるはずのない声だった。

「クロトの研究成果をみくびっていたよ。まさかこれ程の性能を示すとは。」

「ユニスなのか!？」

そう、この声は間違いなくユニスのものだ。

しかし、肉片となった彼が言葉を発する事が出来るわけではない。

「その問いに答えるならばノーだ。」

散らばった肉片が、もぞもぞと一か所に集まっていく。

そのおぞましい光景に、全員動く事が出来なかつた。

やがて人型となり、ソレはユニスの姿へと戻っていた。

「やれやれ、まさか人間ごときが時空龍の紛い物レベルにまでなるとはな。

もう少し彼の研究に付き合うべきだったか。」

「貴様、本当に人間か？」

「ククツ、私を人間だと？ 冗談は程々にしてくれ。」

ユニスの纏う雰囲気、先ほどとは明らかに違う。

まるで今までは遊びだったと思わされる程だ。

「この感覚どこかで——」

「銀華さん？」

「まだ気づいてなかったのかい？ よーく父上が死んだ時の事を思い出したまえ。」

銀華さんの表情が怒りへと塗りつぶされていく。

「貴様！ 陽甲か！」

「その頃は、そんな名だったかな。」

「葉助、ここからは私も戦わせてもらう。こいつは私の一族滅亡のきつかけを作った糞野郎だ。」

明らかに銀華さんの目つきが変わる。
それは激しい憎悪の目である。

「銀華さん、奴は何者なんですか。」

「私達と同じようなものだ、しかもとびつきり夕子の悪いな。」

私が殺したと思っただが、まさか生きていたとはな。」

「その言葉はそっくりそのままお返しさせてもらうよ。」

では、第二ラウンドを始めようか！」

圧を感じる程の魔源マナのうねり。

これが奴の本気だともいうのか。

「レイ、こいつを倒したらお前に伝えたい事がある。」

「葉助？」

「だから、それまでこいつを預かっていてくれ。」

そう言つて、俺は弾切れになつたフェンリルを手渡した。

「わかつた。」

レイはフェンリルを握りしめ、力強く頷いた。

時空龍殺し

周りの魔源マナの流れは衰える事を知らない。

「この感じはどこかで——」

「奴め、龍の姿になる気だ。」

「時空龍でもないのに、龍の姿になれるんですか!?!」

「奴はロキアだけに存在する龍なんだ、根本的には私達と同じだ。」

「そうやって銀華さんは、一歩前へと歩み出す。」

「だからこそ、奴に対抗するには私も——」

「それはダメだ! 銀華さんには……」

「分かっている、それでも今はやらなければならない時だ。お前にも分かるだろう?」

「そうだ、俺にも分かっている。」

こいつは必ずここで仕留めなければならない相手だと。そして、そのためには互いに死力を尽くさねばならないのだ。生還は二の次、やるべき事をやれ、そう言うのだ。

「ああ、そうだよ。後先考えずにやるしかない。」

「ふん、こいつを使え。」

銀華さんが残りの弾をケースごと投げってくる。

俺はそれを両手で受け止めた。

「ここから先の戦闘では用済みだからな、お前が派手に使え。」

「——はい！」

「グウウウ！」

ユニスが唸り声を上ゲながら龍へとその姿を変えていく。その巨体に、礼拝堂が崩れていく。

「葉助！ 変身が終わったたら私の背に乗れ！」

「はいー！」

ヘイムダルへの弾の装填を終え、変身を終えた銀華さんの背中に飛び乗る。

「奴の龍の姿は初めて見るが——デカイな。」

見上げると奴はそこにいた。

銀華さんよりふたまわりは大きいかもしれない。

「でも、やるしかないんでしょ？」

「その通りだ、やるぞー！」

銀華さんは地面を蹴り飛び上がった。

風を切る感触。目の前には巨大な龍。

ヘイムダルのリロードを済ませ、敵を見据える。

「あいつにも強力な魔法障壁がある。どう対処するつもりだ？」
「とりあえず、先に強度を確かめる！」

ヘイムダルの引き金を引き、数発の弾丸を発射する。
敵との距離30m程で、やはり魔法障壁と接触した。
しかし、本来ならば貫通出来る弾丸が、そのまま塵と化する。

「あれは防ぐバリアってより、もう結界の域だな……」
「私が接近して奴の障壁を中和する、あとはやれるな？」
「やるしかないでしょ！」

“ コールダークネスⅢ！ ”

相手が何もしてこないわけもなく、こちらに向かつて複合魔法を唱えてきた。
銀華さんが魔法障壁を全開にして突撃していく。

相手の魔法障壁の前に辿り着くと、両手を突き出して爪を立てる。

「ひらけええー！」

魔法障壁同士が干渉し合う。

ありえない量の魔源マナが飛び交い、吹き飛ばされそうになる。

「させぬぞー！」

“ ユニオンエクストリーム！”

中和の最中で動けない銀華さんに対して攻撃してくる。

まずい、このままでは二人共やられる。

俺が止めるしかない！

集中して、魔源マナを――

“ ユニオンエクストリーム！”

同じ魔法をぶつける。

力に差がある分こちらが不利だ。

だからこそ、上乘せしてやればいい。

俺はヘイムダルの引き金を引き、撃ち出した弾丸を加速させる。

ぶつけ合い、混じり合った魔源^{マナ}で魔法を発動させる。

“ ユニオンエクストリーム！”

ユニオンエクストリームの重ね掛けだ！

その威力は相手の魔法に届いた。

大きな爆発の光が起こり、対消滅を起こす。

「銀華さん！」

「おおおお！」

ガラスが割れるような音が響いた。

魔法障壁を抜けた今なら奴は無防備だ。

次の弾をリロードし、撃ち尽くすつもりで引き金を引く。

全ての弾を操作し、全方位から相手を狙う。

いくら龍の皮膚でもこれは耐えれないはずだ！

“ コールダークネスⅢ！ ”

“ ユニオンエクストリーム！ ”

弾丸を接触させ、光と闇の魔法を発動させる。

本当なら皮膚を貫通させて内部から発動したかったが、それは叶わなかった。それでもかなりのダメージにはなるはずだ。

「葉助、奴はどうやら元気みたいだぞ。」

「それでもダメなのか……」

光が収まって見えたのは、何事も無かったように佇む龍の姿だった。

「終わりか、もう少し楽しめると思ったがな。」

やはり内部からの攻撃でなければ、決定打にはならないか。

——方法は一つしかない。

「銀華さん、最後に一つだけ試したい事があります。」

「ほう、何かアイディアがあるのか？」

「はい、とびっきりのやつが。」

「なら、それに賭けようか！」

銀華さんは翼を羽ばたかせて高度を上昇させる。

「奴の頭部まで近づいてもらえれば、あとは俺がやります。」

「当てるにしてください。」

再び速度を上げ、奴へと近づいていく。

「無駄な足掻きだ、お前達に勝ち目など無い。」

「それはやってみなきゃ分からないぞ！」

龍の放つ魔法攻撃を華麗に避けながら、その距離を縮めていく。

あと少し、あと――

“ トルネードⅢ！ ”

「んぐっ！」

「銀華さん！」

銀華さんが魔法の直撃を受けてしまう。

「いけえ！」

“ ウィンドウェアⅢ ”

脚力を強化し、大きくジャンプする。

よし、届いた！

ヘイムダルを構えて照準を合わせる。

いくら強固な鱗に覆われていようと、口からの攻撃は耐えられないはずだ！

俺は全ての魔源^{マナ}を集中させ弾丸に込める。

おそらくは誰もやった事の無い魔法。

全ての属性の魔源^{マナ}を混ぜ合わせる魔法。

何が起こるか分からないが、こいつを倒すには丁度いいだろう。

「これで終わりだ！」

俺は渾身の力を込めて引き金を引いた。

撃ち出されたのは弾丸では無かった。

光が束になって銃口から発射されたのだ。

その光は次第に大きく、太くなっていく。

4色が連なり、まるで虹のようだ。

「ぐっ、この程度で！」

魔法障壁を全面に集中させ、俺の攻撃を受け止める。

「うおおおお！」

1枚、また1枚と、重ねられた魔法障壁を貫通していく。

その反動はすさまじく、両手でしっかりと魔銃まがんを握っていないと吹き飛ばされそう
だ。

身体が空中で静止しているのも、そのおかげだろう。

——残り1枚！

その時だった。

何かが砕ける音が手元で響いた。

その凄まじい威力に耐えられずに、ヘイムダルが砕けたのだ。

「しまった……」

「どうやらここまでのようだな。」

推力を失い、体が地上へと落下していく。

その俺に向けて、奴は大きな口を開いた。

「我が炎の息で消し炭となるがいい。」

あと一息なんだ、こんな所で！

奴の口元にエネルギーが収束するのが分かる。

ものの数秒で、俺はこの世から消滅するだろう。

「レイ……！……！」

「葉助！」

背後から銀華さんの声がする。

後ろを振り向くと、傷まみれの銀華さんの姿が見えた。

「こいつを使え！」

銀華さんが何かを投げてよこす。
俺はそれを右手で掴み取った。

「——これは。」

魔銃^{まがん}・ロキだ。

中には弾が1発だけ込められている。

「お前を倒すのに、この1発で充分だな。」

右手を掲げ、奴に狙いを定める。

全ての魔源^{マナ}を収束させて、一つに——

“ 葉助 ”

これは幻覚だろうか？

健司、兄さん、皓月さん、ちよつとした知人や見知らぬ人達。色々な人達が見える。

「みんな、俺に力を貸してくれるのか？」

全員が頷く。

手元のロキが光り輝く。

「馬鹿な！ バハムートの光だと!？」

「これで、終わりだああ！」

人々の思いと共に、俺は引き金を引いた。

撃ち出された光は、先程と変わって真っ白になっていた。

その規模はくらべものにならない程大きい。

「私が、またこんな！ 馬鹿なあ!!」

奴の身体が光の束に飲み込まれる。

勝った……

薄れゆく意識の中、俺はそう確信した。

光の剣

— 助

声が聞こえる。

葉助。

誰かが俺を呼んでいる。

ゆつくりと瞼を開くと、以前にも見た真つ白な空間が広がっていた。そして、目の前には少女の姿のレイがいる。

「葉助、ありがとう。」

「ん……？」

「あの人を救ってくれて。」

あの人……？

ユニスが目の前に姿を現す。

俺の遺伝子から生まれた意思のユニスだろうか？

「残念ながら違う、私は本物のユニスだよ。」

「まさか、生きていたのか！」

魔法を唱えようとすると、レイがそつと唇に指を添えた。

「安心したまえ、私は最早残滓にすぎない。」

ただ最後にお礼を言いたかったのだ。」

「どういう事だ？」

「君は私の中で復活しようとしている邪竜を倒してくれた。」

結果、この世界も私も救われたのだ。」

「そんなつもりはない。俺はレイを手に入れるために戦っただけだ。」

そう、ただの自己満足だったんだ。

俺はレイのためだけに戦った、世界とかユニスの事とかどうでもよかった。だからついてきた結果に興味はない。

「ふふつ、それも悪くないだろう。」

それでも言わせてくれ、ありがとう葉助。」

「——ああ。」

ユニスの表情は、憑き物が落ちたように晴れやかな笑顔だった。

「では、私は逝くとするよ。——妹を頼んだぞ。」

「言われずとも。」

そのまま光の粒子となってユニスは消えて行った。

「葉助、カツコよかったよ。」

「そんな風に言われると照れるだろ！」

俺はレイから顔を背けた。

「ふふっ、最後のはまるで光の剣の勇者みたいだったよ。」

「なんだよそれ、童話か何かか?」

「ロキアを救った英雄の物語よ。 実在した人物なんだからね!」

ムキになって怒りだすレイをなだめる。

そんなに怒らなくても……

「はいはい、それで?」

「勇者は邪竜ティアマトを倒す時に光の剣を使うのよ。」

最後の光がまるで剣みたいだったから。」

「ふーん、成程ね。」

しかし邪竜か、何かの偶然なのだろうか?

ユニスも先程、邪竜という名を口にしていた。

「おいおい、いつまでやってるんだ？」

困った顔で、再びユニスは姿を現す。

多分、今度こそ俺の遺伝子の意思だろう。

「ごめんね、ちよつと話込んで。」

「まったく、もう時間が無いんだからな？」

「分かってる。」

何のことか分からないが、どうやら何かを急いでいるらしい。

「兄弟、はつきり言うがお前は今死にかけてる。」

「ああ、そんな気はしてた。元々死にかけてがあれだけ力を使ったんだからな。」

「その通りだ。だから、“あの時”と同じ事をもう一度やる。」

「“あの時”？」

3年前のあの出来事が思い出される。

そうだ、あの時俺は――

「つてわけで――」

ユニスはレイに手をかざす。

それと同時にレイの身体が光の粒子となって消え始める。

「ちよつと、何してるの!」

「作業はオレ一人で充分だ、お前はそろそろ“本体”に帰れ。」

「お前何を!」

止めようとするが、体が動かない。

どうやら本当に死にかけているらしい。

「大丈夫、こいつがいる本来の場所――レイの身体に戻すだけだ。」

「どういう意味だ。」

「元々お前の遺伝子から生まれた幻影だったが、自我を獲得したのは3年前のあの日だ。本物のレイの魔源^{マナ}を取り込んで生まれたのさ、彼女の記憶の一部も一緒にな。」

それでレイの記憶が欠落していたのか。

なら、彼女がレイの中に戻るといふ事は、記憶も戻るといふ事になるのか。

何か文句や罵倒をしていたが、やがてその姿は掻き消えた。

「さて、今からお前にオレの魔源^{マナ}全部を送る。

これでお前の身体は、あと5年程度はもつだろうさ。」

「そうか…… それで、お前はどうなる?」

「完全に消えるな。 まあ仕方ないさ、オレも元々幻影さ。」

そう言って笑う顔は、誰かを思い出させる。

「なあ、一つ聞いていいか?」

「なんだよ兄弟。」

「お前が俺の身体を使って暴れたって話、嘘なんだろう?」

「……」

3年前のあの時、幻影から意思を持つようになったと言っていた。

ならばそれ以前の事件である、火内先生を殺した時の暴走には関与していないはずだ。

「やっぱり優しいな、お前は。」

「よせよ、そんな間柄じゃないだろオレ達は。」

「ああ、そうだったな。」

ユニス——いや、彼の姿が粒子となって薄まっっていく。

「お前は、俺の一番の親友だ、ありがとう」健司。「」

「先に逝って待ってるぜ、葉助。」

消える最後の瞬間の笑顔は、彼本来の顔に戻っていた。

「――助！」

誰かの呼ぶ声で目が覚める。

「葉助！」

「ああ、レイか……」

目の前にはレイの顔があった。

涙に濡れ、俺を心配そうに見つめながら俺の名前を叫んでいた。

「葉助！ 私がわかるか!?!」

「ああ、分かるよ。」

「このっ、また無茶して！」

また泣かしてしまったな。

涙を拭おうと右手を上げようとするが、動かない。

「あれ……?」

確かに動くわけがなかった。

——肩から先が無いのだから。

おそらくは、あの光で吹っ飛んだのだろう。

奴を倒せた代償とでも言うのだろうか。

「出血は止めたが、あいつが来るまでは大人しくしていた方がいい。」

「銀華さんも、無事だったんですね。」

「ある意味ではな……」

銀華さんも全身傷だらけで、満身創痍という様子だった。

それでも、生きていてくれてよかった。

「葉助、私に言いたい事があるんだろ?」

「ああ、あるよ。」

「聞かせてくれ。」

俺は瞳を閉じ、一呼吸置く。

今までの事が走馬灯のように思い浮かんでは消えていく。

「レイ。」

「……なんだ？」

そうさ、俺はずっと――

「愛してる。俺と結婚してくれ。」

「――その言葉を待っていた。」

俺の戦いは終わった。

それは誰に語り継がれるわけでもない、名も無き戦士の物語。
しかし彼は世界を救ったのだ。

その真実を知る者は、ごく少数のみである。

無名の英雄

その後、黒翼さんによって俺達は 세인트ガルドの病院へと運ばれた。

どうやら銀華さんが、俺達の邪魔をしないように一服もついていたそうだ。

そのせいで到着が遅れたとかなり怒っていた。

俺は半年程ベッドでの生活を余儀なくされたが、無事退院することが出来た。

しかし、右腕はどうにもならなかった。

逆に魔源^{マナ}の扱いが更に上手くなったようで、それほど生活には困らなかった。

そうそう、退院後は無事にレイと結婚した。

数少ない身内を集めただけのひっそりとした式だが、俺達は幸せだった。

その後、レイは現 세인트ガルド市長との会見を経て、リヴァイアス家の本来の役目へと戻った。

最初は少し騒ぎになったが、それはそれでいい思い出だ。

俺は 세인트ガルド魔法学校に、特別講師として働く事となった。

真面目な子から、健司みたいなやつまで、色々な生徒と触れ合う事ができた。

少しだけ、キャシー先生の事が分かった気がする。

それとだ、俺にも子供が出来たんだ。
名前はヨキ。

まだまだやんちゃ盛りの男の子だ。

最近俺の魔銃まがんに興味津々のようで、よく触らせて欲しいとせがんでくる。
さすがに危険なので上手く誤魔化してはいるが。

こう振り返ると、俺はなんて幸せな人生を送っているのだろうかと思う。

昔の俺では全く思い浮かばないような理想の未来だ。

だからこそ、たまにこう思うんだ。

“俺は、こんなに幸せになっていいのだろうか”

この生活は何人もの犠牲の上で成り立っている。

その屍を踏み越えて、俺だけ幸せになっていいのだろうか。

あいつらは、俺を恨んではないのだろうか。

そんな不安がよぎるんだ。

“大丈夫だ、気にすんなよ”

ふと、誰かの声が聞こえた気がした。

「ああ、そうか。」

きつと、“彼”だ。

“もう、充分か？”

「充分、夢を見させてもらったよ。」

“そうか、なら良かった。”

ああ、俺はこんなにも、幸せだ……

多くの人に囲まれ、必要とされ、愛する家族を手に入れ――

“それはお前が勝ち取ったもんだよ。”

「そうかな？」

“そうさ、そのために戦ってきたんだろ？”

「そうだな。」

“ ならいいんだよ。それがお前の物語だ。 ”

俺の、物語か。

“ そろそろ、いくか。 ”

「ありがとう——」

俺は、そのまま、ゆっくりと瞼を閉じた——

「もう、なんでダメなのさー！」

「ダメと言ったらダメだ。」

「お父さんの意地悪！」

それは些細な親子喧嘩だった。

娘の鈴華は冒険に出たいが、父の黒翼がそれに反対しているのだ。

「お前はまだ子供なんだぞ？ そんな事俺達が賛成するわけないだろう。」

「お母さんはいいつて言ってくれたよ！」

「——冗談だろうか？」

黒翼にとって、銀華の行動は未だに読めない。

若き頃から突拍子もない事ばかりを起こす。

今だつて旅に出る事を了承するなんて事をやらかしている。

「嘘じゃないよ！ 帰ってきたら聞いてみればいいじゃない！」

「ああ、そうする。」

あの時もそうだが、今後も彼女には頭を悩ませそうだ。

俺は頭を抱えながら大事な娘を見る。

この子はどうかやら旅に出る気満々のようだ。

こういう所は、彼女に似たんだろうなとは思う。

「はあ……」

黒翼は大きなため息をついた。

「お久しぶりです、銀華さん。」

「ああ、そうだな。」

レイと息子のヨキ、銀華は共同墓地にいた。
互いの手には花束が握られている。

「もう1年か。」

「そうですね。」

——しばしの沈黙。

先に口を開いたのは銀華だった。

「頼まれていた品の修理が終わったぞ、材料がなかなか手に入らなくて大変だったが。」

そう言いながら、目の前の墓に花を添える。

「まさか1年も待たされるとは思いませんでしたよ。」

レイも同じように花を添える。

「すまないな、でもこいつとの約束はこれで果たしたよ。」

「約束？」

「ああ、こいつを息子に渡したいとな。」

そう言つて修理された魔銃まがんフェンリルをレイに手渡した。

まるで新品のように綺麗な姿を取り戻している。

「その事は初耳です、ただ修理を頼んだとしか聞いてなかったのです。」

「——こいつらしいな。」

銀華はポケットから煙草を2本取り出し、魔法で火をつける。

1本は自分の口元に、もう1本は墓へと備える。

「お前も好きだったろ、私からの餞別だ。」

「……」

「私も近いうちにそっちに逝くさ、待っててくれ。」

銀華は立ち上がるとレイに背を向けた。

「その魔銃^{まがん}をどうするかは、お前さんに任せるよ。」

「はい、ありがとうございます。」

レイは深々と頭を下げた。

—ヴィラン・ラタトクス学園—

「そして時空龍と我々人類の間に条約が結ばれ、戦争は回避されたのです。」

教室での授業風景。

教師の女性が近代史の教科書を読み上げている。

多くの者が授業に集中する中、一人だけ窓の外を眺めている者がいた。

「——せいっー！」

女教師はチョークを投げつけると、窓際の生徒の頭部にクリーンヒットする。

「いてっー！」

「お前！ 今話を聞いていたか！」

「す、すみません。」

「まったく、まるで——」

女教師は誰かを思い浮かべ、頭を振って振り払った。

その者の名を口にしてはいいけない、それが決まりだったからだ。

「先生は、その戦いにも参加してたんでしょう？」

「そうよ、旦那——学園長と共にね。」

正直、死を覚悟していた。

カスパ・ラグナールの策が間に合ったのは奇跡としか言いようがない。

「じゃあ、〃無名の英雄〃ってどんな人だったんですか？」

「そうね、彼は〃普通の人間〃だったわ。どこにでもある——そう、あなた達みたいなね。」

そうだ、彼はただの人間だった。

生まれがどうであろうと、私の可愛い教え子だったのだ。

「でも、卓越した魔法の才能を持ってたんだろ？」

「そうね、でもそれと英雄になる事は別でしょ？」

「確かに……」

そもそも、彼はそんな事を求めてはいなかった。

ただ生き残るために必死で足掻いて、答えを探していたのだ。

そして私は、そんな彼に何も出来なかった。

私に出来るのは、名を伏せて彼を語り継ぐ事だけだ。

それが、彼の代わりに戦って死んだ皓月との約束でもある。

「ラグナール先生！ “無名の英雄” は最後までどうなったんですか？」

「そこは教科書には記載されていないわね…… いいわ、特別に教えてあげる。」

女教師——キャシー・ラグナールは、一呼吸置いて口を開いた。

「彼はね、安息の地に旅立ったのよ。そこは争いの無い平和な世界。

残りの余生を静かに暮らしたかったのね。」

「へえ、なんだがおとぎ話みたいですね。」

「別な世界でも平和のために戦ってるかもしれないぜ!？」

「確かに、それも有りうるわね。」

想像を膨らませ、生徒達の憶測が飛び交う。

彼らの頭は“無名の英雄”の事で一杯のようだ。

「さて、授業を続けるわよ!」

ドラゴンスレイヤー
時空龍殺しとして語られた彼は、今は無名の英雄として語られる。

これで少しは役に立てたのかしら……

ねえ葉助、貴方は幸せになれたのかしら？

“ありがとう、先生”

ふと、声が聞こえた気がした。

風に乗って桜の花びらが飛び散る。

平和な日が、今日もまた始まる。

—完—

—セレニティア・セイントガルド謁見の間—

謁見の間に、一人の青年と跪く3人の男達がいた。

「面を上げてください、お願いするのはこちらの方です。」

そう青年が言うと、3人の男達は顔を上げた。

一人は短髪のブロンドの髪、色黒の肌、鍛えられた肉体と戦いで傷があちこちに見られる。

まさに戦士という感じの偉丈夫だ。

もう一人は、黒髪短髪、同じように色黒の肌に鍛えられた身体。

やや軽薄な雰囲気だが、こちらでも歴戦の戦士なのだろう。

最後の一人は、2人に比べてやや細身の体に、長い銀の髪が目を引く。

聞いた話では学者としての仕事が本職だが、剣の腕はロキアでも指折りらしい。

この3人は、ロキア国王がお送りになられた精鋭の戦士達だった。

「端的に話すと、貴方達には人質となっている私の母を救ってもらいたい。」

「我々が呼ばれるという事は、並の魔物ではないと？」

「はい、自らを四魔将・アグスと名乗っています。」

四魔将は歴史の教科書にも出てくる程の名前である。

彼らは竜帝ティアマトの腹心として、暗黒時代に暴れまわったと記載されている。

本物なのかどうかは分からないが、万が一を考えロキア国王へと救援を依頼したのだ。

「伝説の魔物か、俺らの相手には十分じゃねえか。なあゼロス？」

「調子に乗るなカイル、本物かどうかは分からないが強力な相手に間違いはなさそうだ」

ぞ。」

「2人共、領主の前だだ、口を慎め。」

銀髪の戦士が一喝すると、2人の戦士は口を閉じる。

「ゼロス、カイル、エリクの三名にお願いします、私と共に母を救うために戦って下さい。」

「領主自ら戦いに赴くと?」

エリクと呼ばれた銀髪の男が不思議そうに問う。

「当然、元は私一人で戦うつもりでしたので。」

そう言つて青年は腰に差した剣に触れる。

青年もまた、戦士なのだ。

母親似の整つた顔立ちは女性のようにも見える。

父親と同じ黒髪で、その長さは腰まで伸びている。

青年は、懐に閉まってあるもう一つの得物を取り出す。
それは“魔銃^{まがん}・フェンリル”であった。

“父さん、母さんを助けるために力を貸して下さい”

フェンリルをしつかりと握り、青年は前を見据えた。

「さあ、行きましょう！」

魔銃^{たましい}は受け継がれ、父と同じように子もまた戦いへと赴く。

この戦いの歴史に、終わりが来る事があるのだろうか……

— Continue to the Borderline —